東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－5－

福岡県京都郡苅田町所在遺跡群の調査

岩屋古墳群
上片島遺跡群

2013

九州歴史資料館

東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－5－

福岡県京都郡苅田町所在遺跡群の調査

岩屋古墳群
上片島遺跡群

2013

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成19年度から23年度にかけて行った、京都郡苅田町上片島に所在する岩屋古墳群ならびに上片島遺跡群の調査の記録です。

岩屋古墳群は平尾台山系から伸びる舌状台地上に立地しており、今回の調査では古墳時代前期に属すると考えられる3基の古墳の調査を行いました。残念ながら盗掘などのため遺物の出土は少量でしたが、3基を含む古墳群全体の展開を考える上で貴重な資料となりました。

上片島遺跡群は小波瀬川中流域の丘陵上に立地しており、今回の調査では弥生時代終末期から古墳時代後期まで連綿と続く集落が確認され、また、古代～中近世の遺構も検出されました。なかでも、弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の円形住居跡、瀬戸内系の土器を持つ住居跡や初期須恵器を持つ住居跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が学術研究、教育とともに、文化財愛護思想の普及･定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々のご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝申し上げます。

平成25年3月31日

九州歴史資料館

館　長　西谷　　正

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡苅田町上片島に所在する岩屋古墳群ならびに上片島遺跡群の調査記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第5集にあたる。

2．発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施し、整理報告は同社の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

3．本遺跡は、東九州自動車道福岡工事事務所管内の第8・9・11・12地点に当たる。

4．本書に掲載した遺構写真の撮影は岩屋古墳群については進村真之が、上片島遺跡群については城門義廣・大森真衣子・藤島志考が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社・東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。

5．本書に掲載した遺構図の作成は、調査担当者が行い、発掘作業員が補助した。

6．出土遺物の整理作業は文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、濱田信也・新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。

7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・蓑島・中津・田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標Ⅱ系による座標北である。

9．平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。

10．本書の執筆はⅢを進村が行い、その他の執筆・編集は城門が行った。なお、木製品の樹種鑑定については小林啓が行った。

目　次

序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査・整理の組織…… 4
Ⅱ　位置と環境…… 6
Ⅲ　岩屋古墳群……１１
　1　調査の経過……１１
　2　遺跡の概要……１２
　3　遺構と遺物……１２
　　(1)　１号墳……１２
　　(2)　８号墳……２４
　　(3)　２号墳……２７
　4　まとめ
　　(1)　１号墳……３５
　　(2)　８号墳……３５
　　(3)　２号墳……３５
Ⅳ　上片島遺跡群……３７
　1　調査の経過……３７
　2　遺跡の概要……４１
　3　遺構と遺物……４１
　　(ⅰ)　１地区……４１
　　(ⅱ)　２地区……５１
　　(ⅲ)　３地区……５２
　　(1)　竪穴住居跡……５２
　　(2)　掘立柱建物跡……９２
　　(3)　土坑……９２
　　(4)　溝……９９
　　(5)　土壙墓……１０６
　　(6)　その他の遺構……１０９
　4　まとめ
　　(1)　遺跡の周辺環境……１１４
　　(2)　検出遺構について……１１４

A) 住居跡について……114
円形を呈する弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡について……116
B) 焼土坑について……117

図版目次

図版1 1 岩屋古墳群遠景（南から） 2 岩屋古墳群遠景（南西から）
図版2 1 1号墳（町教委トレンチ再掘削後：南から） 2 1・8号墳完掘後（南から）
図版3 1 1号墳完掘後（空中写真） 2 2号墳完掘後（南東から）
図版4 1 1号墳調査前全景（南西から） 2 1号墳1号主体部検出状況（南西から）
3 1号墳1号主体部焼土面検出状況（南西から）
図版5 1 1号墳1号主体部土層（北西から） 2 1号墳1号主体部土層（西から）
3 1号墳1号主体部完掘後（南東から）
図版6 1 1号墳2号主体部（東から） 2 1号墳2号主体部完掘後（南西から）
3 1号墳3号主体部検出状況（北から）
図版7 1 1号墳3号主体部土層（西から） 2 1号墳3号主体部土層（北から）
3 1号墳3号主体部完掘後（南西から）
図版8 1 1号墳Aトレンチ土層（西から） 2 1号墳Bトレンチ土層（東南から）
3 1号墳Bトレンチ土層（西から）
図版9 1 1号墳Cトレンチ土層（西から） 2 1号墳Dトレンチ土層（北から）
3 1号墳C－Dトレンチ間№1土器出土状況(西から)
図版10 1 2号墳調査前全景（北東から） 2 2号墳1号トレンチ（東から）
3 2号墳1号トレンチ（南東から）
図版11 1 2号墳2号トレンチ（北から） 2 2号墳2号トレンチ（北から）
3 2号墳表土除去後（南から）
図版12 1 2号墳表土除去後（北西から） 2 2号墳主体部検出状況（南東から）
3 2号墳主体部土層（南東から）
図版13 1 2号墳主体部土層（南西から） 2 2号墳主体部付近トレンチ（南西から）
3 2号墳1号石棺墓（北から）
図版14 1 2号墳1号石棺墓（北から） 2 2号墳1号石棺墓完掘後（北から）
3 2号墳1号石蓋土坑墓（南東から）
図版15 1 2号墳1号石蓋土坑墓完掘後（北東から） 2 2号墳1号土坑墓検出状況（北から）
3 2号墳1号土坑墓完掘後（北から）
図版16 1 8号墳1号主体部（北北西から） 2 8号墳1・2号主体部（北北西から）
3 8号墳1号主体部（南から）
図版17 1 8号墳2号主体部（北西から） 2 8号墳1号主体部（南から）
3 8号墳1・2号主体部土層（南から）
図版18 1 8号墳1号主体部土層（北から） 2 8号墳2号主体部土層（南から）

3　8号墳1・2号主体部（東から）
図版19　1　8号墳1号主体部（北から）　2　8号墳2号主体部（南から）
3　8号墳1号主体部粘土検出状況（東から）
図版20　1　8号墳1号主体部完掘後（東から）　2　8号墳2号主体部完掘後（東から）
3　8号墳№2周溝土器出土状況（西から）
図版21　1　8号墳東西ベルト西側（北から）　2　8号墳東西ベルト東側（北から）
3　8号墳南北ベルト北側（西から）
図版22　岩屋古墳群出土土器
図版23　1　調査区より南側を望む　2　8・9号住居跡周辺全景（上から）
図版24　1　26～28号住居跡周辺全景（上から）　2　1～4号溝周辺全景（上から）
図版25　1　1地区全景（北から）　2　Aトレンチ全景（南から）
3　Aトレンチ南壁（北から）
図版26　1　Bトレンチ全景（南から）　2　Bトレンチ杭列（西から）
3　Cトレンチ全景（東から）
図版27　1　Dトレンチ南壁（北から）　2　Eトレンチ全景（西から）
3　Eトレンチ東壁（南西から）
図版28　1　2地区全景（北から）　2　3地区全景（Ⅲ区、南から）
3　3地区全景（Ⅳ－2区、南から）
図版29　1　1号住居跡検出状況（南から）　2　1号住居跡完掘（西から）
3　1号住居跡炉跡（西から）
図版30　1　2号住居跡P－1出土状況（西から）　2　3号住居跡完掘（南から）
3　3号住居跡炉跡（北から）
図版31　1　4号住居跡完掘（西から）　2　5号住居跡出土状況（東から）
3　5号住居跡P－1土層（南から）
図版32　1　5号住居跡P－1出土状況（北から）　2　6号住居跡完掘（東から）
3　7号住居跡焼土（東から）
図版33　1　8・9号住居跡検出状況（北から）　2　8号住居跡北壁（南から）
3　8号住居跡西壁（東から）
図版34　1　8号住居跡東壁（西から）　2　8号住居跡炉跡（南から）
3　8号住居跡西側完掘（東から）
図版35　1　9号住居跡東壁（西から）　2　9号住居跡南壁（北から）
3　9号住居跡P－1出土状況（東から）
図版36　1　8・9号住居跡完掘（北から）　2　10・11号住居跡検出状況（東から）
3　10号住居跡貼床粘土検出状況（東から）
図版37　1　10号住居跡炉跡検出状況（西から）　2　10号住居跡炉跡出土状況（北から）
3　12・13号住居跡完掘（北から）
図版38　1　12・13号住居跡完掘（東から）　2　12号住居跡出土状況（西から）
3　12号住居跡出土状況2（西から）
図版39　1　12号住居跡出土状況3（西から）　2　14号住居跡出土状況（東から）
3　14号住居跡出土状況2（西から）

図版 40　1　14 号住居跡出土状況 3（北から）　2　14 号住居跡出土状況 4（北から）
3　14 号住居跡出土状況 5（東から）
図版 41　1　15 号住居跡完掘（西から）　2　15 号住居跡出土状況（北から）
3　16 号住居跡東側完掘（西から）
図版 42　1　15・16・32 号住居跡完掘（南から）　2　18 号住居跡完掘（南から）
3　19 号住居跡完掘（北西から）
図版 43　1　20 号住居跡完掘（北東から）　2　20 号住居跡カマド土層（南西から）
3　20 号住居跡カマド（南東から）
図版 44　1　20 号住居跡屋内土坑土層（南西から）　2　20 号住居跡屋内土坑完掘（南西から）
3　21 号住居跡完掘（西から）
図版 45　1　22 号住居跡西壁（南東から）　2　22 号住居跡完掘（北東から）
3　22 号住居跡屋内土坑土層（南西から）
図版 46　1　22 号住居跡屋内土坑出土状況（北西から）　2　23 号住居跡南壁（北東から）
3　23 号住居跡南壁 2（北東から）
図版 47　1　23 号住居跡北壁（南東から）　2　23 号住居跡完掘（北西から）
3　23 号住居跡出土状況（南東から）
図版 48　1　23 号住居跡屋内土坑土層（南西から）　2　24 号住居跡東半上面（南西から）
3　24 号住居跡東半完掘（南から）
図版 49　1　24・26 号住居跡完掘（北から）　2　24 号住居跡 P-2 出土状況（西から）
3　24 号住居跡 P-1 出土状況（西から）
図版 50　1　24 号住居跡炉跡土層（北東から）　2　24 号住居跡炉跡出土状況（西から）
3　25 号住居跡北壁（南西から）
図版 51　1　25 号住居跡東半出土状況（西から）　2　25 号住居跡西半完掘（西から）
3　25 号住居跡西半出土状況（西から）
図版 52　1　25 号住居跡粘土カマド（南東から）　2　25 号住居跡屋内土坑出土状況（北西から）
3　26 号住居跡焼土検出状況（北から）
図版 53　1　26 号住居跡焼土塊土層（東から）　2　26 号住居跡粘土塊出土状況（北から）
3　27 号住居跡完掘（西から）
図版 54　1　29 号住居跡完掘（北西から）　2　30 号住居跡完掘（東から）
3　33 号住居跡西壁（北東から）
図版 55　1　33 号住居跡北壁（南東から）　2　33 号住居跡完掘（南東から）
3　33 号住居跡炉跡土層（東から）
図版 56　1　33 号住居跡炉跡完掘（南から）　2　33 号住居跡屋内土坑土層（東から）
3　33 号住居跡屋内土坑完掘（北西から）
図版 57　1　4 号土坑完掘（北から）　2　5 号土坑北西壁上層（南東から）
3　5 号土坑南東壁上層（北西から）
図版 58　1　5 号土坑出土状況（北から）　2　5 号土坑北西壁下層（南東から）
3　5 号土坑南東壁下層（北西から）
図版 59　1　5 号土坑完掘（北から）　2　6 号土坑北壁（南から）

3　7号土坑北壁（南から）
図版60　1　6・7号土坑完掘（南から）　2　8号土坑北壁（南から）
3　10号土坑東壁（西から）
図版61　1　10号土坑完掘（南西から）　2　11号土坑東壁（北西から）
3　11号土坑完掘（南西から）
図版62　1　1号溝完掘（西から）　2　1～4号溝南壁（C—C´）（北から）
3　1～4号溝西壁（B—B´）（東から）
図版63　1　1～4号溝北壁（A—A´）（南から）　2　5号溝西壁（東から）
3　9号溝北壁（南から）
図版64　1　25号溝南壁（北から）　2　1号土壙出土状況（西から）
3　1号土壙完掘（東から）
図版65　1　2号土壙完掘（東から）　2　3号土壙出土状況（北から）
3　3号不明遺構東壁（西から）
図版66　上片島遺跡群出土遺物1
図版67　上片島遺跡群出土遺物2
図版68　上片島遺跡群出土遺物3
図版69　上片島遺跡群出土遺物4
図版70　上片島遺跡群出土遺物5
図版71　上片島遺跡群出土遺物6
図版72　上片島遺跡群出土遺物7
図版73　上片島遺跡群出土遺物8
図版74　上片島遺跡群出土遺物9
図版75　上片島遺跡群出土遺物10
図版76　1　岩屋古墳群調査風景1　2　岩屋古墳群調査風景2
3　上片島遺跡群調査風景

挿図目次

第１図　岩屋古墳群・上片島遺跡群の位置…… 1
第２図　東九州自動車道路線図および調査地点位置図（1／200,000）…… 2
第３図　周辺遺跡分布図（1／70,000）…… 7
第４図　岩屋古墳群・上片島遺跡群周辺地形図（1／5,000）…… 9
第５図　岩屋古墳群周辺地形図（1／2,000）…… 13
第６図　岩屋１号墳地形測量図(1／500)・出土土器実測図（1／6)・土層実測図（1／250）… 14
第７図　岩屋２号墳地形測量図（1／500)・土層実測図（1／250）…… 15
第８図　岩屋１・８号墳調査前地形測量図（1／400）…… 16
第９図　岩屋１・８号墳調査後地形測量図（1／400）…… 17
第１０図　岩屋１・８号墳墳丘実測図（1／200）…… 18
第１１図　岩屋１・８号墳墳丘土層断面図（1／100）…… 19
第１２図　岩屋１号墳１～３号主体部実測図（1／40)・1号墳墳裾土器出土状況（1／10）… 22
第１３図　岩屋１号墳出土土器実測図①（1／3）…… 23
第１４図　岩屋１号墳出土土器実測図②（1／3）…… 24
第１５図　岩屋８号墳１号主体部実測図（1／40）…… 25
第１６図　岩屋８号墳２号主体部実測図（1／40）…… 26
第１７図　岩屋８号墳墳裾土器出土状況（1／10）…… 27
第１８図　岩屋８号墳出土土器実測図（1／3）…… 27
第１９図　岩屋２号墳調査前・後地形測量図（1／400）…… 28
第２０図　岩屋２号墳墳丘実測図（1／200）…… 29
第２１図　岩屋２号墳墳丘土層断面図（1／100）…… 31
第２２図　岩屋２号墳１号主体部実測図（1／40）…… 33
第２３図　岩屋２号墳出土土器実測図（1／3）…… 33
第２４図　岩屋２号墳１号石棺墓・1号石蓋土坑墓・1号土坑墓実測図（1／40）…… 34
第２５図　上片島遺跡群調査区割図（1／2,000）…… 38
第２６図　上片島遺跡群３地区調査時区割図（1／500）…… 40
第２７図　１地区トレンチ配置図（1／300）…… 42
第２８図　１地区Ａ～Ｃトレンチ土層実測図（1／60）…… 43
第２９図　１地区Ｄ・Ｅトレンチ土層実測図（1／60）…… 44
第３０図　１地区Ｂトレンチ杭出土状況実測図（1／60）…… 45
第３１図　１地区出土土器実測図（1／3）…… 46
第３２図　１地区出土木製品実測図①（7・9は1／4、他は1／3）…… 48
第３３図　１地区出土木製品実測図②（1／3）…… 49
第３４図　１地区出土木製品実測図③（1／4）…… 50
第３５図　２地区遺構配置図（1／350）…… 51
第３６図　２地区出土土器実測図(1／3)…… 51
第３７図　３地区遺構配置図（1／250）…… 53

第３８図　３地区１・２号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ５６
第３９図　３地区３～５号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ５７
第４０図　３地区６・７号住居跡実測図（１／60）…… ５８
第４１図　３地区１～７号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ５９
第４２図　３地区８・９号住居跡実測図(１／60)…… ６０
第４３図　３地区８・９号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ６１
第４４図　３地区10・11号住居跡実測図（１／60）…… ６２
第４５図　３地区10・11号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ６４
第４６図　３地区12・13号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ６５
第４７図　３地区10～13号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ６６
第４８図　３地区12・13号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ６７
第４９図　３地区14・15・32号住居跡実測図（１／60）…… ６８
第５０図　３地区14号住居跡出土土器実測図①(１／３)…… ７０
第５１図　３地区14号住居跡出土土器実測図②(１／３)…… ７１
第５２図　３地区14・16号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ７２
第５３図　３地区16～19号住居跡実測図（１／60）…… ７４
第５４図　３地区20～22号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ７６
第５５図　３地区15・18・20・22・23・32号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ７７
第５６図　３地区23号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ７９
第５７図　３地区23号住居跡出土土器実測図①(１／３)…… ８０
第５８図　３地区23号住居跡出土土器実測図②(１／３)…… ８１
第５９図　３地区24・26・28号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ８２
第６０図　３地区26号住居跡粘土塊実測図（１／30）…… ８３
第６１図　３地区24～26号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ８４
第６２図　３地区25号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ８５
第６３図　３地区25号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ８６
第６４図　３地区27・29号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ８７
第６５図　３地区30・31号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ８８
第６６図　３地区27・29・30・33号住居跡出土土器実測図(１／３)…… ８９
第６７図　３地区33号住居跡実測図（１／60、１／30）…… ９１
第６８図　３地区34号住居跡実測図（１／60）…… ９２
第６９図　３地区掘立柱建物実測図（１／40）…… ９２
第７０図　３地区４・６・７号土坑実測図（１／30）…… ９３
第７１図　３地区５号土坑実測図（１／30）…… ９４
第７２図　３地区５号土坑出土土器実測図(１／３)…… ９５
第７３図　３地区８～10号土坑実測図（１／30）…… ９７
第７４図　３地区５～７・10・11号土坑出土土器実測図(１／３)…… ９８
第７５図　３地区11・12号土坑実測図（１／30）…… ９９
第７６図　３地区１～５・９・19・20・25号溝土層実測図（１／40）……１０１

第７７図　３地区溝出土土器実測図(1／3)…… １０３
第７８図　３地区１～３号土壙実測図（1／20）…… １０６
第７９図　３地区土壙出土遺物実測図（1～3は1／1、4～10はおよそ1／1、
11・12は1／3、13は1／2）…… １０７
第８０図　３地区１・２号不明遺構実測図（1／40）…… １０８
第８１図　３地区３号不明遺構実測図（1／40）…… １０９
第８２図　３地区その他の遺構出土土器実測図(1／3)…… １１０
第８３図　３地区特殊遺物実測図（1～10は1／1．11～19は1／2、20～24は1／3）… １１１
第８４図　上片島遺跡群旧地形復元図(1／1,000)…… １１５
第８５図　上片島遺跡群航空写真合成図…… １１６
第８６図　火葬土壙の変遷(乾 1991より転載、一部改変)…… １１９

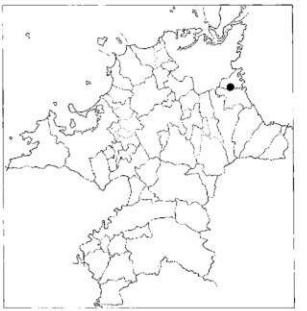
表目次

第1表 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧…… 3
第2表 上片島遺跡遺構対照表…… 55
第3表 上片島遺跡出土特殊遺物一覧表…… １１３
第4表 上片島遺跡検出住居跡時期…… １１４

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

九州内では、九州縦貫自動車道を始め、大分道や長崎道、宮崎道と高速道路の整備が進められてきたが、西側に偏し、東九州側は停滞していたため南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。近年では各地に工場の誘致も進み、物流の効率化や更なる企業の進出、また農業・水産業・観光の面でもアクセス道路の整備は欠かすことが出来ず、東九州域の発展に期待がかけられている。このような中で計画された東九州自動車道は、福岡県北九州市から東九州の各県を結び、鹿児島県鹿児島市に至る総延長約 436km が予定されている。このうち福岡県内のルートは北九州市から築上郡上毛町に至る 49.5km で、北九州 JCT ～苅田北九州空港 IC 区間については 2006 年 2 月 26 日に開通している。



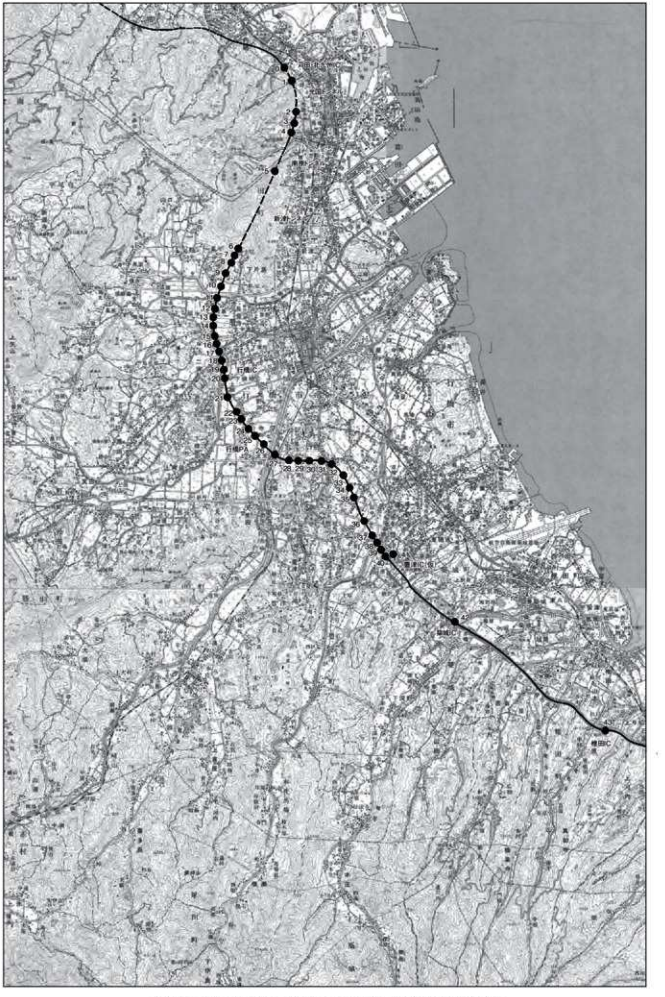
第 1 図　岩屋古墳群・上片島遺跡群の位置

現在工事が進められている苅田北九州空港～県境については、2005 年 10 月 1 日に道路公団の民営化組織として誕生した、西日本高速道路株式会社（ネクスコ西日本）九州支社が事業にあたっている。既存の椎田道路を利用するため、苅田町からみやこ町の椎田道路に接続する部分ならびに築城 IC、椎田 IC の改修については福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して大分県へと続く部分については中津工事事務所がそれぞれ担当している。苅田北九州空港 IC ～豊津 IC(仮) 間は、平成 25 年度末、椎田 IC ～県境間は平成 26 年度末に供用予定となっている。

東九州自動車道の整備計画から平成 18 年までのことについては、報告済みの『雨窪遺跡群』および『延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区の 1』に詳しいため、そちらに譲ることとし、本報告にかかる岩屋古墳群・上片島遺跡群の調査に至る経緯を以下に纏める。

岩屋古墳群は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されており、平成 8 ～ 10 年度に苅田町教育委員会によって発掘調査がなされている。計 7 基ある古墳群のうち 2 基が東九州自動車道用地内であったため、平成 19 年 4 月に本調査にかかっている。なお、古墳周辺ならびに古墳群より南側の丘陵先端部については、平成 20 年 8･9 月、21 年 3･5 月、22 年 10 月に試掘確認調査を行っており、いずれも遺構は発見されなかった。

上片島遺跡群については、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたものの、宅地開発や土捨て場になっていた影響で地形が一部改変されていることが予想されたため、平成 21 年 1・2 月に試掘確認調査を行った。その結果、小波瀬川両岸の低地については河川堆積物が認められ、遺構が発見されなかったものの、丘陵部（3 地区）からは遺構が検出された。また、南側の低地部分（1 地区）では遺構は発見されなかったものの、丘陵落ち際に近いところでは木製品や土器が少なからず発見されたため、平成 22 年度の 5 月から工事計画や用地の進捗状況に合わせて順次本調査に入



第２図　東九州自動車道路線図および調査地点位置図（1/200,000）

第１表　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積(㎡)	試掘年度	調査面積(㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
0	苅田 IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪			4000	H13･14	H15	1集	
1	福　岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福　岡		京都郡苅田町大字提	4500	H21･23					遺跡なし
3	福　岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13100	H16･20･21	1200	H20	H24	4集	
4	福　岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35300	H18･19	3900	H19･20	H24	4集	
5	福　岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21･22					遺跡なし
6	福　岡		京都郡苅田町大字下片島	30600	H18･20･21･23					遺跡なし
7	福　岡		京都郡苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福　岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20~22	5000	H19	H24	本冊	
9	福　岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20~22		H19	H24	本冊	
10	福　岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福　岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21~23	H24	本冊	
12	福　岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	本冊	遺跡なし
13	福　岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福　岡		行橋市延永	17500	H19					
15	福　岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19~23	H23~	2集	遺跡なし
16	福　岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福　岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福　岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18･19					遺跡なし
19	福　岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福　岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福　岡		行橋市上検地･中川･大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福　岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20･22					遺跡なし
23	福　岡		行橋市宝山	10050	H20					
24	福　岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21･22			
25	福　岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20･21	31550	H22~24			
26	福　岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20･21	2900	H22			
27	福　岡		行橋市流末	840						
28	福　岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21~23			
29	福　岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20･22					
30	福　岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19･22	16574	H22~24			
31	福　岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21			
32	福　岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21･22	13888	H22			H22行橋市による調査
33	福　岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20･21	4560	H21	H24	6集	
34	福　岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21行橋市による調査
35	福　岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42940	H20~23	2720+7000	H22･23	H24	6集	
36	福　岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29491	H20~23	29491	H21~23			H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福　岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福　岡	呰見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町呰見	1132	H21	1132	H22			
39	福　岡	呰見中園遺跡 呰見大塚古墳	京都郡みやこ町呰見	8218	H21･22	5918	H21~23			H22呰見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福　岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町呰見・下原	45510	H19･20･21	22763	H20~22	H23~	3集	
41	福　岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町呰見	5080	H21	3580	H21･22			
42	福　岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21~23	26000	H22･23			一部築上町による調査
43	福　岡		築上郡築上町小原	24359	H21･23					遺跡なし

ることとなった。

なお、東九州自動車道全体で、コストダウンを図る目的で、緑地化部分や橋桁の下部、将来車線として当面工事を行わない部分など、将来的に調査が可能と考えられる部分については、「限定協議範囲」として、調査対象から外すこととなった。苅田北九州空港 IC ～行橋 IC 間については平成 18 年、行橋 IC ～豊津 IC 間ならびに築上～県境間については平成 20 年に協議文書を交わしている（苅田北九州空港～豊津間は平成 23 年に再協議）。本書で報告を行う上片島遺跡については当初は将来斜線部分が限定協議範囲となっていたものの、工事計画の変更により全面的に調査を行った。

2　調査・整理の組織

平成 19（2007）年度から 24（2012）年度の調査・報告に関わる関係者は次のとおりである。平成 23 年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管され、事業者との契約・整理報告等を行っている。

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
西日本高速株式会社九州支社						
支社長	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀	久保晶紀（～ 9.30） 本間清輔（10.1 ～）	本間清輔	本間清輔
西日本高速株式会社九州支社福岡工事事務所						
所長	竹國一也	竹國一也（～ 9.30） 福田美文（10.1 ～）	福田美文	福田美文	中薗明広	源谷秋義
副所長 （技術担当）	高尾英治	高尾英治	高尾英治（～ 9.30） 岩尾泉（8.1 ～）	岩尾泉（～ 9.30） 入江壮太（10.1 ～）	入江壮太 今井栄蔵（～ 9.30） 井秀和（10.1 ～）	松繁浩二 井秀和
副所長 事務担当	大内智博 塚本國弘（12.1 ～）	塚本國弘（～ 9.30） 原野安博（10.1 ～）	原野安博	原野安博	原野安博	原野安博
総務課長	白川雄二	白川雄二	白川雄二（～ 9.30） 江口政秋（10.1 ～）	江口政秋	江口政秋	馬場孝人
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之（～ 5.10） 原野安博（5.11 ～）
工務課長	上川裕之（～ 6.30） 大久保良和（7.1 ～）	大久保良和	大久保良和（～ 9.30） 石塚純（10.1 ～）	石塚純	石塚純（～ 9.30） 堅山哲二（10.1 ～）	堅山哲二
苅田 工事長	右田一彦	右田一彦	右田一彦（～ 6.30） 堂園淳一（7.1 ～）	堂園淳一	堂園淳一	角田成昭
福岡県教育庁総務部文化財保護課						
	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
総括						
教育長	森山良一	森山良一	森山良一	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
教育次長	楯崎洋二郎	楯崎洋二郎	亀岡　靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
総務部長	大島和寛	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄		
副理事兼文化財保護課長	磯村幸男	磯村幸男				
文化財保護課長			平川昌弘	平川昌弘		
同副課長	佐々木隆彦	池邉元明	池邉元明	伊崎俊秋		
参事	新原正典	新原正典	伊崎俊秋	小池史哲		
	池邉元明	小池史哲	小池史哲			
	小池史哲					
課長補佐	中園　宏	前原俊史	前原俊史	日高公徳		
調査第一係長	小田和利	小田和利	吉村靖徳	吉村靖徳		
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文	飛野博文		
地域担当	吉田東明	岸本　圭	小澤佳憲	宮地聡一郎		
庶務						
管理係長	井手優二	富永育夫	富永育夫	富永育夫		
庶務担当	潟上大輔	小宮辰之	野田　雅	仲野洋輔		
調査・整理作業						
参事補佐（整理担当）	濵田信也	濵田信也	新原正典	新原正典		
参事補佐（調査担当）				高橋章		
参事補佐（調査担当）				池邉元明		
主任技師（調査担当）	進村真之		城門義廣			
調査補助員（調査担当）				大森真衣子		

九州歴史資料館

総括		
館長	西谷　正	西谷　正
副館長	南里正美	篠田隆行
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文
企画主幹（文化財調査室長補佐）		吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹
庶務		
庶務担当	近藤一崇	長野良博
調査・整理報告		
技術主査（保存管理班長）	加藤和歳	加藤和歳
参事補佐	小池史哲	小池史哲
臨時調査員（調査担当）	藤島志考	
参事補佐（調査担当）	佐々木隆彦	
技術主査（整理担当）		進村真之
主任技師（整理担当）		城門義廣
技師　（樹種鑑定）		小林啓

なお、発掘調査に当たっては、地元の方々、発掘調査に参加された方々、苅田町教育委員会の関係者の皆様より御協力を賜った。また、苅田町、なかでも交通商工課には調査の際のヤード確保等に関し御協力を賜った。記して感謝いたします。また、報告書作成においては以下の方々に御教示をいただいた。記して感謝したい。

小田裕樹(奈良文化財研究所)・長直信(大分市教育委員会)・藤野好博（苅田町教育委員会)・溝口孝司(九州大学)・森本徹(大阪府立近つ飛鳥博物館)　・若杤善満（苅田町教育委員会)（五十音順・敬称略）

Ⅱ　位置と環境

地理的環境

岩屋古墳群･上片島遺跡群は福岡県東部の京都郡苅田町に位置している。苅田町は面積46.6 k㎡、人口3.5万人ほどで、東は周防灘に面しており、北ならびに西は北九州市と接しており、西側にはカルスト地形の貫山・平尾台山系が広がる。南は同一平野内で行橋市と接している。町内には国際貿易港である苅田港、さらに沖には北九州空港があり交通の面で発達しているほか、沿岸部には臨海工業地帯が広がっている。

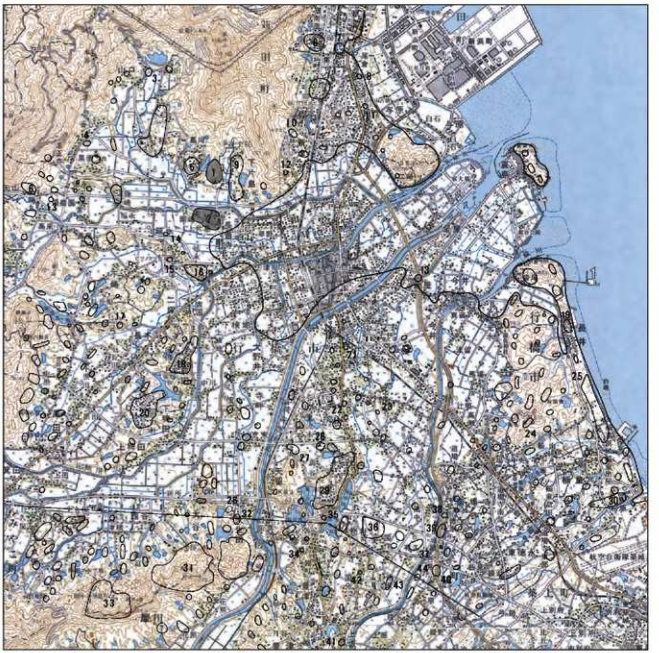
苅田町上片島は「京都平野」に属している。平野北側には平尾台山系から東・南側に向かって比較的急峻な丘陵が伸びており、平野内には段丘地形が発達する。行橋市長井地区から稲童地区にかけては海岸沿いに標高10m前後の海岸段丘が見られる。河成段丘は行橋市高来、入覚、みやこ町宮原まで標高50～90 mの高位段丘が広がり、さらに盆地を取り囲むように今川・長峡川・祓川の3つの河川水系により形成された標高15～30mの中位段丘が見られる。さらに河川水系の扇状地では標高10～15mほどの低位段丘がみられ、特に今川周辺でよく観察される。一方で低地も平野東北部を中心として広く発達している。小波瀬川・長峡川流域では低湿な地帯が東西に広く分布しており、海岸から5km内陸まで標高5m以下の地域が広がり、10m以下の地域も7～8km内陸まで広がっている。遺跡周辺では、ボーリング調査や遺跡の分布から縄文海進期や古墳時代には海が平野内部まで入り込んでいたと推測されている（第3図)。このような周辺地形のうち、岩屋古墳群は高城山の山稜から伸びる標高16～56mの舌状台地上に位置しており、上片島遺跡群は河川によって浸食された低地中の独立丘陵の一つに立地している。

歴史的環境

岩屋古墳群・上片島遺跡群の所在する京都平野では旧石器時代から現在に至るまで、多くの遺跡が展開している。

旧石器時代の遺跡としては行橋市渡築紫遺跡C区が挙げられる。後期旧石器の水晶・チャート・黒曜石など剥片が多く出土しており、石器製作所の想定がなされている。このほかにも苅田町富久遺跡・新津原山古墳群・雨窪遺跡群・行橋市柳井田早崎遺跡などでナイフ形石器・槍先形尖頭器などが出土している。また、苅田町東部には国指定天然記念物の鍾乳洞、青龍窟があり、ナウマンゾウ、オオツノジカ、ステゴドンゾウなどの化石が発見されている。

縄文時代になると、全国的に海進がおこり、上片島周辺まで汀線が入り込んでいたと考えられている。早期段階には遺構は不明確ながら押型文土器が苅田町山口遺跡A地区や行橋市福丸遺跡で



1 岩屋古墳群　2 上片島遺跡群　3 山口遺跡群　4 法正寺遺跡群　5 恩川遺跡　6 南原遺跡群　7 辻南ヶ丘遺跡群　8 番塚古墳　9 浄土院遺跡群　10 新津遺跡群
11 御所山古墳　12 鏡焼古墳群　13 椿市廃寺　14 延永水取遺跡　15 ビワノクママ古墳　16 延永ヤヨミ園遺跡　17 八雲古墳　18 前田山遺跡　19 長井遺跡　20 下稗田遺跡
21 崎野遺跡　22 赤ハゲ遺跡　23 柳井田早崎遺跡　24 硯山古墳群　25 稲童古墳群　26 天生田矢倉遺跡　27 矢留堂ノ前遺跡　28 福原長者原遺跡　29 竹並遺跡　30 渡築
祭遺跡　31 馬ヶ岳城跡　32 天生田大池遺跡　33 御所ヶ谷神籠石　34 彦徳甲塚古墳　35 甲塚古墳　36 魯前国府跡　37 京ヶ辻遺跡　38 居屋敷遺跡　39 徳永川ノ上遺跡
40 カワラケ田遺跡　41 上坂廃寺　42 魯前国分寺跡　43 徳政瓦窯跡　44 仲見橋ノ口遺跡

第３図　周辺遺跡分布図（1/70,000）

出土している。後期になるとみやこ町節丸西遺跡で大規模集落が出現し、竪穴住居跡が30軒弱見つかっている。同じく後期には苅田町浄土院遺跡で鐘崎式並行期の土器や火葬骨を収めた西平式の甕棺が検出されている。

弥生時代の遺跡で最も古いものは行橋市長井遺跡で発見された小壷や夜臼式の甕で、これらは石棺墓群に伴ったといわれる。前期になると遺跡は飛躍的に増加し、苅田町葛川遺跡では貯蔵穴を囲む環濠が確認されており、みやこ町辻垣遺跡や行橋市矢留堂ノ前遺跡でも同様に環濠が見つかっている。また行橋市竹並遺跡・前田山遺跡・下稗田遺跡など大規模な前期～中期の集落が出現する。

中期になると先述した大規模な集落のほか、苅田町法正寺木ノ坪遺跡・稲光遺跡で中期後葉の円形住居跡や祭祀遺構が発見されている。後期になると、先述した前田山遺跡・下稗田遺跡、みやこ町徳永川の上遺跡で墳墓群が確認されており、特に川の上遺跡では複数の舶載鏡が副葬されるなど多くの副葬品が出土している。このほか築上町安武深田遺跡では中期末～後期前半の集落が見つかっており、鍛冶炉を持つ竪穴住居跡など特殊な遺構が発見されている。

古墳時代は全期間を通じて大形墳が築造されており、小規模墳も稠密に分布する。前期古墳としては、墳長 110 mで三角縁神獣鏡 10 数枚のほか冑、靫、素環頭大刀、鏃などが出土したとされる苅田町石塚山古墳がある。ほかにも苅田町天疫神社古墳群や木ノ元幸古墳群では同時期の墳墓群が調査されており、行橋市ビワノクマ古墳では前期に属するとされる甲冑が出土している。

中期には周溝を有する墳長 120 mの国指定史跡、苅田町御所山古墳があり、埴輪、銅鏡、装身具、馬具などが出土している。行橋市域では、墳長 60 mほどの帆立貝形古墳である稲童石並古墳が盟主墳と考えられ、この古墳が含まれる稲童古墳群では小古墳が集中する。

後期になると苅田町番塚古墳、みやこ町箕田丸山古墳・扇八幡古墳・庄屋塚古墳、行橋市八雷古墳など中規模の前方後円墳が各地に築造される。なかでも番塚古墳は主体部が未掘であったため、銅鏡のほか、朝鮮半島由来の鳥足文土器、蛙形金具、連華文大刀などの珍品が出土している。終末期には国指定史跡のみやこ町綾塚古墳（円墳）・橘塚古墳（方墳）があり、それぞれ墳長 41m・38 ～ 40 mの大形墳である。同町の豊津には旧京都郡に 46 × 36 mの長方形方墳で周溝・周堤をもつ甲塚方墳、旧仲津郡に直径 29m の円形墳丘に二重の周溝をもつ彦徳甲塚古墳があり、それぞれ地域の最大規模の古墳である。また、竹並遺跡や前田山遺跡、渡築紫古墳群に代表されるような横穴墓群が各地で見られ、そのほかにも山際には苅田町山口南古墳群・雨窪古墳群など終末期の古墳群が各所に造営される。

一方、古墳時代の集落跡としては、苅田町近衛ヶ丘遺跡、法正寺木ノ坪遺跡、行橋市竹並遺跡などで弥生時代終末～古墳時代前期の遺構が発見されている。苅田町谷遺跡では住居跡で小型仿製鏡が出土している。苅田町神田遺跡Ⅰ地区では 6 世紀後半の竈を有する方形住居跡が検出されており、同様に後期の集落は行橋市福富小畑遺跡、赤ハゲ遺跡など各地で見つかっている。また、みやこ町京ヶ辻遺跡では、居屋敷窯跡で焼いたと考えられる初期須恵器が多数出土している。

古代になると、苅田町内には西海道の「刈田」駅が設置され、その位置は『和名抄』に見える京都郡刈田郷付近に比定する説が有力となっている。旧京都郡内には四天王寺式伽藍配置をもつ行橋市椿市廃寺が創建され、旧仲津郡内ではみやこ町木山廃寺・上坂廃寺・豊前国分寺が創建される。また、国府や国分寺に瓦を供給した築上町船迫瓦窯跡が注目される。

西側の山麓には国指定史跡である行橋市御所ヶ谷神籠石が作られ、約 2,900 mの列石と土塁線を有し、7 箇所の門が確認されている。中門は幅 30m、高さ 10m、西門は幅 40m 以上、高さ 7m の規模であり、版築土塁に被覆される列石や前面の柱穴が確認されるなど構造の解明が進んでいる。また、役所関係としてはみやこ町国作地区の豊前国府跡をはじめ、行橋市崎野遺跡では廂付きの掘立柱建物跡が検出される。また、行橋市福原長者原遺跡では東九州自動車道にかかる発掘調査において、1 m以上の掘り形を持つ掘立柱建物跡とその周囲に回廊が検出されている。苅田町雨窪遺跡群では萬年通宝銭、銅椀、緑釉陶器、土馬、墨書土器、製塩土器などが出土しており、刈田駅との関係が示唆される。また、各地で官道も検出されており、行橋市天生田大池遺跡・天生田矢萩

第4図　岩屋古墳群・上片島遺跡群周辺地形図（1/5,000）

遺跡・大谷車堀遺跡、みやこ町呰見樋ノ口遺跡・カワラケ田遺跡などが上げられる。他に、同じ交通関係として、行橋市延永水取遺跡では草野津と椎市を結ぶ運河である可能性が示唆される大溝が検出されている。

中世になると、苅田町南原西門田遺跡で 12 ～ 14 世紀の掘立柱建物跡が検出されており、社寺関連遺構との想定がなされている。また、山口遺跡では 12 ～ 14 世紀の龍泉窯、同安窯、景徳鎮窯系の陶磁器が多量に出土している。このほか苅田町松山城などで山城跡が見つかっており、覗山、馬ヶ岳、松山、障子ヶ岳でも同様に山城跡が見つかっている。等覚寺、蔵持山などでは修験道関係の信仰遺跡が盛行しており、等覚寺では経筒が出土している。上片島遺跡群の所在する片島の丘陵上には平井寺（現薬師寺）が現存しており、平安末頃と考えられる地蔵菩薩立像、鎌倉時代と考えられる薬師如来立像が収められている。

以上のように、地域内で連綿と遺跡が見られる中で、特に古墳時代～古代においては旧豊前国の中でも多くの重要な遺跡が発見されており、国府が設置される下地となっていると言える。

【参考文献】

石松好雄・高橋章編　1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書　行橋市教育委員会

伊藤昌広・中原博編　2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第 37 集　行橋市教育委員会

小川秀樹編　2001『崎野遺跡』行橋市文化財調査報告書第 28 集　行橋市教育委員会

小川秀樹ほか編　1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第 24 集　行橋市教育委員会

小澤佳憲編　2010『福富小畑遺跡 D 地点』福岡県文化財調査報告書第 228 集　福岡県教育委員会

小野剛史・長嶺正秀編　2005『軌跡　かんだの歴史』苅田町合併 50 周年記念誌　苅田町

秦憲二編　2004『福富小畑遺跡 B 地点』福岡県文化財調査報告書第 194 集　福岡県教育委員会

末永弥義編　2000『呰見樋ノ口遺跡』豊津町文化財調査報告書第 22 集　豊津町教育委員会

末永弥義編　2003『豊前国府跡御所地区』豊津町文化財調査報告書第 30 集　豊津町教育委員会

末永弥義ほか編　2010『みやこ町内遺跡等分布地図』みやこ町文化財調査報告書第 6 集　みやこ町教育委員会

千田昇　1997「歴史の背景としての自然」『豊津町史』上巻　豊津町・豊津町史編纂委員会

竹並遺跡調査会編　1979『竹並遺跡』寧楽社

飛野博文・小池史哲編　2001『農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書第 159 集　福岡県教育委員会

長嶺正秀編　1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第 19 集　行橋市教育委員会

長嶺正秀編　1999『岩屋古墳群』苅田町文化財調査報告書第 31 集　苅田町教育委員会

長嶺正秀編　2000『苅田町の文化遺産』苅田町文化財調査報告書第 34 集　苅田町教育委員会

長嶺正秀編　2010『苅田町歴史資料館特別展　豊前地方の遺宝　律令時代と豊前国』苅田町教育委員会

行橋市史編纂委員会編　2004『行橋市史　上巻』行橋市

行橋市史編纂委員会編　2006『行橋市史　資料編：原始・古代』行橋市

吉村靖徳編　1999『天生田大池遺跡』福岡県文化財調査報告書第 137 集　福岡県教育委員会

若杉善満編　2010『提遺跡群』苅田町文化財調査報告書第 42 集　苅田町教育委員会

Ⅲ　岩屋古墳群

1　調査の経過

岩屋古墳群は福岡県京都郡苅田町大字上片島字岩屋ほかに所在する。その一部が昭和59（1984）年から61（1986）年に苅田町教育委員会が行った遺跡分布調査により確認されている。この分布調査は、かんだ郷土史研究会が委託されて行ったが、その際に発見されたのが、現在の岩屋3･6号墳である。

その後平成8（1996）年度から平成10（1998）年度の3カ年にかけて行われた苅田町教育委員会の重要遺跡確認調査により、今回の調査が行われる以前までに把握されていた1～7号墳が確認されている。

この発掘調査の後、岩屋古墳群のうち3～6号墳は町指定史跡として指定されている。

なお、東九州自動車道建設にかかる岩屋古墳群の協議は平成18年度より始まっているが、発掘調査に関する具体的な動きは平成19年度に入ってからである。

平成19（2007）年4月3日、現地の下見を行う。工事に先行する進入路部分の伐採が進んでいる状況であった。

4月18日より伐採の終了した調査範囲の西側、進入路部分の試掘・確認調査を重機により行う。

4月19日、苅田町教育委員会の長嶺正秀氏が来跡。この地域の地質および前回調査時の状況説明を受ける。

4月23日、進入路部分の試掘･確認調査が終了する。この範囲に関しては遺構･遺物を確認できなかった。

5月11日、重機を搬入する。

5月17日、作業員の雇用開始。進入路の残り一部分の試掘調査を人力で行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

5月18日、人力により1･2号墳への進入路の伐採を開始する。

5月21日、1･2号墳の伐採開始。

5月23日、福岡県教育委員会教育長による安全パトロールが行われた。

5月29日、1号墳の平板測量を開始する。

6月6日、2号墳の平板測量を開始する。

6月8日、現況でラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。

6月13日、新たに8号墳を検出。

7月26日、苅田町教育委員会、長嶺氏、宮川泰男氏、来跡。

8月2日、台風5号接近。

9月29日、行橋市教育委員会、伊藤昌広氏、来跡。

10月5日、藤丸詔八郎氏、来跡。

11月15日、2号墳北西部周溝内で1号石蓋土坑墓を検出する。

12月6日、8号墳墳裾から二重口縁壺の口縁部分が出土する。

平成20（2008）年1月18日、2号墳主体部掘削。掘り方の底部分のみと判明。

2月19日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。

2月21日、戸早幼稚園園児90名、見学。

2月22日、片島小学校5･6年生19名、見学。
3月17日、発掘機材撤収を行い、調査対象であった岩屋1･2･8号墳の発掘調査を完了する。
なお、今回の調査ではまだ伐採が行われず残っていた範囲については、後日、重機による確認調査を行ったが、新たな遺構・遺物の検出はなかった。

2　遺跡の概要（図版1、第5～7図）

岩屋古墳群は、標高405.9ｍの高城山から南側に舌状に延びる標高約52ｍの丘陵上に位置する。両側には谷が深く入り込んでいる。さらに南には低地が広がっており、古墳時代には、まだかなりの部分が海であったと考えられている。調査区内の土質は赤褐色の花崗岩バイラン土である。

この古墳群については平成8（1996）年度から平成10（1998）年度にかけて行われた苅田町教育委員会の重要遺跡確認調査により、かなり詳細に把握されている。なお、この調査により岩屋3～6号墳は町指定史跡として指定されている。古墳は町の調査時に7基、今回新たに1基が見つかっており、合計8基が丘陵の頂部および尾根上に展開している。

今回、調査対象となった遺構は、1号墳、2号墳と新たに見つかった8号墳の古墳3基とそれに付随する墓である。出土遺物が少なかったため、時期を確定できないものもあったが、おおむね古墳時代前期に属するものであろう。

調査の方法としては、調査範囲全体の伐採が終了していなかったために、以前、苅田町教育委員会が調査した範囲を中心に伐採を行い、その後、調査区を拡張していくやり方を行った。検出された遺構については道路建設のために保存が難しいため、全面発掘を行うこととなった。
以下で個別の遺構について説明を行う。

3　遺構と遺物

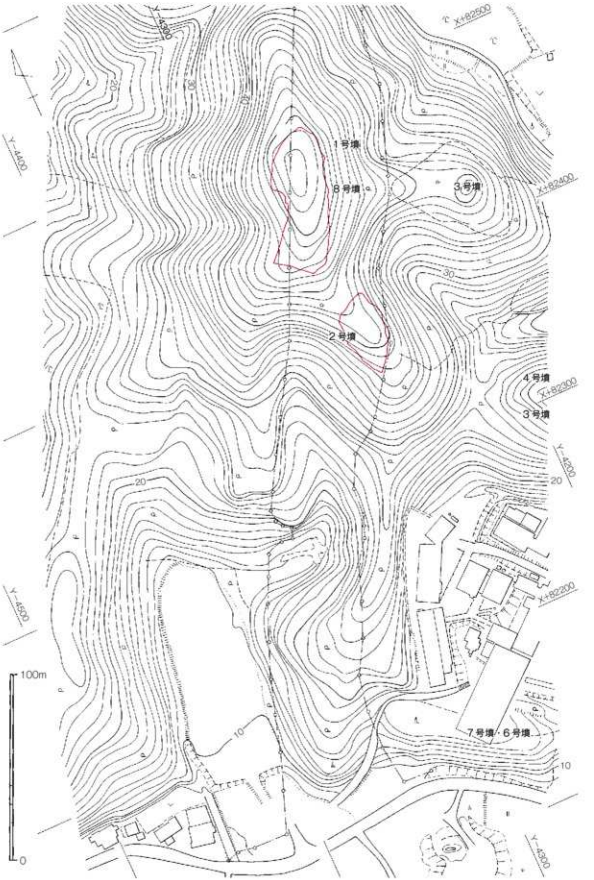
調査の方法として、1･2号墳の全面発掘を行った。苅田町教育委員会が古墳群の確認調査を行って10年ほど経過していたため、再び草木が繁茂しており、その伐採作業から行った。その後、町教育委員会が掘削し、埋め戻していたトレンチを再度掘削し、状況の再確認を行った。また、周辺地形をみて、古墳が築造された可能性がある部分の伐採を行い、トレンチによる調査を行った。その過程で、今回、1号墳の南側で近接して発見されたのが8号墳である。この8号墳についても東九州自動車道の路線内に位置するため、全面的に発掘調査を行うこととなった。

(1) 1号墳

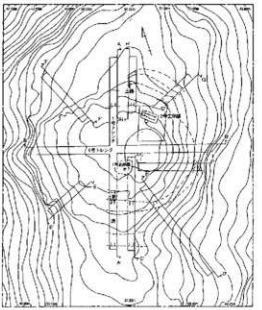
丘陵の頂部に位置する。苅田町教育委員会の調査により、その所在および前期古墳であることについては把握されていた。繁茂した草木の伐採を行い、放射状に設定され掘削、埋め戻されたトレンチの掘削を再度行った。地形は平板測量の結果、確認調査時点とほぼ変化していないことがわかった。

墳丘（図版4･8･9、第8～11図）

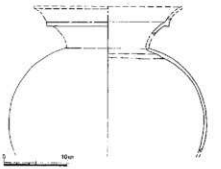
現況では見かけの直径20ｍ前後、高さ1.2ｍ前後の円墳である。土層観察の結果からは、古墳築造時の旧表土は検出できなかった。古墳の周囲を成形しているが、周溝は認められない。墳丘は



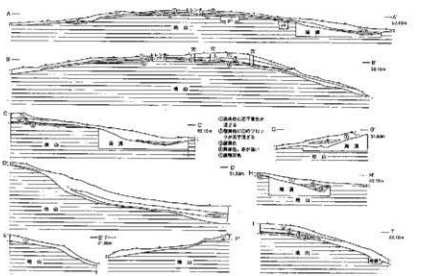
第５図　岩屋古墳群周辺地形図（1/2,000）



岩屋１号墳地形測量図（１／500）



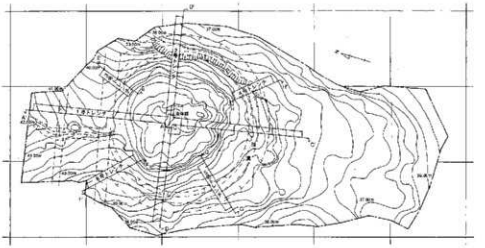
出土土器実測図（１／６）



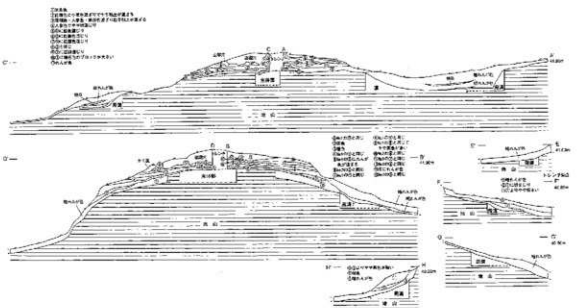
土層実測図（１／250）

第６図　岩屋１号墳地形測量図（１／500）・出土土器実測図（１／６）・土層実測図（１／250）

（苅田町教育委員会報告書より転載）

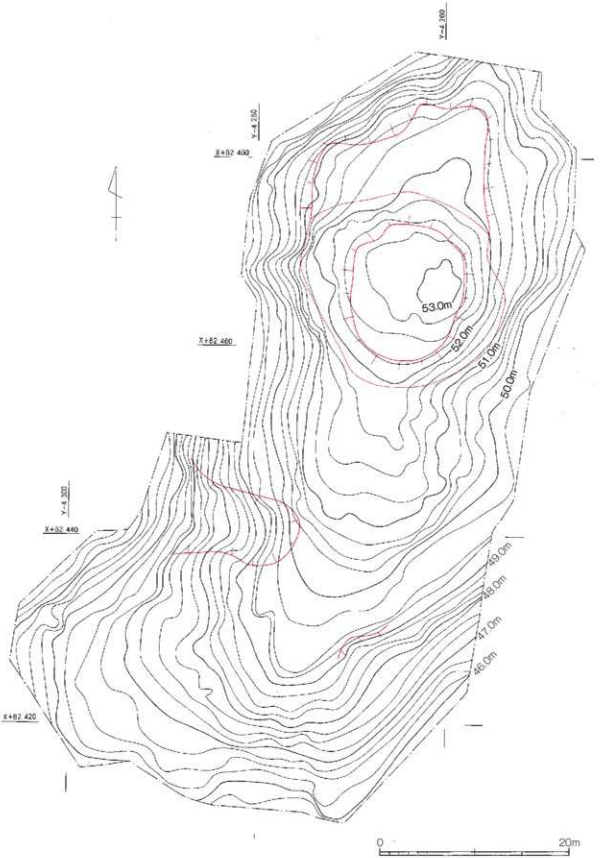


岩屋２号墳地形測量図（１／500）

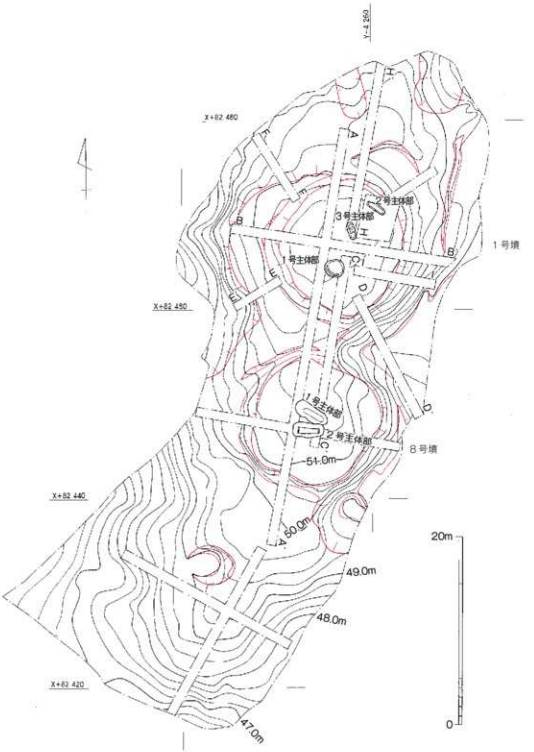


土層実測図（１／250）

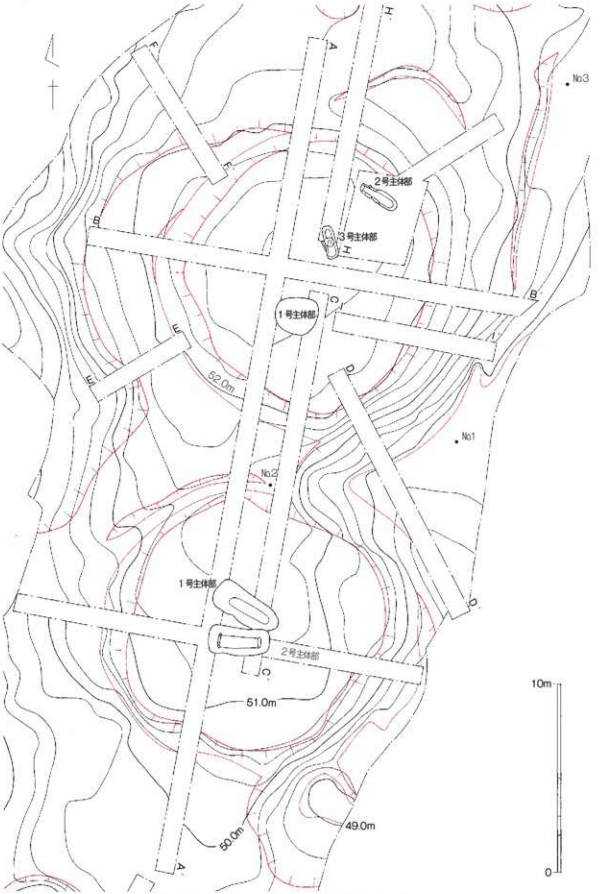
第７図　岩屋２号墳地形測量図（１／500）・土層実測図（１／250）（苅田町教育委員会報告書より転載）



第８図　岩屋１・８号墳調査前地形測量図（１／400）



第9図　岩屋1・8号墳調査後地形測量図（1／400）



第 10 図　岩屋 1・8 号墳墳丘実測図（1／200）

1 表土
2 暗赤褐色砂質土（やや粘質）盛土が流れたもの
3 淡黄褐色砂質土（やや粘質）盛土？
4 淡黄褐色粘質土（やや砂質、にごりが多い）盛土
5 淡黄褐色粘質土（やや砂質、4よりさらににごりが多い）盛土
盛土
6 明赤褐色砂質土（やや粘質）盛土
7 淡黒褐色砂質土（旧表土）
8 淡赤褐色粘質土（地山の2次堆積）
9 淡黒褐色砂質土（旧表土？ 初期の流れこみ）
10 2より明るい
11 淡黄褐色粘質土（5よりやや明るい）
12 黄褐色粘質土（やや砂質）
13 暗赤褐色粘質土（やや砂質）
14 明赤褐色粘質土（地山の2次堆積か）
15 2に砂質を多く含む

19 淡暗赤褐色土（にごりが多い）粘土ブロックを含む
20 暗赤褐色土（青灰色の粘土ブロックを含む）
21 暗赤褐色土（にごりが多い）
22 暗赤褐色土（青灰色・赤褐色の粘土ブロックを含む）
23 青灰色粘土（やや赤褐色のブロックがまじる）
24 淡赤褐色粘土
25 淡赤褐色土（やや砂質）

第11図　岩屋1・8号墳墳丘土層断面図（1／100）

最高で約 0.6 mの盛土が残っている。

盛土を施した範囲は南北トレンチで約 12 mである。東西トレンチで約 11 mであり、西側は流れており、明瞭ではない。墳裾の成形を行った部分の埋土は盛土が流れ込んだものと考えられる。その埋土中に礫などは含まれず、南東側端部№1の位置より二重口縁壺の口縁部分が出土している。

1号主体部（図版4・5、第12図）

町教育委員会の調査時に1号主体部として報告されていたもので、そのまま、1号主体部の名称を踏襲した。墳丘の中心よりやや南に外れたところに位置する。掘削中に一部焼土面を検出した。南北1.8 m、東西2.0 m、深さ約0.2 mのやや急な立ち上がりを持つ楕円形の掘り込みとなり、主体部の可能性は低いと思われる。遺物は出土していない。

2号主体部（図版6、第12図）

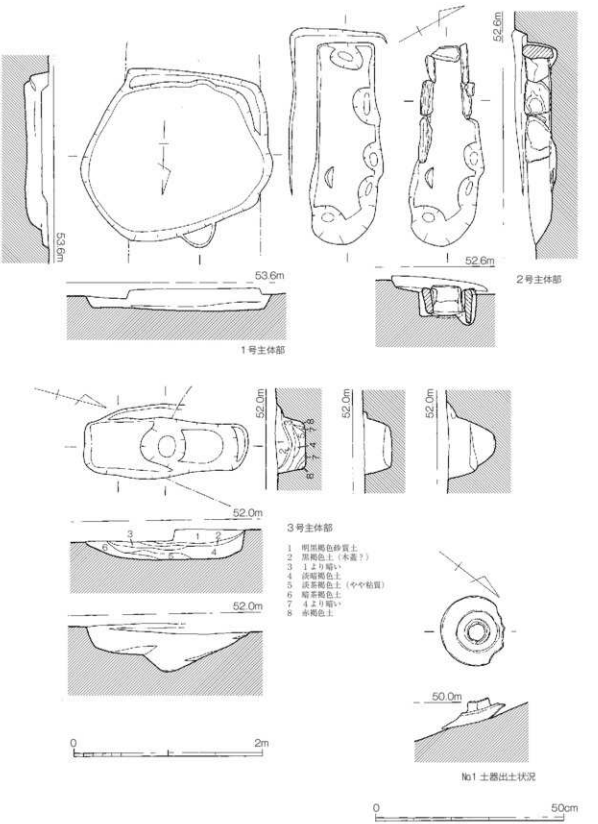
町教育委員会の調査時に2号主体部として報告されていた箱式石棺墓である。西側部分は石を抜かれ、掘り方のみが残る。東側の約半分、小口および側面の立石が残存する。町教育委員会の調査時にはすでにこのような状況であった。残存する部分で幅約0.3 m、掘り方から推定すると、長さが約1.6 mであり、西側の掘り方が広くなっていることから、頭位は西向きであったと考えられる。床面は地山のみ検出しており、礫等は検出されていない。すべてが失われているため、蓋の状況は不明であるが、東側に段が成形されており、何らかの蓋が架けられていいたと考えられる。町教育委員会の調査時を含め、遺物は出土していない。

3号主体部（図版6・7、第12図）

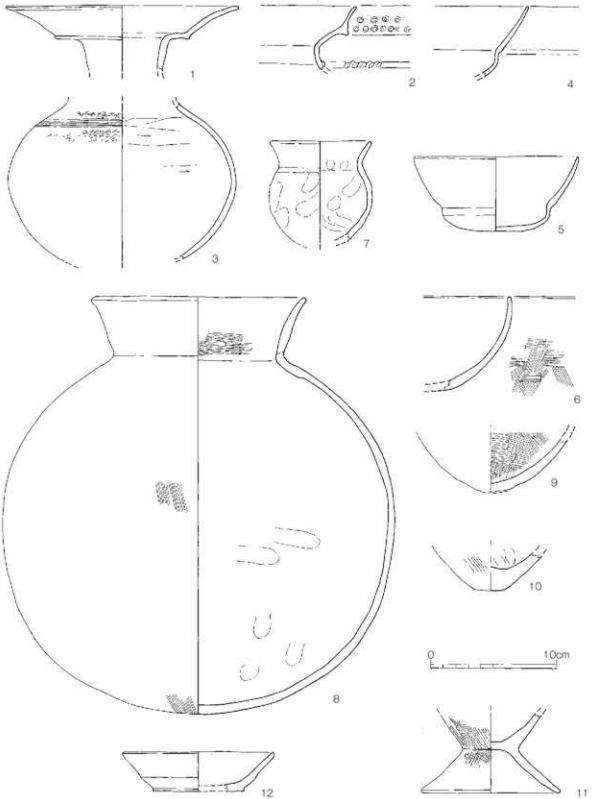
今回新たに検出した主体部である。1号主体部と2号主体部の中間に位置する。長さ1.53 m、幅は南側で0.47 m、北側で0.35 mを測り、頭位は南であったと考えられる。土層からは側面の木材の存在は認められず、また、レンズ状の堆積をしていることから、土坑墓であり、板材が架けられていたが腐食し、土砂が流入したものと考えられる。床面は土層ではほぼ平坦であったが、中央部分が土坑状にやや深く掘り込まれている。床面と思しき部分で礫等は検出されなかった。遺物は出土していない。

出土遺物（図版22、第10・12～14図）

1は墳丘の南東部斜面№1の位置で、口縁を下にした状態で検出した。二重口縁壺の口縁部分である。屈曲部がやや突出し、それより上が外反して広がる。口径18.4cmである。表面の調整は磨滅のため、不明である。2も墳丘南西部斜面で検出した。屈曲部は大きく突出し、わずかに外反しながら広がる。内外面の調整は磨滅が著しいがナデであろう。外面には竹管文が二列に施される。頭部と肩部の境には突帯が貼り付けられ、斜めの刻み目が施される。外面にはわずかに丹塗りの痕跡が残る。3は墳丘南東部で検出した壺の胴部である。胴部最大径18.0cmである。肩部にカキ目が施され、その上下に細かい波状文が施される。器壁は薄く、丁寧な作りである。外面の調整はナデ、内面は上半部にケズリの痕跡が残る。4・5は小型丸底壺である。いずれも墳丘南東部斜面より出土した。底部が浅く口縁がやや内湾しながら長く開くものである。内外面の調整は磨滅して不明で

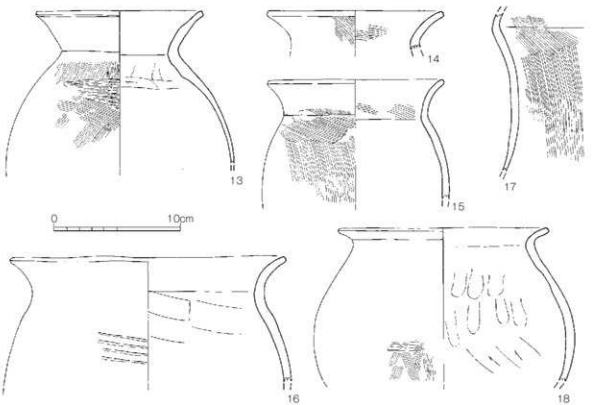


第 12 図　岩屋 1 号墳 1 ～ 3 号主体部実測図（1 ／ 40）・1 号墳墳裾土器出土状況（1 ／ 10）



第13図　岩屋1号墳出土土器実測図①（1／3）

ある。5の口径は12.9cm、器高は5.9cmである。6は塊である。外面にハケ目が見られる。7は小形の壺である。墳丘の北側より出土した。口径8.0cm、胴部最大径8.2cmである。手づくね状の整形で、内外面に強く圧痕が残る。内外面の調整はナデである。8は甕で、墳丘の北側から出土した。球形の胴部にわずかに外反する口縁部が付く。口径17.0cm、胴部最大径31.0cm、器高32.9cmである。外



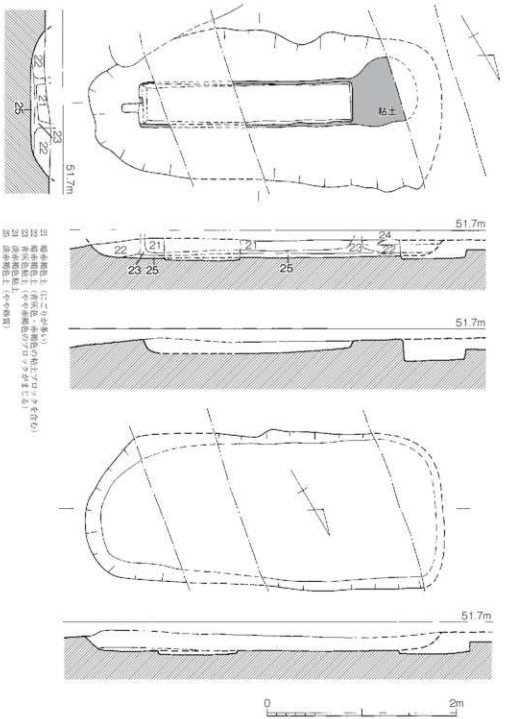
第14図　岩屋1号墳出土土器実測図②（1／3）

面の調整はハケ目である。口縁部内面の調整はハケ目で、胴部内面には圧痕が残る。9・10は壷もしくは甕の低部である。9は墳丘を北東側にやや外れたNo.3の位置で出土した。外面の調整は磨滅して不明、内面はハケ目である。底部を欠くが丸底ではなく、やや底部が残るもののようである。10は墳丘の北東部で検出した。底部がわずかに残るものである。外面の調整はハケ目、内面の調整はナデである。内面には圧痕が残る。11は墳丘の北側で出土した。脚付塊である。底径11.0cmである。外面はハケ目調整。内面は磨滅のため不明である。12も墳丘の北側で出土した。中世の皿である。口径12.0cm、底径7.2cm、器高3.1cmである。内外面の調整はナデである。底部は糸切りである。13～18は甕である。13は墳丘の東側から出土した。やや細身の胴部からわずかに外反する口縁が伸びるものである。口径12.9cmである。外面の調整はハケ目である。内面の調整は口縁部がナデ調整、胴部のやや下った位置までケズリである。14は墳丘の北側で出土した。口径14.0cmである。内外面の調整はハケ目である。15も墳丘の北側で出土した。14と同タイプの甕であり、口径14.0cmである。内外面の調整はハケ目である。16は墳丘の北東部で検出した。頸部と口縁部の境が明瞭でない甕である。口径は21.6cmである。外面はタタキ、内面の調整はケズリである。17は墳丘の北側から出土した。外面の調整はハケ目、内面の調整はナデである。外面にはススが付着する。18は墳丘の南西部で検出した。口縁が短く屈曲する甕である。口径は14.6cmである。外面の調整はハケ目、内面の調整はナデである。内面には強い圧痕が残る。

(2) 8号墳

1号墳の北側はそのまま落ちており、古墳が存在する可能性が低かったが、南側は一旦、落ちるものの、尾根状に平坦面が続いたためトレンチを延長した。そうしたところ、ちょうど粘土を伴う

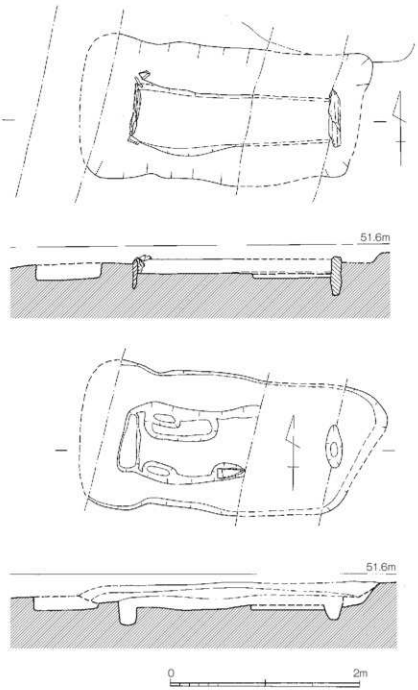
主体部２基に当たったために調査範囲を拡張した。なお、担当者の注意不足により、トレンチの掘削で２基ある主体部を大きく傷つけてしまった点は猛省すべきである。当初、１号墳から延びる前方部の可能性も考えたが、調査の結果、１号墳に後続する独立した円墳であることが判明した。平板測量を行ったが、ほぼ平坦であり、わずかに周囲を成形している痕跡が残るのみであった。なお、８号墳の南側にも尾根が続いていたため、伐採を行い、トレンチ調査を行ったが、遺構は確認できなかった。



第 15 図　岩屋８号墳１号主体部実測図（1／40）

墳丘（図版21、第８～11図）

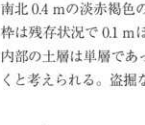
墳丘の盛土はすべて失われている。主体部が露出している状況であるため、本来、ある程度の墳丘を伴っていたのであろうが、風雨による流出もしくは後世の土地改変によってそのすべてが失われている。北西部に浅いながら周溝を伴っており、その他の部分については地山を成形した痕跡が残る。それらから判断すると、やや不整形ながら南北13 m、東西13 mの円墳である。



第16図　岩屋８号墳２号主体部実測図（1／40）

1号主体部（図版16～20、第15図）

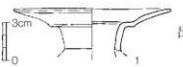
墳丘の中央やや北側で検出した。2号主体部に先行して構築されている。一部をトレンチによって掘削してしまったが、掘り方は東西推定3.8m、幅1.6m、深さは現状で約0.15mが残存する。なだらかな掘り込みで長楕円に近い形状を呈し、床面はほぼ平坦である。この中に東西2.18m、南北0.4mの淡赤褐色の粘土の枠が断面逆「T」字状に立ち上がるように構築されている。粘土の枠は残存状況で0.1mほどであり、恐らくこの中に木棺が組まれていたものと考えられる。主体部内部の土層は単層であった。この枠の西側では粘土が固まった状態で検出された。頭位は西側を向くと考えられる。盗掘などの痕跡はまったく見られなかったが、遺物は出土しなかった。



第17図　岩屋8号墳墳裾土器出土状況（1／10）

2号主体部（図版16～20、第16図）

墳丘の中央やや南側で検出した。掘り方が1号主体部を切っていることから、1号主体部に後続して構築されたと判断した。トレンチにより大きく掘削を行ったため、東側の状況は不明である。掘り方は東西推定3.0m、幅1.4m、深さは現状で約0.1mである。掘り方の形状はやや歪な隅丸の長方形を呈する。東西に石を立て、小口としている。内部は2.01m、南北0.5mで、深さは0.18mほどが残存する。主体部内部の土層は単層であった。小口の石のほかに数か所、石の抜き後のような掘り込みを確認しているが、主体部との関係は不明である。盗掘などの痕跡はまったく見られなかったが、遺物は出土しなかった。



第18図　岩屋8号墳出土土器実測図（1／3）

出土土器（図版20・22、第10・17・18図）

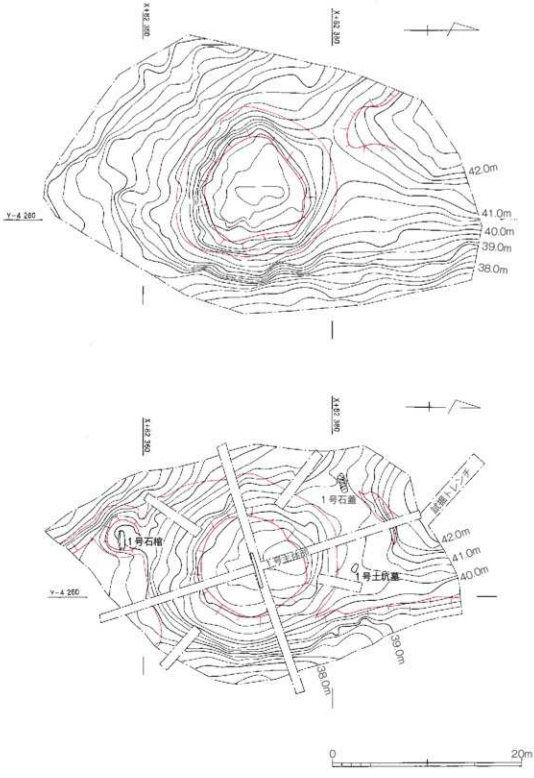
1は墳丘の北西部、周溝内№2の位置で口縁端部を下にした状態で検出した。二重口縁壺の口縁部である。屈曲部は明瞭である。端部は外側に大きく開く。内外面の調整はナデである。

(3)　2号墳

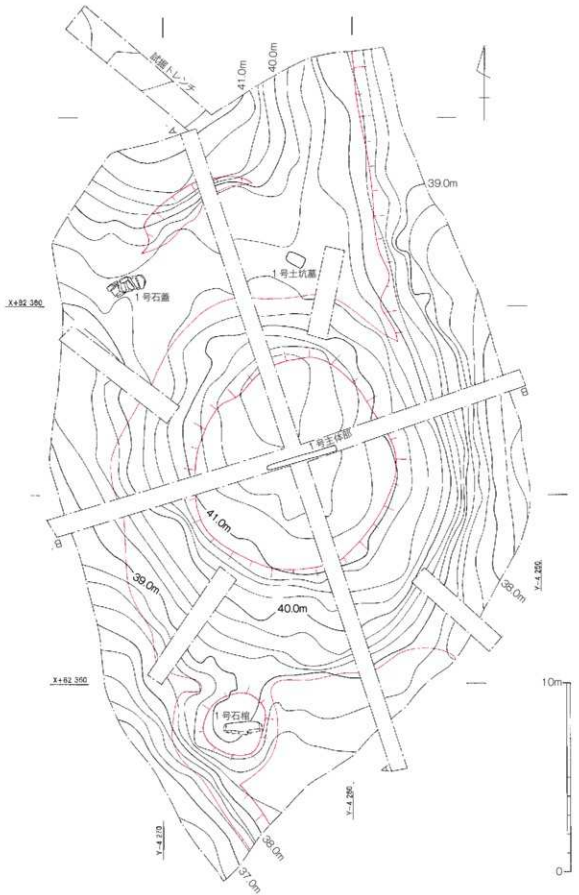
1号墳が構築された尾根から南に15mほど下がった位置に構築される。尾根の端部に築かれており、盛土が明瞭に残っていたため、調査前から古墳の存在ははっきりとわかった。町教育委員会が伐採を行った範囲を中心に再度伐採を行い、平板測量を行った。また、墳丘に十字に開けられたトレンチのほか4箇所のトレンチの掘削を再度行った。中央の主体部のほかに、石棺墓1基、石蓋土坑墓1基、土坑墓1基を検出している。

墳丘（図版10～12、第19～21図）

尾根の端部に築かれており、北側は尾根を切断したため、幅の広い周溝状になっている。その他の方向では周溝は見られない。盛土は東西15.2m、南北11.3mの範囲で残っており、高さは約1mである。しかし、周囲を削り込んでいるために実際にはかなり高く感じる。北側の周溝は約1mが埋まっているが、調査前の状況でも窪んでいる状態は確認できた。盛土の中心部分は大きく盗掘を受けているが、その穴は完全に埋まっている。



第19図　岩屋2号墳調査前・後地形測量図（1／400）



第 20 図　岩屋 2 号墳墳丘実測図（1／200）

1号主体部（図版12・13、第22図）

町教育委員会の調査時に東西トレンチで長さ3.7 m、南北トレンチで幅1.6 mの掘り込みの確認がなされている。しかし、今回、再精査の結果、南北トレンチでは掘り込みは確認できず、長さ3.7 m、幅0.35 mの掘り込みを確認したのみであった。この掘り込みも掘削を行った結果、深さ0.1 mほどで地山となっており、主体部の掘り込みのもっとも下の部分であると判断した。本来の主体部はより上位にあったのであろうが、過去の盗掘等により完全に失われたと考えるのが自然であろう。トレンチの土層を再精査した結果でも長さ4.0 m、幅1.4 + α mの掘り込みを検出している。主体部掘り込みから遺物は出土していない。

出土土器（図版22、第23図）

1は墳丘の南東部より検出した。二重口縁壺の口縁部分であり、屈曲部分がわずかに張り出す。口縁端部は直線的に大きく広がる。口径22.6cmである。内外面の調整はナデである。口縁部の外面には細かな波状文が施される。2は墳丘の南側で出土した。甕の口縁部である。口縁部は外反しながら広がる。口径15.5cmである。外面の調整はハケ目である。胴部内面はケズリを行っている。

1号石棺墓（図版13・14、第24図）

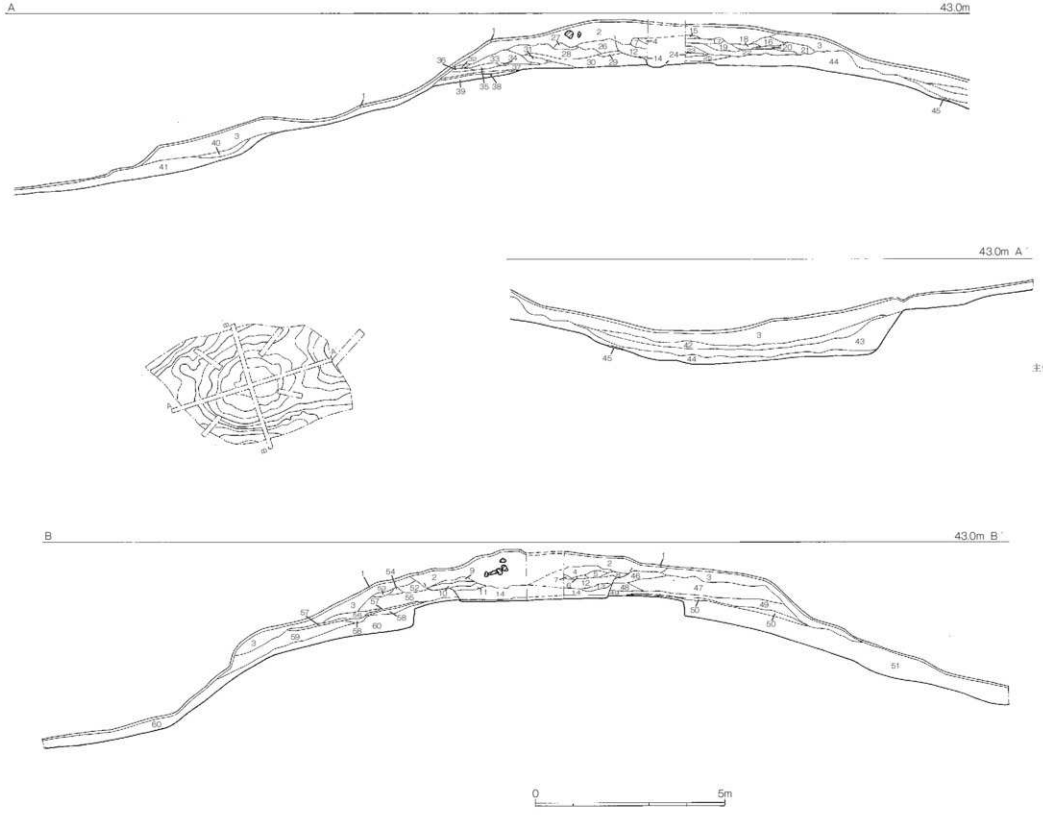
2号墳の南西部で検出した。現状で直径約3 mの平坦面があり、検出面で石棺の側石が露出していることから、小さな墳丘を伴っていた可能性がある。小口にやや大きめの石を立て、南の側石にも大きめの石を並べる。北側の側石にあたる部分は素掘りのままである。石が抜かれた可能性も考え、掘り方の精査を行ったが元々、素掘りであったようである。長さ1.72 m、幅0.5 mほどである。頭位は不明である。遺物は出土していない。

1号石蓋土坑墓（図版14・15、第24図）

2号墳周溝内の北西部で検出した。墓坑は長さ1.9 m、幅0.5 mの長楕円形の掘り込みである。その上に大きめの蓋石を並べる。頭位は墓坑からは判断しづらいが、蓋石の並べ方からすると東側が丁寧であることから、東向きであろうと判断される。足位にあたる西端より礫を1個検出している。遺物は出土していない。

1号土坑墓（図版15、第24図）

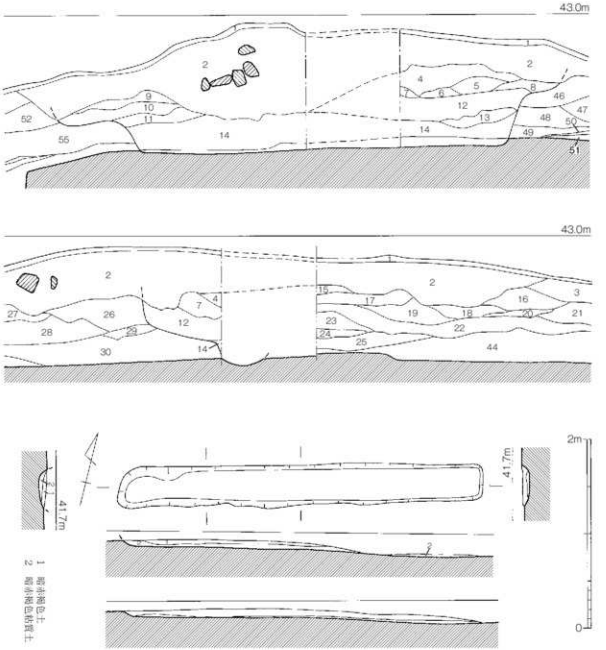
2号墳周溝内の北東部で検出した。長さ0.95 m、幅0.55 mの長方形の掘り込みであり、深さは0.35 mである。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。素掘りで、形状から土坑墓と判断した。頭位は南側が広くなっているので、南向きであろう。遺物は出土していない。



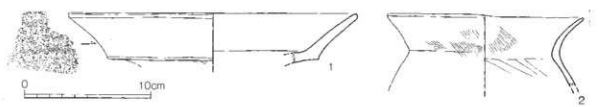
主体部掘方

1 表土
2 カクラン（盗掘？）
3 暗赤褐色土（墳丘流出土）
4 黄褐色土（暗灰色ブロックを含む）
5 暗赤褐色土
（黄褐色ブロックを含む）
6 4と同じ
7 5と同じ
8 黄褐色土（白色ブロックを含む）
9 暗黄褐色土
10 4と同じ
11 5と同じ
12 5より明るい
13 4と同じ
14 暗い赤褐色土
15 淡赤褐色土
（黄褐色ブロックを含む）
16 黄褐色土
（黄褐色・暗赤褐色ブロックを含む）
17 暗灰色土
18 17と同じ
19 16と同じ
20 暗赤褐色土
21 淡暗赤褐色土
22 21より明るい
23 16と同じ
24 21と同じ
25 21より暗い
26 21と同じ
27 16と同じ
28 26より暗い
29 28より暗い
30 25と同じ
31 28と同じ
32 明黄褐色土
33 赤黄褐色土
（淡赤褐色ブロックを含む）
34 21と同じ
35 黄褐色土
36 32より明るい
37 31より明るい
38 暗赤褐色土
39 赤褐色土（地山2次堆積）
40 暗淡黒赤褐色
41 明赤褐色土
42 40と同じ
43 暗赤褐色土
44 明黄褐色土
45 44より暗い
46 淡暗赤褐色土
47 46より暗い
48 淡暗茶褐色土
49 淡赤褐色土
50 暗茶褐色土
51 赤黄褐色
52 暗赤褐色土（褐色ブロックを含む）
53 灰黄褐色
54 53より暗い
55 52より明るい
56 淡黄褐色土
57 50と同じ
58 52より暗い
59 56より明るい
60 51と同じ

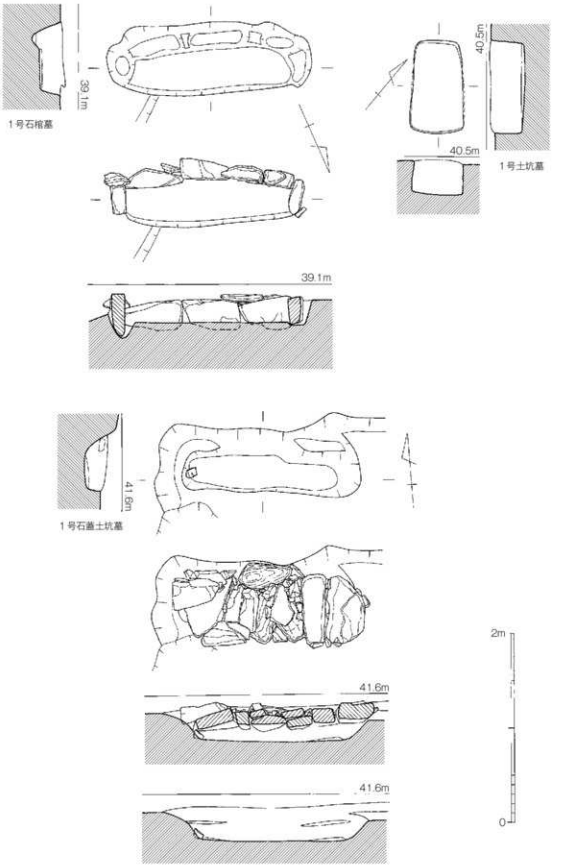
第21図　岩屋2号墳墳丘土層断面図（1／100）



第 22 図　岩屋 2 号墳 1 号主体部実測図（1／40）



第 23 図　岩屋 2 号墳出土土器実測図（1／3）



第 24 図　岩屋 2 号墳 1 号石棺墓・1 号石蓋土坑墓・1 号土坑墓実測図（1 ／ 40）

4　まとめ

(1) 1号墳

1号墳では2号主体部、3号主体部という2基の主体部を検出した。但し、これらは中央を外れた位置にあり、本来の主体部というべきものは検出されなかった。推測にしか過ぎないが、この古墳の主たる主体部は本来、古墳の中心部に構築されていたが、墳丘とともに失われた可能性が高いと考えられる。

(2) 8号墳

新たに検出された8号墳であるが、墳丘の盛土のすべてが失われていた。しかし、周囲の成形の状況、主体部の検出状況からすると、本来、1～2mの盛土があったものと推定される。主体部は切り合いから1号主体部が構築されたのち、2号主体部が構築されたと考えられる。1号墳との前後関係であるが、土層からは確認できなかった。しかし、規模の違い、また、やや下った位置に選地されていることから、1号墳に後続して築かれたものであろう。ただし、出土した土器に明確な時期差がみられないことから、1号墳構築後、あまり時期をあけずに8号墳が構築されたものと考えられる。

(3) 2号墳

古墳の中心主体部の検出が期待された古墳であったが、残念ながら過去の盗掘等により、失われていた。出土した遺物がほとんどないため、判断は難しいが、立地から見ると1・8号墳に後続するものと考えられる。

以上、岩屋1・2・8号墳の3基の全面発掘調査を行った。古墳群の展開については、町の教育委員会の報告書が指摘するとおり、まず立地的に最も優位に位置する1号墳が築造され、その後、2号墳が築造されたと考えている。今回、新たに発見された8号墳についても、2号墳との関係は不明であるが、1号墳が築造されたのち、時期を隔てずして築造されたものと考えている。その他の古墳についてはその後、順次、築造されていったものと考えている。

Ⅳ　上片島遺跡群

1　調査の経過

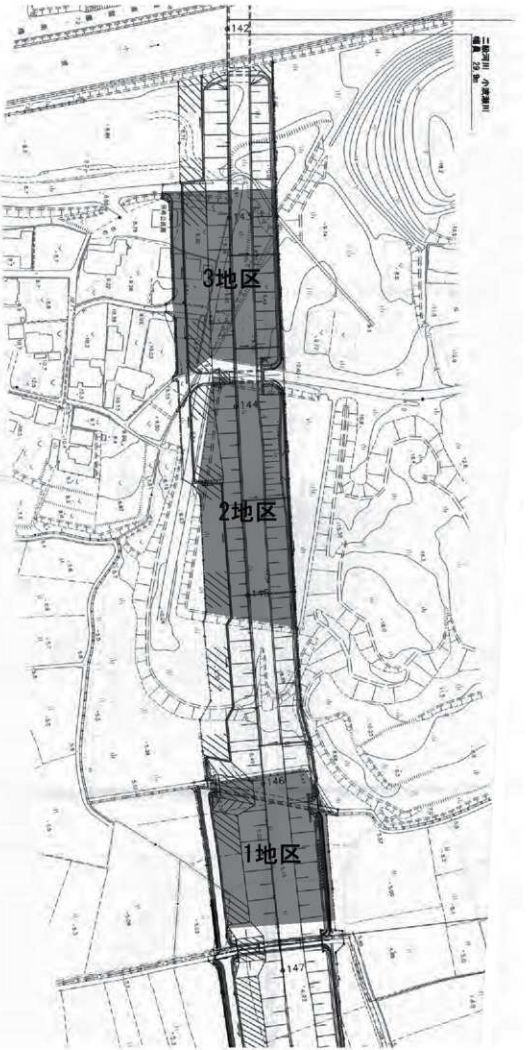
上片島遺跡は、小波瀬川流域の独立丘陵上に位置している。東九州自動車道の路線が瓢箪形をなす丘陵のくびれ部分を横断しており、路線内でも遺構のない部分が認められたため、南側から順に1～3地区と区分けしている。調査中は2・3地点と仮称していたが、苅田町教育委員会による町道建設に伴う調査や、国道201号行橋バイパス建設に伴う調査が行われた関係で、町と協議の上、番号を振りなおした（第25図）。また、3地区については用地の進捗状況ならびに工事予定の関係から21～23年度まで細切れに調査を行っており、特に22・23年度については調査段階で細かく区分けされている（第26図）。しかしながら、最終的には全面的に調査を行っているため、本報告では3地区として一括で報告する。以下に年度ごとの調査経過を纏める。

平成21年度は南側丘陵下の1地区、丘陵上の2地区（盛土部分）および3地区のうち町道の東側の調査を行った。調査面積は約3,400㎡である。調査は城門が担当した。

梅雨が近いために、まず低地である丘陵下の1地区から調査を行うこととし、平成21年5月7日からバックホーによる表土掘削を開始した。2日間ほど剥いだところで、砂質土と粘質土が交互に堆積していることが確認され、また試掘調査でも遺構は発見されていないことから、調査区の端のみ地山まで掘削し、その他は遺物が散見される褐灰色砂質土まで剥ぐこととした。5月18日には作業員による人力掘削を開始し、任意に設定したトレンチを掘り下げていった。特に丘陵近くでは遺物の散布が多いことが予想されたため、北側にA・Bと二つのトレンチを設定した。ただ、砂質土であるため、周囲の田から水が流れ込み、壁面が崩落する部分が見られたため、安全に掘削できる範囲までを人力で掘削することにした。5月23日～6月22日までの1ヶ月間は調査担当者入院のため中断したが、再開後7月9日には全体写真を撮影し、7月17日に埋め戻しが完了した。再開後は梅雨時ということもあり著しい湧水に悩まされ、7月頭の大雨の際には調査区が完全に水没し2日間かけて水抜きを行った。またそれ以外にも毎日排水を続け、バックホーが埋まり、身動きが取れなくなることもあった。

3地区の調査は、1地区の調査継続中の7月2日に草刈を行い、翌3日からバックホーによる表土除去を開始した。集落内から続く素掘りの水路が南北方向に走っていたため、調査区を東西に分けて反転することとなった。7月10日には1地区から順次作業員を移動させ掘削を開始した。調査区の中央が一番高く南北両方に向かって落ちていくため、南北端では遺構密度が高く、残りもよいが、中央部では逆に、以前まで畑地だったために畦の痕跡が残っており、遺構の残りもよくなかった。8月26日にはラジコンヘリによる空中写真の撮影を行い、同31日よりバックホーを再度搬入して反転を開始した。中央部分は先述のように削平されていたため南北両端のみ反転を行った。3地区の表土剥ぎが終わった9月7日に2地区に空中写真と比較しながらトレンチをいれ、旧地形の確認を行った。一部ピット等の遺構が確認されたため掘削することとしたが、盛土が2m以上あり安全勾配を考慮したため、調査できた面積は約50㎡である。その後3地区の掘削を継続し、9月16日にハウス等の建機を撤収し、17日に空中写真を撮影した。5月22日には文化財保護課の事業として安全パトロールが実施され、教育次長と理事が来跡した。また、平成22年4月に、調査の結果をまとめ、地域回覧として配布した。

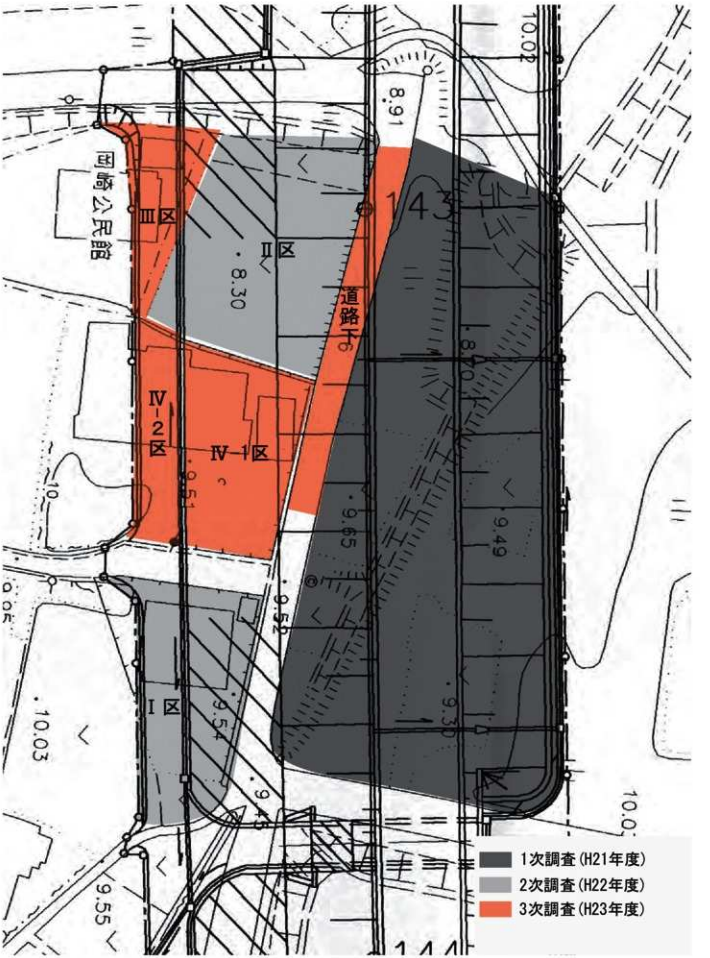
平成22年度は3地区、Ⅰ・Ⅱ区の調査を行った。対象面積は800㎡である。調査は高橋、池邉



第 25 図　上片島遺跡群調査区割図（1／2,000）

および大森が担当した。平成23年1月24日にバックホーを搬入し、Ⅰ区の表土除去作業を開始した。掘削土を置く場所を対象地内に確保できなかったため、残土は21年度に調査が終了している部分に2ｔトラックで搬出した。1月29日までの6日間で遺構面の検出が終了したため、1月31日に機材を搬入し、2月2日から作業員によりⅠ区の掘削を開始した。本調査区の地山は粘質土であるため水はけが悪く、雨や霜によりぬかるみ、作業は遅々として進まなかった。ようやく、2月21日にⅠ区の調査が一段落ついたため、順次Ⅱ区の調査に移行した。3月8日には5世紀後半と考えられる須恵器の甕がほぼ完形の状態で出土し、続いて3月15日にも同様の形態を呈する須恵器の甕が出土した。写真記録、図面記録を行い、3月18日にラジコンヘリによる空中写真を撮影した。3月22日には機材の撤去を行い、3月23日からバックホーによる埋め戻しを開始し、同28日に終了した。なお、2011年2月16日に苅田町教育委員会長嶺正秀氏が来跡した。

平成23年度は、前年度まで用地進捗の関係で残っていた、3地区のⅢ・Ⅳ区および現道下の調査を行った。調査は藤島が担当し、佐々木が補助した。初めに狭隘なⅣ-2区の調査を行ったが、これは現道の付け替え道路を作る関係で幅約6mのみを先行して調査するよう依頼を受けたものであり、面積は約300㎡である。調査着手時点では用地内の宅地の収去および解体が終了しておらず、調査範囲のすぐ横に半截された宅地が残っていた。そのため、作業小屋等は借りず、宅地所有者の御好意で納屋の軒先を借り、休憩所とした。また、調査区北側では既に工事に着手していたため、工事業者のトイレを借用させてもらった。平成23年10月21日にバックホーを搬入し、表土除去作業を開始し、24日には作業員による遺構掘削を開始した。周辺の調査区で北端部以外はさほど遺構がなく残りも悪いものと予想されたが、住居跡が多く、残りもよいこと、また、調査範囲が狭く切り合いがつかみにくいことなどから時間がかかった。11月7日に掘削が終了し、全体写真を撮影した。その後、すぐに北側の公民館下（Ⅲ区）の調査に取り掛かる予定だったが、公民館の解体が予想以上に伸びたため、一度コンテナ等の建機撤去を撤収し、待機することになった。12月9日にようやく解体が終了し調査に着手できるようになったため、バックホーを搬入し、前回調査区の埋め戻し終了後、Ⅲ区の表土除去作業に入った。調査対象は約200㎡である。今度は予想に反して遺構密度が少なく、12月15日には全体写真を撮影し、20日には埋め戻しを含め調査が終了した。また、遺構面まで達していることが想定されたため、同日工事業者による宅地基礎の除去作業に立会した。年が明けて平成24年1月5日に再度バックホーを搬入し、Ⅳ-1区の調査に着手した。調査範囲は約360㎡である。Ⅳ-2区の隣接地で残りのよい住居跡が多く、掘削に時間を要した。また、例年になく雨や雪が多く、特に1月25日には平地でも5～10㎝程度の積雪があり、峠などの交通規制もあって、現場までたどり着けないほどであった。2月16日には25号住居跡の屋内土坑から土師器甕、高坏とともに初期須恵器把手付埦が出土した。2月21日には概ね遺構の掘削が終了したため、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、同24日に埋め戻しを終了した。3月に入り5日には道路の付け替え工事が完了したため、現道のアスファルト撤去後、バックホーを搬入し、表土剥ぎを開始した。調査面積は約260㎡である。東西両方向ともに既調査で状況が把握しやすかったため、3月12日には掘削を全て終了し、同15日には埋め戻しを含め調査が終了した。



第 26 図　上片島遺跡群 3 地区調査時区割図（1／500）

2　遺跡の概要

上片島遺跡は、現在の海岸線から約 5km 内陸に入った、標高 10m 前後の低・中位段丘上に位置している。丘陵は平面が瓢箪形をなす独立丘陵で、今回の発掘調査箇所はそのくびれ部分に当たる。丘陵の北側には小波瀬川が東流しており、南側には低地に田園地帯が広がっている。低地の先には同じく丘陵上に延永ヤヨミ園遺跡が展開しており、目視することができる。報告中の土色については、調査者の所見をそのまま記載しており、年度ごとに齟齬が見られるが、概ね調査区内の堆積土は地山が黄橙・黄褐色粘質土を呈しており、遺構の埋土は黒褐色土ないしは暗黒褐色土、暗茶褐色である。

遺物および遺構は、主として 3 地区を中心として検出している。時期は、概ね弥生時代終末～古墳時代前期頃、古墳時代中・後期、中近世に分かれている。主要な遺構は、弥生時代～古墳時代については竪穴住居跡、土坑など、中近世については溝、火葬土坑などが検出されている。

遺構のほとんどは 3 地区から検出されている。竪穴住居跡は 34 軒あり、弥生時代後期～古墳時代後期に属している。竪穴住居跡は調査区中央部分では削平のために残りが悪いが、小波瀬川方向へ落ちていく北斜面には比較的残りのよい住居跡が検出されている。土坑は貯蔵穴や廃棄土坑を主として 3 地区で 12 基検出した。溝は概ね中世～近世に属するものと考えられ 26 条検出された。

なお、1 地区では河川由来と考えられる堆積層から土器や木製品が出土しているほか、時期不詳の杭が検出された。2 地区では、厚い盛土のため全面的に調査することはできなかったが、旧地形の落ちを確認し、落ち際にいくつかのピットを検出した。

調査区は先に述べたように、一部は調査時には枝番号をつけていたものの、一連の遺跡および調査区であるためここでは省略する。

3　遺構と遺物

（ｉ）1 地区（図版 25、第 27 図）

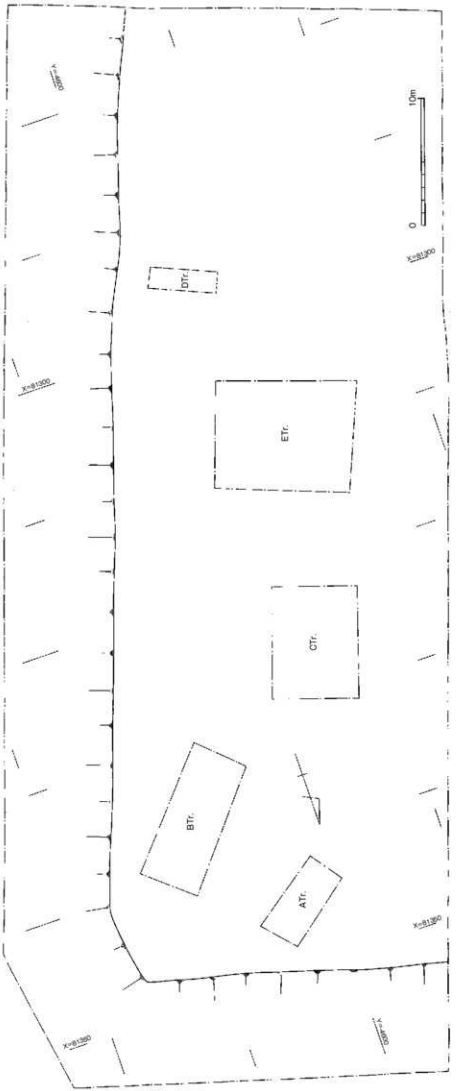
1 地区は標高 5m 以下の低地で、丘陵の南裾部分に当たる。調査は試掘調査で遺物の出土が示唆された層まで重機で剥いだ後、先に述べたようにトレンチ調査を行った。人力で計 4 つのトレンチ（A・B・C・E）を掘削し遺物の採集ならびに堆積土の観察を行った。ほぼ全てのトレンチで 1m ほど掘ったところで水湧のため壁面が崩壊し始め、それ以上の掘削は行っていない。また、重機で 1 つのトレンチ（D）および L 字状に周囲を掘削し、堆積状況の確認ならびに遺構の有無確認を行った。

(1) トレンチ

A トレンチ（図版 25、第 28 図）

調査区の最も北側に設定した。3.5m × 6.5m の長方形トレンチである。砂層および粘質土層が交互に堆積しており、各層は北に向かって傾斜している。遺物は土器および木質がまばらに出土した。出土土器（図版 66、第 31 図）

1 は小型の壺である。復元口径 13.2cm を測る。口縁が直線的に伸び、胴部は張らない。口縁部にヨコナデ、胴部内面に不定方向のケズリを施す。胴部外面は粗いナデを施すが、工具痕が多く見られる。内外面下部にススが付着する。5 層出土。2 は甕である。復元口径 16.6cm を測る。口縁



第27図　1地区トレンチ配置図（1／300）

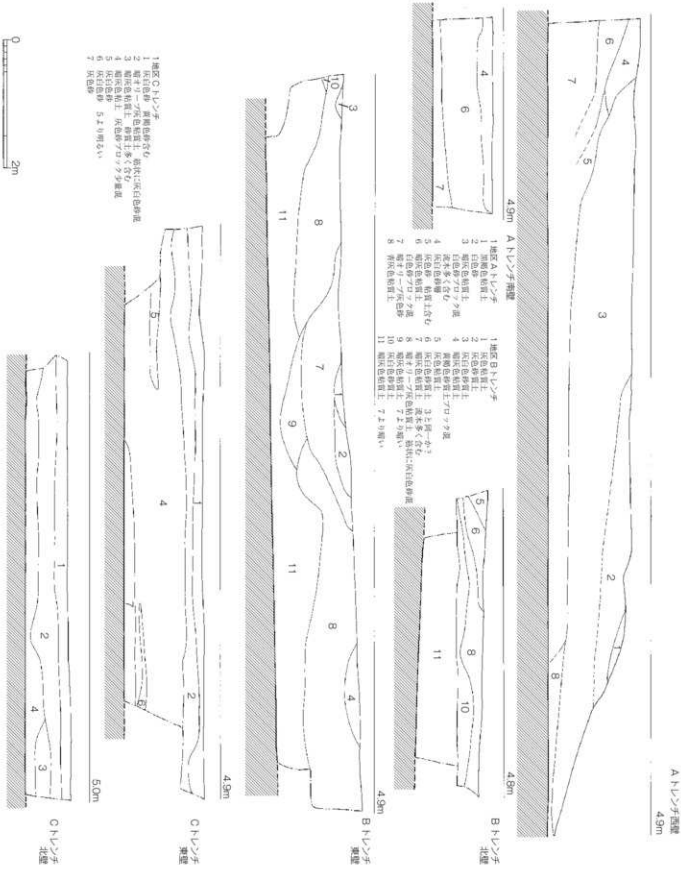
はやや外湾する。口縁部にハケ後ヨコナデを施し、一部被熱痕跡が見られる。胴部外面にはハケ後タタキ、胴部内面にハケを施す。胴部内外面下半にススが付着する。上層出土。

Bトレンチ（図版26、第28図）

調査区の北東側に設定した。5m×11mの長方形トレンチである。砂層および粘質土層が交互に堆積しており、各層は北に向かって傾斜している。中央部分で一部南側のみ溝状の肩を呈する部分（7～9層）があり、一時期に幅3mほどの流路が形成されていたものと考えられる。トレンチの南端から流路の端にかけて杭が見られ、東側に向かって続いている。遺物は土器および木質がまばらに出土した。

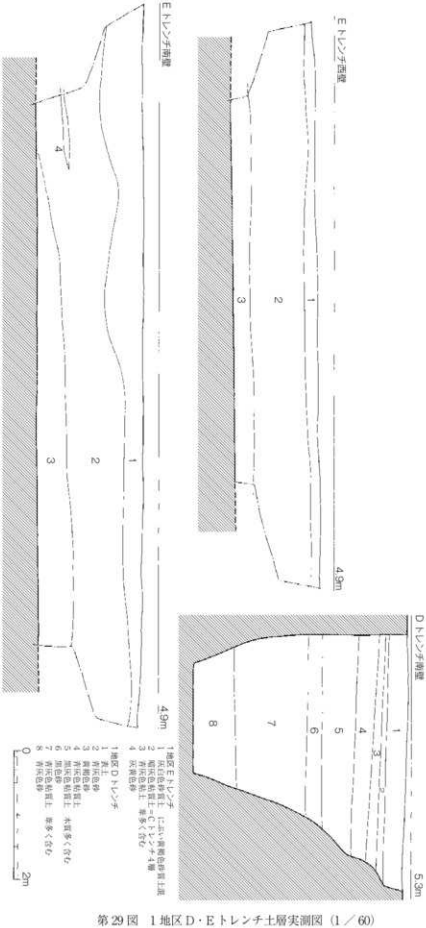
出土土器（図版66、第31図）

3は甕である。口縁は短く、やや内湾する。口縁部にナデ、胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。トレンチ出土。4～7は埦である。口径はそれぞれ13.4、13.6、13.6、13.0cm、器高は3.4、3.4、3.8、3.8cmを測る。4・5は内外面にミガキ、6・7は内外面ミガキを施し、外面下半には指頭圧痕が見られる。7の指頭圧痕内部にはハケ様の痕跡が見られる。4・7は上層、5は杭



第 28 図　1 地区 A ～ C トレンチ土層実測図（1／60）

列付近、6 はトレンチ出土。8 は須恵器の坏蓋である。復元口径 15.2cm、復元器高 3.2cm を測る。内外面ともに回転ナデを施し、中央部のみ不定ナデを施す。つまみは欠損しているものの宝珠形を呈するものと考えられる。杭列付近出土。9 は須恵器の坏身である。しっかりとした高台がつき、復元底径 10.0cm を測る。内外面ともに回転ナデを施し、底部外面中央部のみナデを施す。底部外



第 29 図　1 地区 D・E トレンチ土層実測図（1／60）

面にヘラ記号が見られる。杭列付近出土。10 は須恵器の甕である。口縁部下に断面三角形の突帯を貼り付け、その下部にわずかに沈線を施す。内外面ともに回転ナデを施し、内面には灰かぶりが見られる。上層出土。11 は須恵器の壷か。内外面ともに回転ナデを施し、口縁端部から約 2.5cm 下部には沈線が施される。上層出土。

C トレンチ（図版 26、第 28 図）

調査区の中央に設定した。8m × 9m のトレンチである。砂層および粘質土層が交互に堆積しており、各層はほぼ水平に堆積している。遺物は土器および木質がまばらに出土した。

出土土器（第 31 図）

12 は壷の底部である。底径 8.1cm を測り、平底を呈す。内面ハケ、外面タタキ後ハケを施す。底部には工具による「＊」の痕跡が見られる。中層砂層出土。

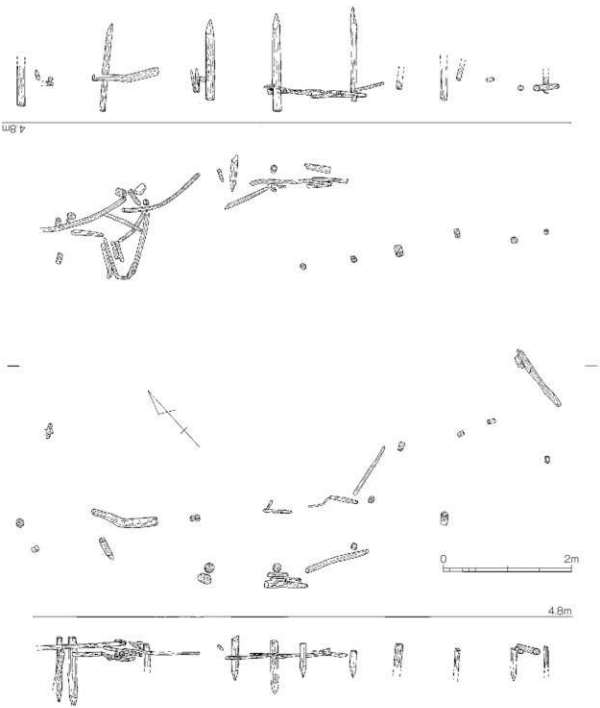
D トレンチ（図版 27、第 29 図）

調査区の南側に設定した。重機で掘削したため幅は狭く、1.5m × 4m ほどの長方形トレンチである。3m 掘削したが地山を確認できなかった。砂層および粘質土層が交互に堆積しており、各層はほぼ水平に堆積している。黒灰色粘質土層からは木質が、下層の青灰色粘質土層には葦が多く含まれており、湿地帯であったことが示唆される。図化に耐えうる土器は出土していない。

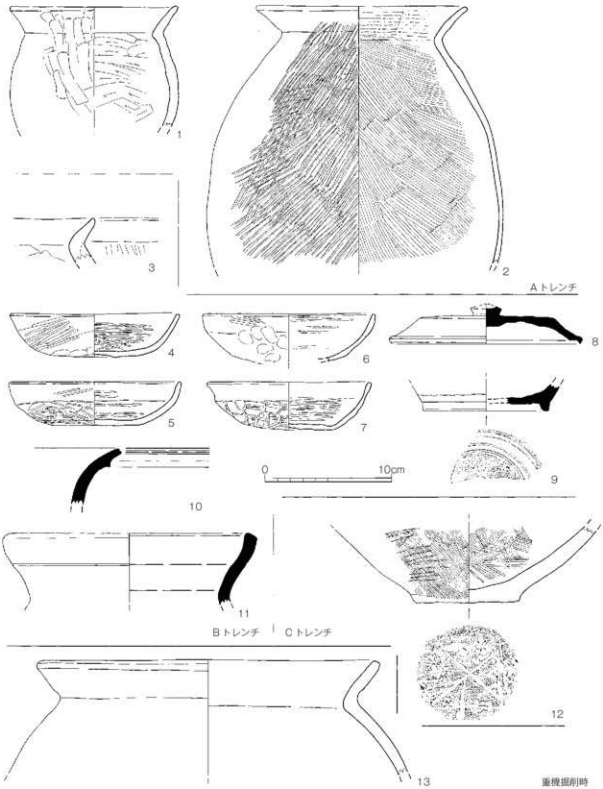
Eトレンチ（図版27、第29図）

調査区の南西側に設定した。9m × 11m の長方形トレンチである。砂層および粘質土層が交互に堆積しており、各層はほぼ水平に堆積している。遺物は土器および木質がまばらに出土した。図化に耐えうる土器は出土していない。

(2) 杭（図版26、第30図）



第30図　1地区Bトレンチ杭出土状況実測図（1／60）



第31図　1地区出土土器実測図（1／3）

Bトレンチの南側および調査区東側に向かって標高5m弱から打ち込んだと考えられる杭が認められる。大局的にみると2～3mの幅を持って2列に並ぶ状況が認められ、杭間の幅は80cm前後のものが多い。北側の杭は先に述べた流路の南端に沿って検出されており、両者が確認された層がほぼ同一であることから、流路に伴う杭である可能性が高い。杭の間からは板などは認められず、一部で棒が杭に引っかかるような形で検出されている。簡易な水路ないしは堰のようなものだった

可能性もある。

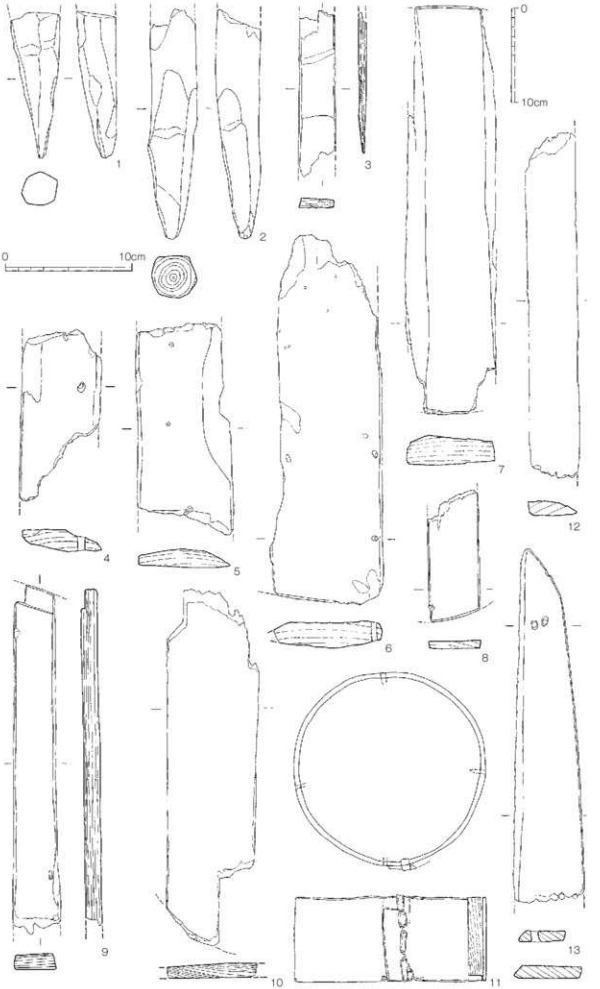
その他の出土土器（第 31 図）

13 は重機掘削時に出土した甕である。復元口径は 27cm を測り、口縁は直線的に外反する。内外面ともに磨滅しており、口縁はわずかにヨコナデの痕跡が認められる。

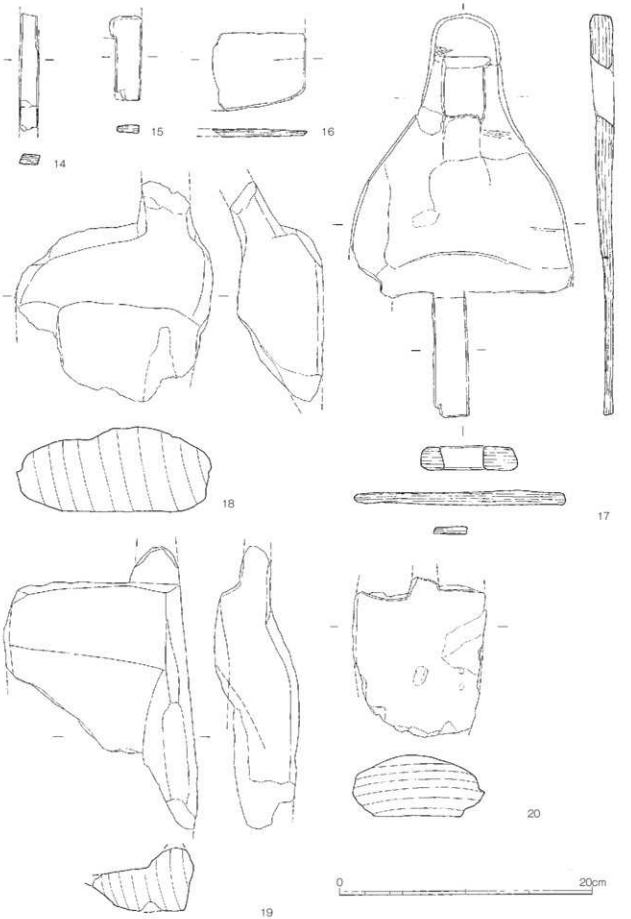
(3) 出土木製品（図版 66・67、第 32 ～ 34 図）

各トレンチおよび重機掘削時に 1 地区から出土した木製品を纏めて報告する。

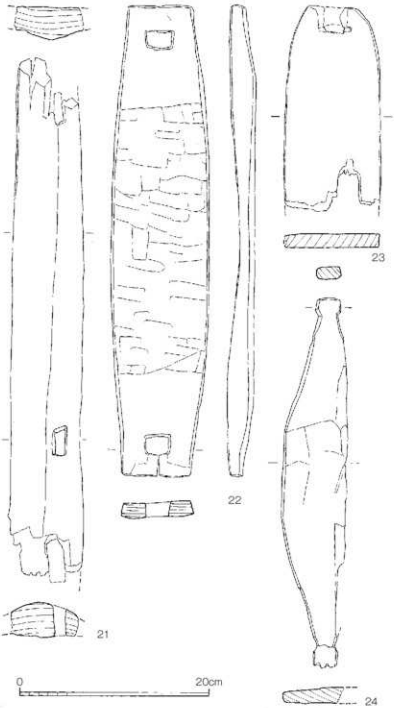
1・2 は杭である。1 は 4 箇所を削りだして先端を尖らせるが、外周の約 1 ／ 3 は樹皮を剥ぐのみで加工は認められない。2 は大きく 3 箇所を削りだして先端を尖らせるが、杭の上方ならびに先端の裏半分ほどは樹皮がついたままである。1・2 ともに先端がわずかに潰れており、打ち込んだ際に潰れたものと考えられる。ともに BTr. 検出の杭である。このほかにもいくつかの杭が出土しているが、作り方は概ね 1 ～ 3 箇所を削りだして先端を尖らせるもので、最低限の加工で杭を作ったものと考えられる。3 ～ 7 は板ならびに板状木製品である。3 は表面を削って平らにしており、下 1 ／ 3 は斜めに削ることにより先を薄くする。ETr. 上層粘層出土。4 は上面を削って平らにし、2 箇所に径 0.5cm ほどの穿孔を斜めに穿つ。CTr. 中層粘層出土。5 は両面を削って平滑にし、右側を尖らせる。CTr. 中層粘層出土。6 は両面を削ってやや平滑にし、径 0.5cm の孔が右端に沿うように 2 箇所見られる。CTr. 中層粘層出土。7 は両面を削って平滑にしており、一部には稜が形成される。下面の一部が炭化しており、火を受けたものと考えられる。8・10 は底板、9 は蓋板である。8 は組み合わせ式の底板で、下部に端部が残る。破損しているものの、左下部分に径 0.2cm ほどの綴じ孔が認められる。5 ～ 6 枚ほどで 1 枚の底板を形成したものと考えられる。ETr. 上層粘層出土。10 も側面が直線的になることから組み合わせ式の底板になるものか。下部に端部が残る。試掘 12Tr. 出土。9 は組み合わせ式の蓋板である。端部を 0.5cm ほど削りだすことで段を形成する。下部には 0.9 × 0.3cm、深さ 0.15cm のほぞ穴が彫られており、組み合わせに使用したものか。包含層出土。11 は円形曲げ物である。底板は径 15cm、厚さ 0.5cm の一枚板を使用し、その周囲に厚さ 0.3 ～ 0.5cm の板を一周させている。底板とは 4 箇所で径 0.3cm 前後、長さ 1.5cm ほどの木釘を目釘穴に差し込んで固定している。側板は 2cm 以上の重複をさせたうえで桜の皮を綴じ皮として使用し、4 往復させている。側板の内面には縦方向を中心として擦痕が多数認められるが、斜め方向のものなど規則性は認められない。包含層出土。12・13 は不明木製品である。12 は削り込んで右側のみ尖らせており、刀のような断面形を呈する。繊機や柄杓形木器などの柄などの可能性がある。包含層出土。13 は側縁が徐々に細くなっており、上部および下部には径 0.5cm 程の孔を 2 箇所ずつ穿つ。長楕円形や舟形曲げ物の底板の可能性もある。上部の孔周辺には上下方向に擦れた痕跡が認められ、上下方向に紐を張って固定していた可能性もある。BTr. 杭周辺出土。14 は棒状木製品である。両面ともに加工が認められるが、詳細は不明である。ETr. 上層粘層出土。15 ～ 17 は鍬である。15 は鍬の刃と考えられ 17 と同一個体の可能性もある。16 は鍬体部の端部と考えられる。遺存部分には刃が折れた痕跡は認められない。17 は四股鍬か。上部には柄を差し込むための、4.7 × 3.2cm の長方形孔が斜めに穿たれる。柄と刃の角度は 45 ～ 50° になる。また孔の周囲には擦痕が認められ、柄を緊縛した際の痕跡と考えられる。刃は 1 本のみが遺存しており、長さ 9.8cm、幅 2.7cm、厚さ 0.7cm を測る。先端はやや潰れて膨らんでいる。包含層出土。18 ～ 20 は柄が付くと



第32図　1地区出土木製品実測図①（7・9は1／4、他は1／3）



第33図　1地区出土木製品実測図②（1／3）



第34図　1地区出土木製品実測図③（1／4）

考えられる不明木製品である。18・19は上方の右端に幅4cm程の突起があり、欠損している。18は下部を平らに成形しているほかはあまり加工が見られず、未製品である可能性もある。CTr.中層粘層出土。19は上面に削りだしによる刳り込みが認められちりとりの様な形体をするものか。CTr.中層粘層出土。20は中央部に幅2.5cm程の突起が付き、欠損している。断面蒲鉾形を呈する。CTr.中層粘層出土。21は部材である。断面蒲鉾型を呈し、上下端および下端から13cmのところで、2.7～4cm×0.9～1.6cmの長方形ほぞ穴が作られる。ほぞ穴は板に対してまっすぐにあけられており、上下端のほぞ穴部分で欠損する。全体が木の変形のためにねじれている。重機掘削時出土。22・23は不明木製品である。両側がややすぼまり、端部に長方形のほぞ穴が作られる。22は上2.6×1.7cm、下2.3×1.8cmのほぞ穴が作られ中央部が削られ薄くなっている。23は全体が平滑で、破損しているものの2.1×0.8cmのほぞ穴があったものと考えられる。組み合わせ式椅子や案の天板、部材、織機の腰当などの可能性が想定される。24は織機の腰当ないしは田下駄か。両端に2.5×2.0cmの突起を作り出し、さらにその下部にくびれを設ける。中央部が膨らんでおりわずかに加工痕が認められる。包含層出土。

小結

以上のトレンチの状況から、北側の丘陵に近い部分に関しては一時期に流路が形成されていたこと、またDトレンチから下層で葦を含む層が確認されており、流路形成期以前には湿地帯であったことがわかる。遺物をみると弥生時代後期～古代の土器が出土しており、また、図化していないものの中には中世に属すると考えられる陶磁器片なども散見された。しかしながら、これらの土器が全てのトレンチでまばらに出土しており、また層位学的正位置も保っていないことから、堆積層や流路の時期がいつに当たるかは比定できない。このような傾向はL字状の水溜めトレンチにおい

第35図　2地区遺構配置図（1／350）

ても同様で、地山面では遺構は確認されていない。以上のことから、一時期には流路周辺に杭などを立てていた痕跡が認められるものの、長いスパンで見ると、土地利用の痕跡は乏しく、湿地等による粘質土の堆積、流路や洪水等による砂の運搬、浸食が繰り返されてきたものと推定される。

（ⅱ）2地区（図版28、第35図）

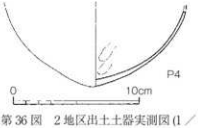
2地区は、現況での標高が12mほどで、苅田町の土捨て場となっていた部分である。調査は過去の地図や航空写真から、一部で丘陵上部分がかかっている事が想定されたため、重機によるトレンチ掘削により丘陵の落ち際を確認していった。南側の1トレンチから北側の4トレンチまで計4本のトレンチを掘削し、遺構が確認できた2トレンチのみ表土剥ぎを行い、遺構掘削を行った。

（1）トレンチ

1・3トレンチでは各々標高8.6・8.8mで地山が検出され、そこから西側は1.3m以上の落ち込みが見られた。どちらのトレンチでも遺構および遺物は確認されていない。4トレンチでは標高7.1mまで掘削したものの、地山は確認できず、3トレンチと4トレンチの間で瓢箪形丘陵のくびれ部に続くものと考えられる。2トレンチでは標高9.3mで地山が検出された。西側は他のトレンチと同じく1.3m以上の落ち込みが見られたが、2トレンチでのみ遺構が検出された。検出された遺構はピットのみで調査範囲が狭小なため、建物等の復元はできない。

出土土器（第36図）

図化に耐えうるものは1点のみで壷である。底部のみ遺存しており、底部がわずかに尖る。内外面ともに磨滅するが、内面底部付近にわずかに指頭圧痕が認められる。古墳時代初頭に属するものか。P-4出土。



第36図　2地区出土土器実測図（1／3）

小結

以上のことから、第84図のように旧地表が復元される。2トレンチで検出された遺構群は集落縁辺部に当たるものと考えられ、出土土器および土器片から3地区の

集落と同様な時期に展開し一体の集落を形成するものと考えられる。地形の復元等は後にまとめて言及する。

（ⅲ）3地区（図版23・24・28、第37図）

3地区は標高9～10mほどの丘陵上に位置し、南北両側に向かって傾斜していく。また先に述べたように、今回の調査の中で唯一遺構がまとまって検出された。平成21～23年度の3年にわたり発掘調査を行ったが、21年度調査分と22・23年度調査分では、先に示した区分けを先に行ったうえで、遺構の番号を1号・2号・・と振っている。しかしながら、ここでは同一区内として一括して報告するため、より煩雑になるピットを除き、通し番号を振りなおしている（第2表）。

（1）竪穴住居跡

調査区内で34軒の住居跡が検出された。時期は弥生時代後期後半～古墳時代後期にかけての住居跡である。調査区内の中央部から北側にかけてほとんどの住居跡が検出されており、特に西側中央の調査区境付近でもっとも密度が高い。

1号住居跡（図版29、第38図）

調査区の東側に位置し、2号住居跡を切り、現代の水路に切られる。規模は長軸380cm、短軸290cmで長方形を呈する。深さは5cm以下で壁溝により住居跡と確認した。中央やや東よりで2基の炉跡が確認され、南側には屋内土坑と考えられるP-3が確認された。主柱穴は東側にP-1があるもののそのほかには判別できない。

出土土器（第41図）

1は甕である。口縁部のみが遺存し、わずかに外湾する。内外面ともに磨滅しており調整は不明である。炉跡1出土。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代初頭に属するものと考えられる。

2号住居跡（図版30、第38図）

調査区の東側に位置し、1号住居跡に切られる。規模は長軸440cm、短軸370cm、深さ5cmで長方形を呈する。ベッドを持ち、上段では削平のため深さが2cmほどしか残っていないため、元々のプランは南北により大きかった可能性がある。中央やや東よりに炉跡が確認され、さらにその東側では勾玉が出土した。東側ベッドの脇では焼土が検出されている。東側壁際には100cm×65cm、深さ30cmの屋内土坑（P-1）が検出され、土器とともに焼土が出土した。

出土土器（第41図）

2は高坏である。口縁部が強く外湾する。調整は、磨滅のため不明である。P-1出土。3は小型丸底壺の底部か。平底がわずかに残る。P-1出土。このほか後述する石製勾玉が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。ただ、高坏の屈曲が大きく、口径も小さいことから切り合いの認識を間違った可能性もある。

3号住居跡（図版30、第39図）

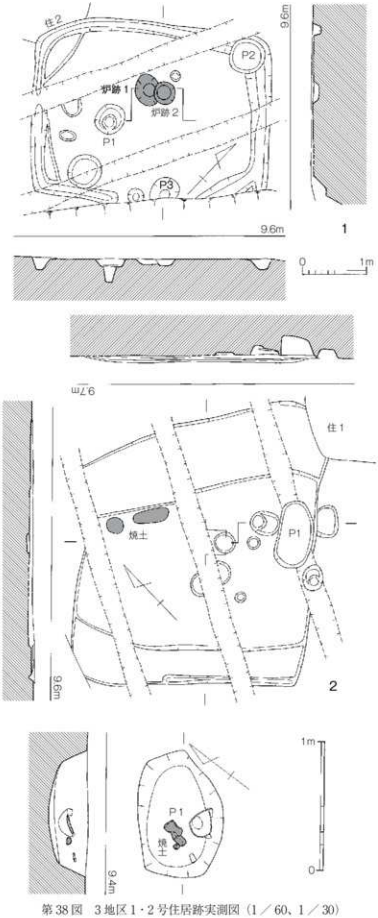
調査区の中央に位置し、1～4号溝に切られる。規模は長軸320cm、短軸245cm、深さ3cmである。

第37図　3地区遺構配置図（1／250）

第２表　上片島遺跡遺構対照表

調査年度	調査区	調査遺構	報告遺構	備考
21		住居1	住居1	
21		住居2	住居2	
21		住居3	住居3	
21		住居4	住居4	
21		住居5	住居5	
21		住居6	住居6	
21		住居7	住居7	
21		住居8	住居8	
21		住居9	住居9	
22	Ⅱ	住居1	住居10	
22	Ⅱ	住居1(南)	住居11	
22	Ⅱ	住居2(古)	住居12	
22	Ⅱ・Ⅲ	住居2(新)	住居13	
22	Ⅱ・道	住居3	住居14	
23	Ⅱ・道	住居4	住居15	
22	Ⅱ	住居5	住居16	
		住居6		欠番
23	Ⅲ	住居7	住居17	
23	Ⅱ・Ⅲ	住居8	住居18	
23	Ⅳ-1	住居9	住居19	
23	Ⅳ-1	住居10	住居20	
23	Ⅳ-1	住居11	住居21	
23	Ⅳ-1	住居12	住居22	
23	Ⅳ-1	住居13	住居23	
23	Ⅳ-1・2	住居14	住居24	
23	Ⅳ-1・2	住居15	住居25	
23	Ⅳ-1	住居16	住居26	
23	Ⅳ-1・2	住居17	住居27	
23	Ⅳ-1	住居18	住居28	
23	Ⅳ-1・2	住居19	住居29	
23	Ⅳ-1・道	住居20	住居30	
23	道	住居21	住居31	
23	Ⅱ・道	住居22	住居32	
23	Ⅳ-2	住居23	住居33	
22	Ⅰ	不明	住居34	
21		土坑1	土坑1	
21		土坑2	土坑2	
21		土坑3	土坑3	
21		土坑4	土坑4	

調査年度	調査区	調査遺構	報告遺構	備考
21		土坑5	土坑5	
21		土坑6	土坑6	
21		土坑7	土坑7	
22	Ⅱ	土坑1	土坑8	
22	Ⅱ	土坑2	土坑9	
22		土坑3		欠番
23	Ⅳ-2	土坑1	土坑10	
23	Ⅳ-2	土坑2	土坑11	
23	Ⅳ-1	土坑3	土坑12	
21		SX-01	不明遺構1	
21		SX-02	不明遺構2	
21		SX-03	不明遺構3	
21		溝1	溝1	
21		溝2	溝2	
21		溝3	溝3	
21		溝4	溝4	
21		溝5	溝5	
21		溝6	溝6	
21		溝7	溝7	
21		溝8	溝8	
21		溝9	溝9	
21		溝10	溝10	
21		溝11	溝11	
21		溝12	溝12	
21		溝13	溝13	
21		溝14	溝14	
21		溝15	溝15	
21		溝16	溝16	
22	Ⅰ	溝1	溝17	
22	Ⅰ	溝2	溝18	
22	Ⅰ	溝3	溝19	
22	Ⅰ	溝4	溝20	
22	Ⅱ・Ⅲ	溝5		欠番
22	Ⅱ・Ⅲ	溝6	溝21	
22	Ⅱ・Ⅲ	溝7	溝22	
22	Ⅱ	溝8	溝23	
22	Ⅱ・道	溝9	溝24	
23	Ⅳ-1・2	1号大溝	溝25	
23	Ⅳ-1・2	2号溝	溝26	



第38図　3地区1・2号住居跡実測図（1／60、1／30）

東西規模に関しては削平のため小さくなっているものと考えられる。南側のP-1が屋内土坑と考えられることから、復元して400cmほどになり、長方形を呈する。屋内土坑は90cm×50cm、深さ30cmである。住居跡の中央やや北寄りと屋内土坑の北側で炉跡・焼土・炭が検出されている。主柱穴は1基が段落ちに削平されているものの、北側の焼土を囲む4つになるものと考えられる。

出土土器（第41図）

4は鉢である。径3.6cmの平底を呈し、直線的に口縁が伸びる。内外面とも磨滅するが、底部内面付近に工具痕が認められる。P-1出土。

時期は、出土土器と切り合いから弥生時代後期後半～終末頃と考えられる。

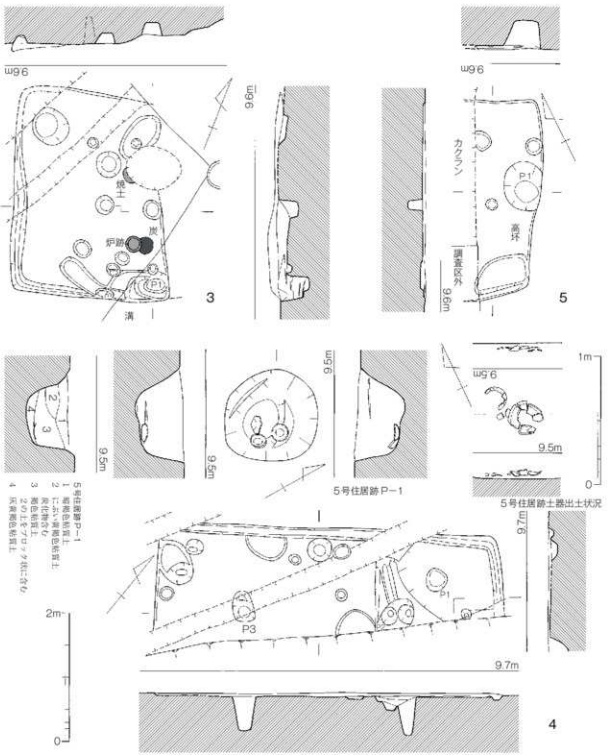
4号住居跡（図版31、第39図）

調査区の中央やや東側に位置し、現代の水路に切られる。規模は長軸550cm、短軸残存長170cm、深さ3cmである。水路の東側に住居跡の端が検出されていないことから南北幅は500cmを超えないものと推測される。東側のP-2、3が主柱穴で4本柱になるものと考えられる。

出土土器（第41図）

5は壺である。直口壺のようになるか。肩はあまり張らず、球形に近い。調整は磨滅のため不明である。P-1出土。6は高坏である。口縁部が強く外反し、坏部の接合部分で段が形成される。調整は磨滅のため不明である。7は甑の取手か。緩やかに内傾しながら伸び、細い。磨滅するがナデ成形と思われる。

時期は、出土土器と切り合いから6世紀前半頃に属するものと考えられる。

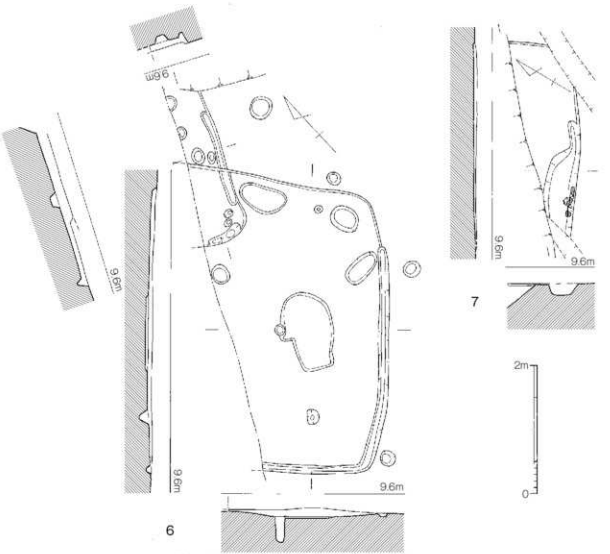


第 39 図　3 地区 3 ～ 5 号住居跡実測図（1 ／ 60、1 ／ 30）

5 号住居跡（図版 31・32、第 39 図）

調査区の中央に位置している。規模は長軸 315cm、短軸残存長 120cm、深さ 3cm である。短軸長は削平されており、本来は倍以上の長さがあったと考えられるが、詳細は不明である。東側端には径 70cm、深さ 35cm の屋内土坑と考えられる P-1 が検出された。また、南側の床面近くで高坏 2 脚が出土した。削平のため主柱穴は不明である。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（図版 68、第 41 図）



第 40 図　3 地区 6・7 号住居跡実測図（1／60）

8 ～ 10 は高坏である。8 は口縁が緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。坏部の接合部で明確に段を有する。P-1 出土。9 は口縁が内湾し、坏形を呈する。P-1 出土。10 は口縁が外反し、端部が強く外反する。坏部の接合部で明確に段を有する。床面出土。いずれも磨滅のため調整不明だが、9 の坏下部に指頭圧痕が認められる。11 は坏である。口縁はほぼ直立し、器壁は薄い。調整は磨滅のため不明である。P-1 出土。12 は甑の取手である。緩やかに内湾し、細い。磨滅のため不明瞭だが、ナデにより成形したと考えられる。P-1 出土。

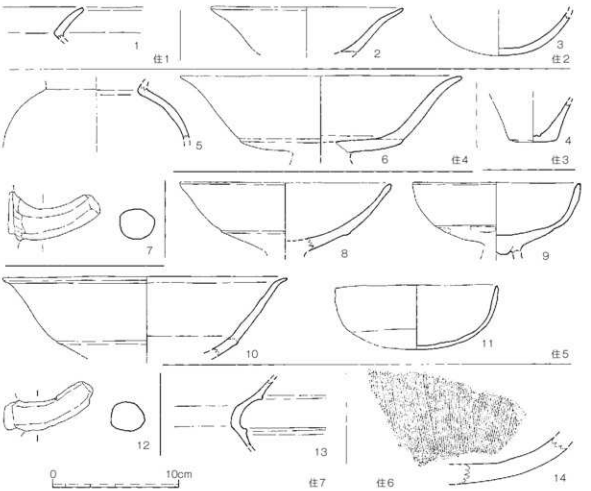
時期は、出土土器と切り合いから 6 世紀後半頃に属すると考えられる。

6 号住居跡（図版 32、第 40 図）

調査区の南側に位置し、調査区境にかかる。規模は長軸 445cm、短軸残存長 320cm、深さ 3cm である。住居跡の 1／3 ～ 1／2 が調査区外に延びるものと推測されるため、主柱穴等は不明である。北側に 6 号住居跡と現代の水路が切る形で壁溝のようなものが検出されており、これも別の住居跡である可能性がある。規模は残存で 250cm × 60cm、深さ 5cm である。

出土土器（第 41 図）

14 は壺の底部か。内面には単位の大きいハケ目、外面は磨滅のため不明瞭だが、ハケ目の痕跡



第41図　3地区1～7号住居跡出土土器実測図(1／3)

が見られる。

時期は、出土土器と切り合いから弥生時代終末頃に属すると考えられる。

7号住居跡（図版32、第40図）

調査区の東側に位置し、現代の水路ならびに近現代の畝に切られる。規模は長軸315cm、短軸残存長100cm、深さ2cmである。水路により半分以上が削平されているものと考えられるが、比較的小型の住居跡になるものであろう。主柱穴等は削平のため不明である。東端に焼土塊が出土している。

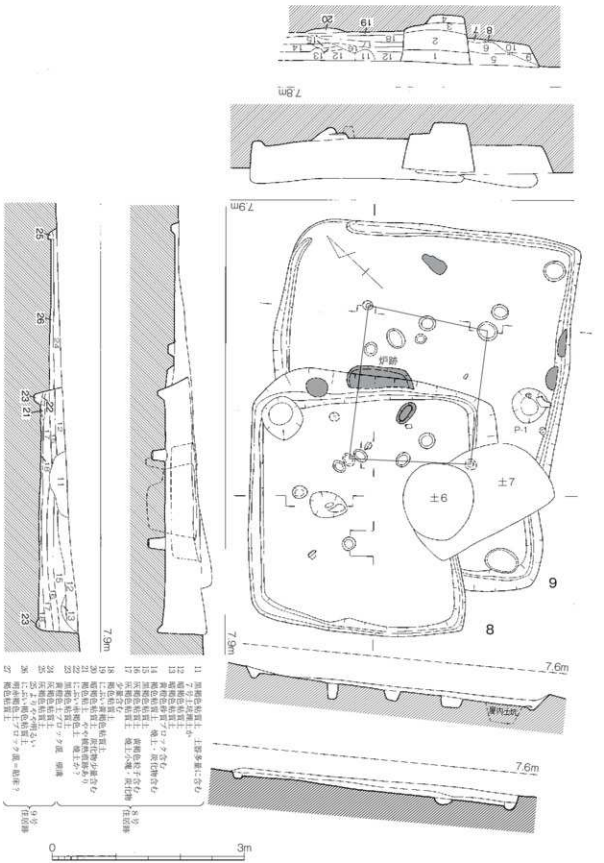
出土土器（第41図）

13は鼓形器台である。くびれ部のみが遺存しており、脚部の屈曲がやや弱い。調整は磨滅のため不明である。焼土塊付近出土。

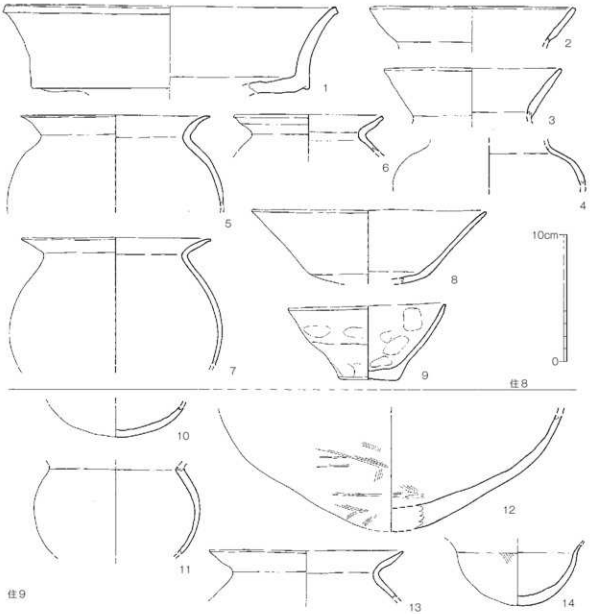
時期は、出土土器と切り合いから古墳時代初頭頃に属すると考えられる。

8号住居跡（図版23・33・34・36、第42図）

調査区の北側に位置し、9号住居跡を切り、6･7号土坑に切られる。規模は長軸400cm、短軸385cm、深さ70cmで、正方形を呈する。中央やや北よりに深さ25cmほどの柱穴が2基検出されており、2本柱になるか。埋土は暗褐色粘質土である。



第 42 図　3 地区 8・9 号住居跡実測図 (1 ／ 60)



第43図　3地区8・9号住居跡出土土器実測図(1／3)

出土土器（図版68、第43図）

1は二重口縁壺である。口縁は直角に曲がり、さらに先端にかけて外湾する。山陰系の壺か。調整は内外面ともに磨滅のため不明である。床面出土。2～4は小型壺の口縁か。2・3は口縁のみ、4は肩部のみが遺存している。2は口縁がわずかに内湾し、3はわずかに外湾する。いずれも磨滅のため調整不明である。5～7は甕である。5は口縁が強く外湾し、6・7は直線的に伸びる。調整はいずれも磨滅のため不明である。8は高坏である。口縁は直線的に外反する。調整は磨滅のため不明である。9は鉢である。平底を呈し、口縁はやや内湾する。外面上半は指頭圧痕、下半は工具による調整後ナデ消し、内面は指頭圧痕を施す。外面には黒斑が見られる。床面出土。

時期は、出土土器と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭頃と考えられる。

9号住居跡（図版23・33・35・36、第42図）

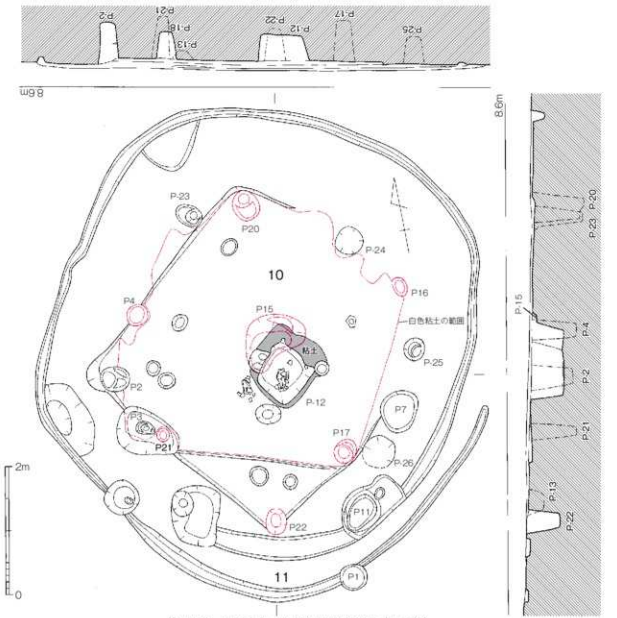
調査区の北側に位置し、8号住居跡、7号土坑に切られる。規模は長軸560cm、短軸465cm、深さ55cmで、長方形を呈する。住居跡の南東・北東・北西端付近で焼土が検出され、中央やや西よ

りに炉跡が検出された。炉跡を囲むように深さ 25 ～ 30cm の柱穴が検出されており、4 本柱になるものと考えられる。また、南東側には径 50cm ほどの P-1 が検出されており、屋内土坑と考えられる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器（第 43 図）

10・11 は小型壺である。底部および胴部片のみが遺存している。ともに磨滅のため調整不明である。10 は床面出土。12 は壺である。底部のみが遺存し、わずかに平底が残る。内外面ともにハケ目を施し、黒斑が見られる。P-1 出土。13 は甕である。口縁はやや肥厚するが直線的に外反する。調整は磨滅のため不明である。14 は鉢である。丸底を呈し、口縁が外反する。内外面ともに磨滅のため不明瞭だが、外面にはわずかにハケ目の痕跡が見られる。P-1 出土。

時期は、出土土器と切り合いから弥生時代終末頃と 8 号住居跡とほぼ変わらない時期に属すると考えられる。



第 44 図　3 地区 10・11 号住居跡実測図（1 ／ 60）

10・11号住居跡（図版36・37、第44図）

調査区の北西側に位置し、南側に40cmほどずれる11号住居跡が10号住居跡を切る。規模は径670～690cmの円形住居跡である。深さはほとんどなく壁溝のみが残る。11号住居跡の北側は壁溝も削平されており正確な規模は不明である。10号住居跡中央部に410cm四方で数cm白色粘土を貼った範囲があり、他の方形住居跡である可能性もあるが、これに伴う柱穴が全く見られないことから10号住居跡の床面に貼ってあったものと考えたい。また、粘土の中央部には70cm×75cm、深さ40cmの炉跡が検出されており、10号住居跡に伴うものと考えられる。また、炉跡周辺には砂混じりの白色粘土が検出された。主柱穴はそれぞれ円形に廻り、10号・11号住居跡ともに6本柱と考えられる。

出土土器（図版68、第45・47図）

第45図1は二重口縁壷である。強く屈曲し、口縁部は強く外湾する。口縁部外面はナデ、内面上部はミガキ、他は磨滅のため不明である。やや屈曲の弱い鼓形器台の可能性もある。P-15出土。2は小型丸底壷である。口縁はほぼ直立する。胴部内面に指ナデを施し、他は磨滅のため不明である。P-1出土。3は瀬戸内系の甕である。口縁は屈曲した後、わずかに外湾する。胴部外面はハケ目、他はナデを施す。外面に黒斑が見られる。方形粘土内出土。4～13は甕である。4は口縁が強く外湾し、胴部外面ハケ目、胴部内面ケズリを施す。P-15出土。5～13は口縁が直線的に伸びる。5は口唇部がやや肥厚し、胴部外面にハケの痕跡、胴部内面にケズリを施す。P-15出土。6・7・11は口縁端を丸く仕上げ、8～10・12・13は口縁端部を四角く仕上げる。13の胴部外面にハケ目が見られるのを除き、調整は磨滅のため不明である。6・7は方形粘土内出土。8～10・12・13はP-15出土。14～16は高坏である。14は口縁が外湾し、内面にミガキを施す。P-15出土。15は坏部の下半で直線的に開くか。磨滅のため調整不明である。16は脚部のみが遺存しており、下部から1／4ほどのところで段を形成し緩やかに開く。やや新しい時期に属する。磨滅のため調整不明である。P-1出土。17は鉢である。口縁がわずかに外湾する。磨滅のため調整不明である。P-15出土。18は脚付鉢である。脚部のみ遺存し、磨滅のため調整は不明である。P-20出土。第47図1・2は埦である。1は外面ハケ、内面ケズリを施し、壺の可能性もある。2は磨滅のため調整不明である。ともにP-15出土。3は鉢である。丸底を呈し、内面にわずかにハケの痕跡が残る。

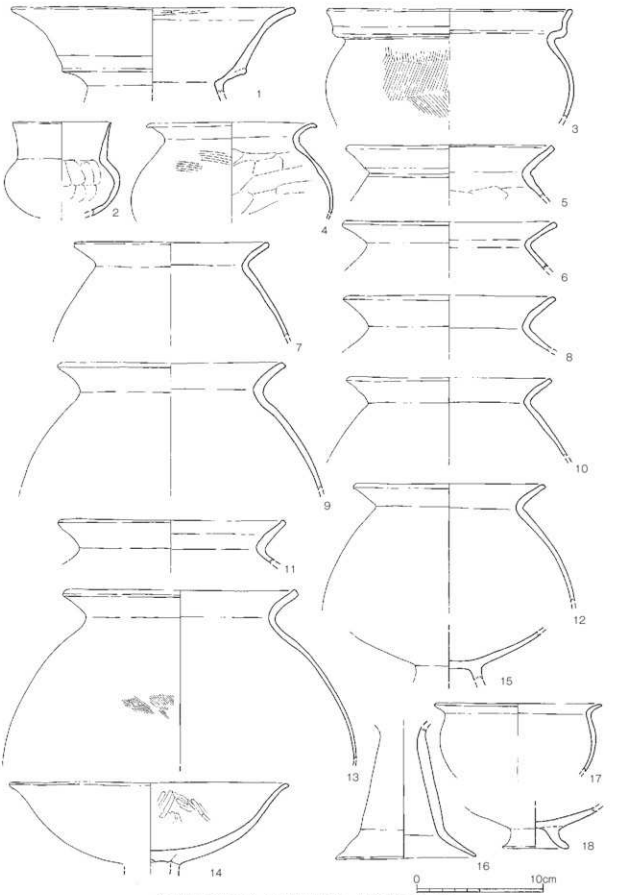
時期は、出土土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に属すると考えられる。10号と11号で明確な時期差は認められず、あまり時期をあけずに建て替えたものと考えられる。

12号住居跡（図版37～39、第46図）

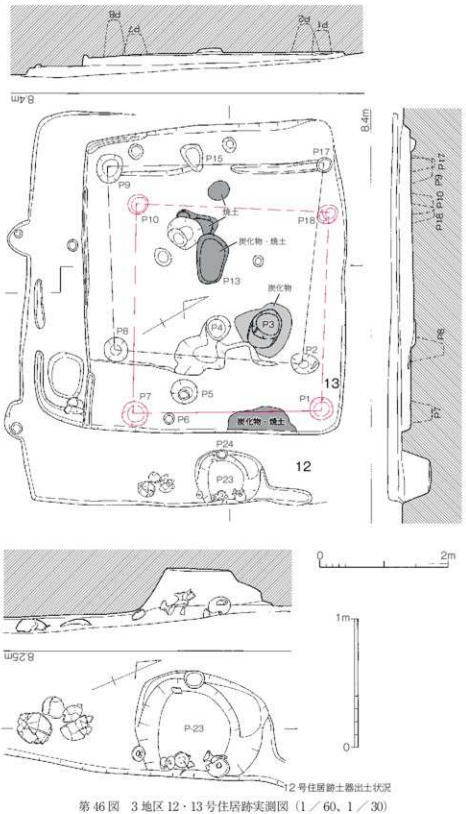
調査区の北西側に位置し、7号溝、13号住居跡に切られる。規模は長軸650cm、短軸残存長450cm、深さ15cmである。北側は斜面下側にあたるため削平される。東側に105cm×80cm、深さ40cmの屋内土坑P-23が検出され、その上層および南側床面から完形に近い土器が出土している。主柱穴はP-1・7・10・18の4本柱になるものと考えられる。

13号住居跡（図版37・38、第46図）

調査区の北西側に位置し、12号住居跡を切る。規模は長軸480cm、短軸485cm、深さ10cmで、正方形を呈する。中央に75cm×50cm、深さ2cmの炉跡と考えられるP-13が検出されている。この他に炉跡の西側2箇所、東側の壁際に焼土が検出された。東・西・南側それぞれに明確では



第 45 図　3 地区 10・11 号住居跡出土土器実測図 (1 ／ 3)



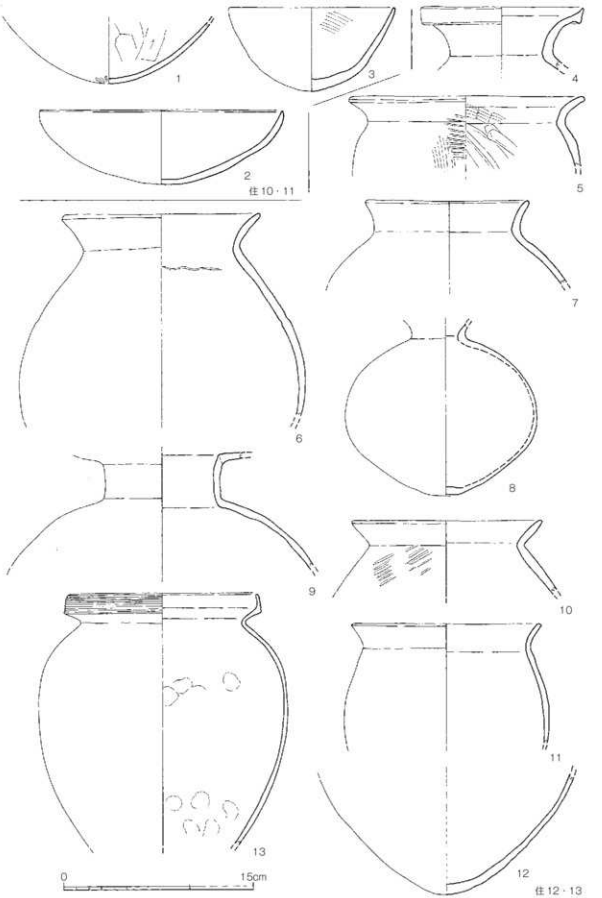
第46図　3地区12・13号住居跡実測図（1／60、1／30）

ないながらも50～100cmのベッド状遺構が地山を掘り残すことにより作り出される。ベッドの下場付近で検出されたP-2・8・9・17が主柱穴の4本柱になるものと考えられる。

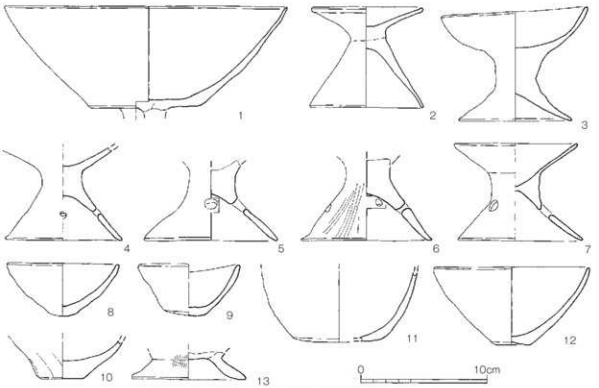
出土土器（図版68・69、第47・48図）

調査段階で土器を同じ番号で上げていたためここで一括して報告する。図化した土器のほとんどは12号住居跡に属するものと考えられ、明確に番号がわかるものはその旨を記載する。

第47図4～9は壺である。4は瀬戸内系の壺か。口唇部を肥厚させ、口縁部を帯状にする。調整は磨滅のため不明である。住居12床面出土。5は口縁部が強く外湾し、胴部はさほど膨らまない。口縁部内面はハケ、胴部外面はハケ後タタキ、胴部内面は強いナデを施す。屋内土坑を切るP-24から出土しやや新しい。6・7は口縁の屈曲がやや緩やかで胴部もなだらかになる。磨滅のため調整は不明瞭だが、6の胴部外面にハケ状の痕跡が見られる。ともに住居12床面出土。8は小型の壺である。わずかに平底を呈し、口縁部が極端に窄まる。磨滅のため不明瞭だが、外面にナデを施すか。外面下半には黒斑が見られる。住居12床面出土。9は二重口縁壺である。頸部までが遺存する。頸部が「コ」字状に屈曲する。調整は磨滅のため不明である。床面出土。10～13は甕である。10は口縁が直線的に伸び、端部を丸く仕上げる。胴部外面タタキ、ほかは磨滅のため



第47図　3地区10～13号住居跡出土土器実測図(1／3)



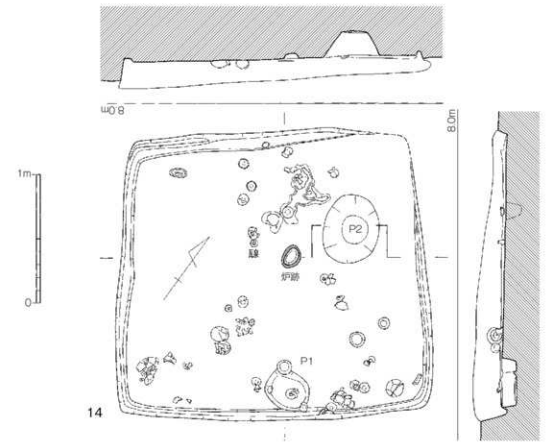
第 48 図　3 地区 12・13 号住居跡出土土器実測図 (1 ／ 3)

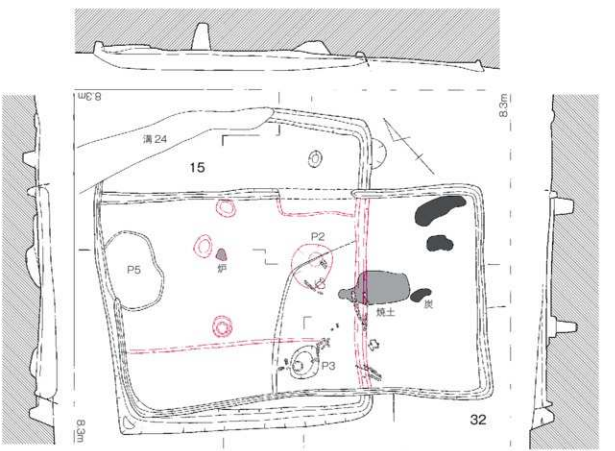
不明である。床面出土。11 は口縁の屈曲が弱く、端部を四角く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。床面出土。12 は尖底気味の底部を呈する。調整は磨滅のため不明である。住居 12 床面出土。13 は吉備系の甕である。口縁部が内傾し、凹線が 6 条施される。磨滅のため不明瞭だが、内面の一部に指頭圧痕が見られる。住居 12 床面出土。第 48 図 1 は高坏である。口縁はわずかに内湾し、底部は平らになる。調整は磨滅のため不明である。住居 12 床面出土。2 ～ 7 は器台である。2 は口縁および脚部が直線的に伸び、口唇部をわずかにはねあげる。全体にヨコナデを施す。住居 12 床面出土。3 は上部が坏形を呈し、脚部は低く直線的に伸びる。磨滅のため不明瞭だが、一部ナデが見られる。住居 12 床面出土。4 は口縁ならびに脚部が直線的に伸び、脚部には孔が 4 つ穿たれる。脚部内外面はナデ、他は磨滅のため不明である。住居 12 床面出土。5 は脚部がわずかに内湾し、孔が 3 つ穿たれる。脚部内外面はナデ、他は磨滅のため不明である。床面出土。6 は脚部が内湾し、端部がやや突出する。孔が 4 つ穿たれる。脚部外面ミガキ、他はナデを施す。脚部下半に黒斑が見られる。床面出土。7 は口縁ならびに脚部が直線的に開き、孔が 3 つ穿たれる。調整は磨滅のため不明である。住居 12 床面出土。8 ～ 12 は鉢である。いずれも床面出土。8・9 はてづくねで成形し、8 が尖底、9 が平底を呈する。10 は平底を呈し、底部付近に工具痕および黒斑が見られる。11 はやや径が大きい平底を呈する。小型壺の可能性もある。胴部下半に黒斑が見られる。12 は平底を呈し、口縁がやや内湾しながら開く。胴部下半に黒斑が見られる。13 は脚付鉢である。外面ハケ、内面ナデを施す。

時期は、12 号住居跡は出土土器と切り合いから古墳時代初頭と考えられる。13 号住居跡は図化したものの中には、明確に属するとわかるものがないが、土器片を見ると、やや 12 号住居跡より新しいものの古墳時代初頭頃で収まるものと考えられる。

14 号住居跡（図版 39・40、第 49 図）

調査区の北側に位置する。規模は長軸 495cm、短軸 455cm、深さ 40cm で、正方形を呈する。





第49図　3地区14・15・32号住居跡実測図（1／60）

住居跡中央で径 20cm 前後、深さ 5cm のピットが検出され、周囲が被熱していることから炉跡と考えられる。東側壁際では 70cm × 50cm、深さ 20cm の屋内土坑と考えられる P-1 が検出され、西側には粘土塊が径 1m ほどの範囲で検出された。粘土塊上には高坏が逆向きに出土しており、粘土はカマドが破壊された土で、高坏が支脚として使用されていたと考えられる。住居跡床面から多くの土器が出土しており、中央やや北西寄りから須恵器の甕が出土した。床面から検出された柱穴は少なく、主柱穴は不明である。

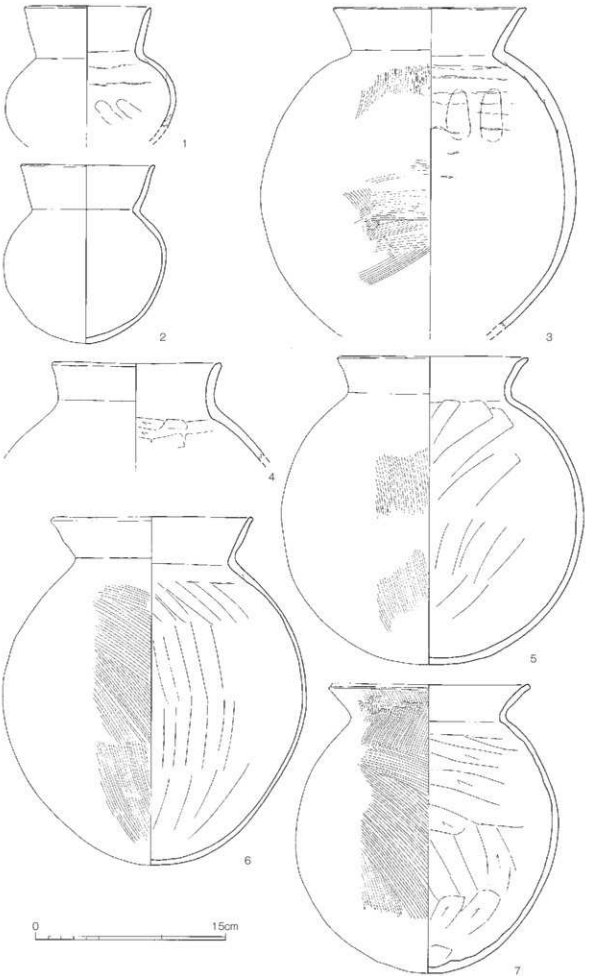
出土土器（図版 69 ～ 71、第 50 ～ 52 図）

1・2 は小型壺である。1 は口縁が直線的に伸び、胴部がやや丸みを帯びる。調整は磨滅のため不明瞭だが、胴部内面にナデが見られる。床面出土。2 は口縁がやや内湾し、胴部は丸くなる。磨滅のため調整は不明である。床面出土。3・4 は壺である。3 は直線的に口縁が伸び、外面にハケを施し、内面は工具痕が見られる。外面下半にススおよび黒斑が見られる。4 は口縁がわずかに外湾し、内面にケズリが見られる。ともに床面出土。5 ～ 7 は甕である。5・7 は口縁が外湾し、6 は直線的に開く。外面はハケ、内面はケズリを施す。5・6 は胴部に黒斑が見られる。床面出土。8 ～ 27 は高坏である。口縁部は 9・12・16・26 が直線的に開き、その他は外湾する。また、13・17・18 は坏部に段を持たず、緩やかに開く。脚部については、25・27 が裾に向かってなだらかに開き、端部付近で強く屈曲するのに対し、その他は下位で明確に屈曲し、内面に稜が形成される。12 は脚部が直立気味に伸びる。26 は脚部下位に孔が 3 つ穿たれ、古い様相を示す。9・11・16・20 は P-1 出土、21 は P-2 出土、他は床面出土。第 52 図 1 ～ 4 は埦である。4 の内面にハケ目が見られるほかは、全て磨滅のため調整は不明である。2・4 は外面に黒斑が見られる。5 ～ 9 は鉢である。口縁部は 5・6 がわずかに内湾し、7 ～ 9 は外湾する。7・8 は外面にハケ目が見られるが、他は磨滅のため不明である。9 は内外面ともハケ目を施し、一部指頭圧痕が見られる。全て床面出土。10 は支脚である。内面にシボリ痕が見られる。床面出土。11 はてづくねの壺か。径 4.9cm、高さ 1.7cm の高台が付き、底部内面は凹む。内外面ともナデを施す。12 は須恵器の甕である。口縁は直線的に開き、中位にわずかな突帯を持つ。径 0.8cm の孔を中央やや上よりに穿つ。底部外面はケズリ、内面はナデ、胴部外面～口縁部は回転ナデを施し、孔の上下に沈線および波状文を 3 段施す。床面出土。このほか後述する鉄鏃が出土している。

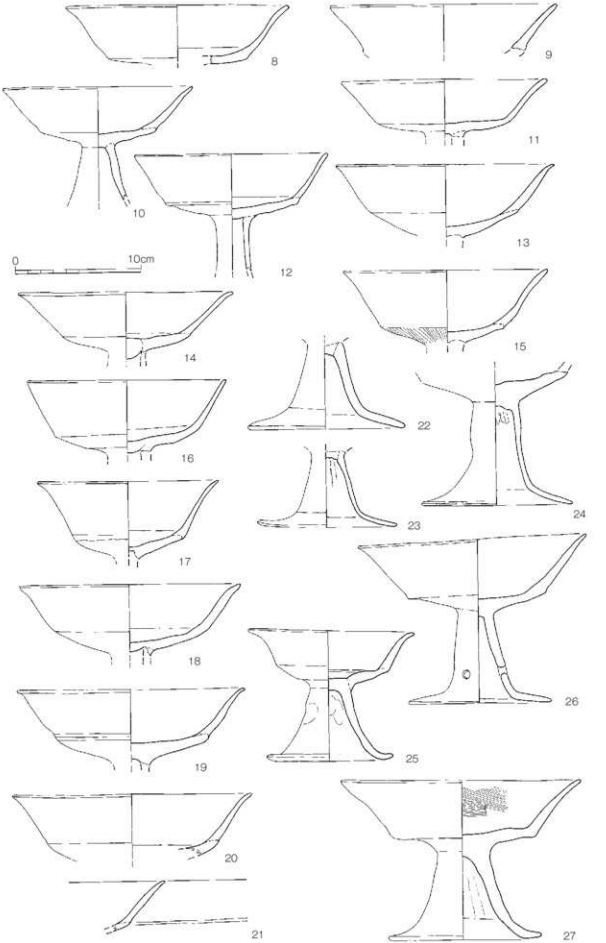
時期は、いくつか古い様相を持つ土器が含まれるものの、出土土器と切り合いから 5 世紀中頃に属すると考えられる。

15 号住居跡（図版 41・42、第 49 図）

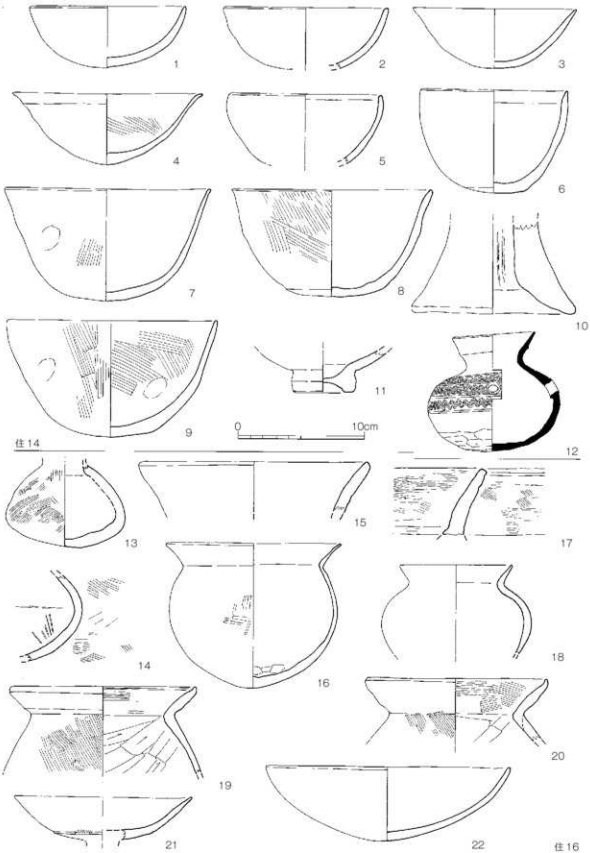
調査区の北側に位置し、32 号住居跡、24 号溝に切られる。規模は長軸 495cm、短軸 425cm、深さ 25cm で、長方形を呈する。住居跡の北側 120cm、南側 80cm でベッドが検出された。北側は 32 号住居跡に切られ明確ではないが、L 字状になるものと考えられる。東側壁際の中央に径 70cm、深さ 20cm の屋内土坑と考えられる P-2 が検出され、すぐ脇から須恵器の甕が出土している。住居跡中央やや北西よりでは径 30cm、深さ 50cm の炉跡と考えられるピットが検出され、南側からは焼土も検出された。炉跡の両側に径 30cm、深さ 30cm、40cm の柱穴が 2 基確認され、2 本柱になるものと考えられる。



第50図　3地区14号住居跡出土土器実測図①(1／3)



第51図　3地区14号住居跡出土土器実測図②(1／3)



第52図　3地区14・16号住居跡出土土器実測図(1／3)

出土土器（図版71、第55図）

2～4は埦である。2は口が大きく開き、皿状をなす。調整は磨滅のため不明である。壁溝出土。3は口縁が内湾気味に開く。調整は磨滅のため不明で、底部外面に黒斑が見られる。壁溝出土。4は口縁が内湾し、口唇部をやや厚く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。床面出土。5は支脚

である。外面にタタキ、内面に指頭圧痕を施す。床面出土だが、古墳時代初頭の混入品か。6は須恵器の甕である。口縁は緩やかに開き、端部を丸く仕上げる。口縁下に沈線を施し、胴部中央に径1.1cmの孔を穿つ。胴部外面上半、口縁部内外面、底部内面に灰かぶりが見られ調整は不明瞭だが、全体に回転ナデを施すと考えられる。形態的には模倣土師器に類似しており、模倣品の模倣品の可能性もある。

時期は、出土土器と切り合いから5世紀中頃に属すると考えられる。

32号住居跡（図版42、第49図）

調査区の北側に位置し、15·16号住居跡を切る。規模は長軸600cm、短軸335cm、深さ20cmで、長方形を呈する。南側の壁際中央で径50cm、深さ10cmの屋内土坑と考えられるP-3が検出された。中央から東側に寄った位置では焼土が径80cmほどの範囲で確認され、炉跡の可能性がある。この他にも西側、南側で炭化物が多く検出された。床面では柱穴がほとんど確認されておらず、主柱穴は不明である。

出土土器（図版71、第55図）

1は鉢である。丸底を呈し口唇部を突き出させる。磨滅のため不明瞭だが、一部ハケ目が残る。

時期は、出土土器と切り合いから5世紀中頃～後半に属すると考えられる。

16号住居跡（図版41・42、第53図）

調査区の北側に位置し、32号住居跡に切られる。規模は長軸540cm、短軸430cm、深さ20cmで、長方形を呈する。南壁側で径80～90cm、深さ35cmの屋内土坑と考えられるピットが検出された。この屋内土坑が位置する場所を除き、住居跡内には幅90～120cmのベッドが地山を掘り残すことで作られる。中央には径55cm、深さ20cmの炉跡が検出されている。炉跡の両側には径30cm、深さ40cmの柱穴が2基確認され、2本柱になるものと考えられる。

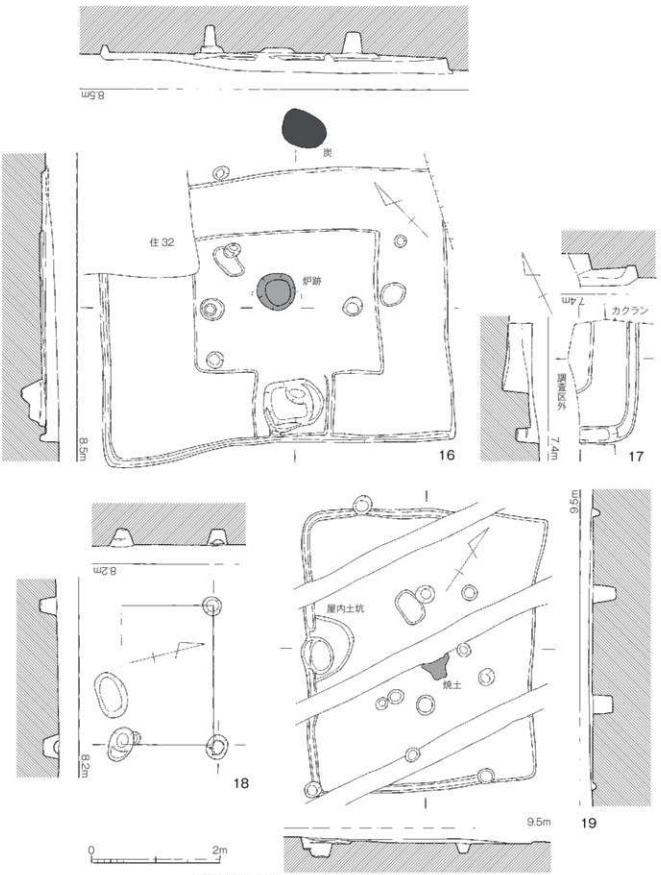
出土土器（図版71、第52図）

13～18は壺である。13·14·18は小型壺である。13は下膨れし、口縁下部は直立するものと考えられる。内外面ともハケを施し、底部外面に黒斑が見られる。14は胴部破片のみが遺存し、外面ハケ、内面上部ナデを施し、内面下部には工具痕が見られる。18は口縁が直線的に開き、胴部がやや張る。調整は磨滅のため不明である。15は直口壺の口縁で、内外面にナデを施す。外面には黒斑が見られる。16は口縁が外湾し、底部はやや尖る。磨滅のため不明瞭だが、外面に一部ミガキ、内面下部に指頭圧痕が見られる。17は二重口縁壺の口縁部である。内外面にハケを施し、黒斑が見られる。19·20は小型の甕である。口縁部は直線的に伸び、口唇部をはねあげる。ともに胴部外面はハケ、胴部内面はケズリ、口縁部外面はナデ、口縁部内面はハケを施す。21は高坏か。口縁は直線的に開き、器高が浅い。段の部分にハケが認められるほかはナデを施す。22は埦である。口縁は緩やかに開く。調整は磨滅のために不明である。床面出土。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代前期に属すると考えられる。

17号住居跡（第53図）

調査区の北西端に位置し、ほとんどが用地外に伸びる。残存規模は長軸190cm、短軸110cm、



第53図　3地区16～19号住居跡実測図（1／60）

深さ 35cm である。壁面から 55cm で、深さ 20cm ほど掘り込まれており、ベッドになるものと考えられる。出土遺物はなく、時期等は不明である。わずかにベッドが見られることから、弥生時代終末～古墳時代初頭になるか。

18 号住居跡（図版 42、第 53 図）

調査区の北西側に位置する。付近は撹乱や近現代の畝のため大きく削平され主柱穴のみが残る。柱穴間の距離は、東西 220cm、南北 150cm で、柱穴の深さは 25 ～ 30cm である。

出土土器（図版 72、第 55 図）

7 は埦である。口縁部がほぼ直立する。調整は磨滅のため不明である。

時期は、出土土器から古墳時代後期に属すると考えられる。

19 号住居跡（図版 42、第 53 図）

調査区の中央に位置し、近現代の畝に切られる。規模は長軸 440cm、短軸 360cm、深さ 5cm である。東壁際に 80cm × 100cm、深さ 25cm の屋内土坑と考えられるピットが検出されている。中央部には畝に切られているものの焼土が検出されており、炉跡であると考えられる。炉跡の両側に径 30cm、深さ 30cm、35cm の柱穴が 2 基確認され、2 本柱になるものと考えられる。図化に耐えうる資料はないが、二重口縁壺と考えられる破片を含む土師器片が出土している。

時期は、出土土器片から古墳時代初頭～前期頃と考えられる。

20 号住居跡（図版 43、44、第 54 図）

調査区の中央やや西よりに位置し、26 号溝、撹乱に切られる。規模は残存長軸 420cm、短軸 360cm で、削平のために壁溝ならびにピットのみが残る。復元長軸は 470cm ほどになると推測され、長方形を呈する。西壁際に撹乱に切られるもののカマドが検出され、東壁際には 70cm × 50cm、深さ 40cm の屋内土坑と考えられるピットが検出された。屋内土坑底部からは土師器の高坏、鉢が出土した。住居跡中央に径 35cm、深さ 60 ～ 75cm の柱穴が 4 基確認され、4 本柱になるものと考えられる。

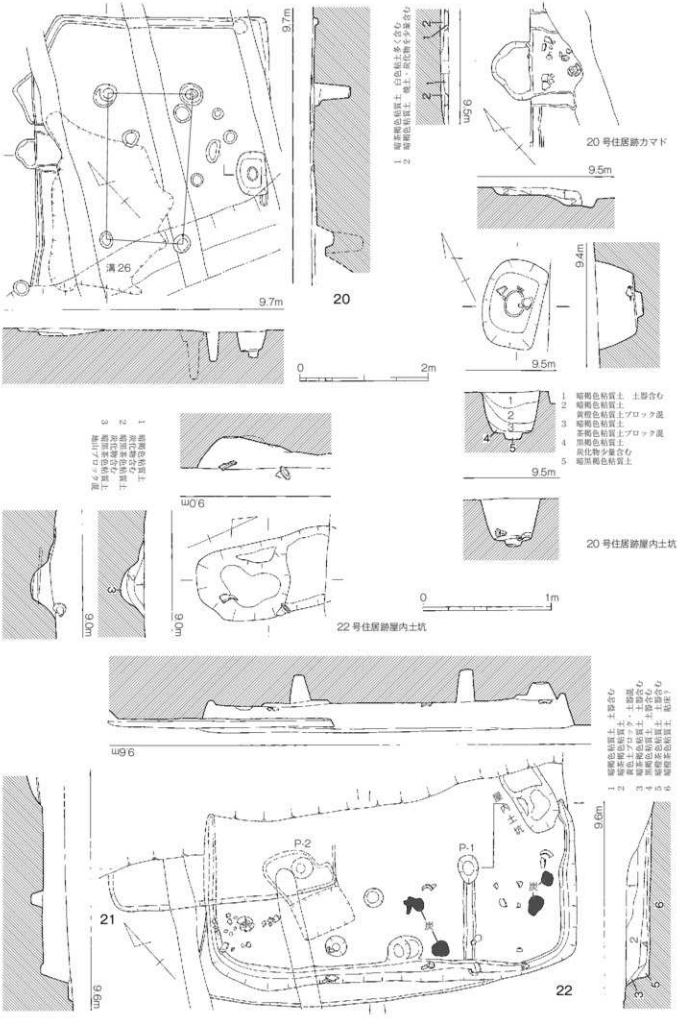
カマド（図版 43、第 54 図）

住居跡の西壁際中央に位置する。撹乱に切られているが残存している規模で、右袖が壁面より 20cm、左袖が 35cm 突出し、両袖間は 45cm を測る。袖の中央、壁面から 25cm の位置で高坏が据えられており、支脚として使用したものと考えられる。また、袖間には煤の付着した甕の破片が散乱しており、カマドの上部に据えていたものと考えられる。カマドの西側には住居跡から突出するように、30cm × 45cm、深さ 5cm の窪みが掘り込まれており、煙道になるものであろう。袖は白色粘土を含む暗茶褐色粘質土で構築される。

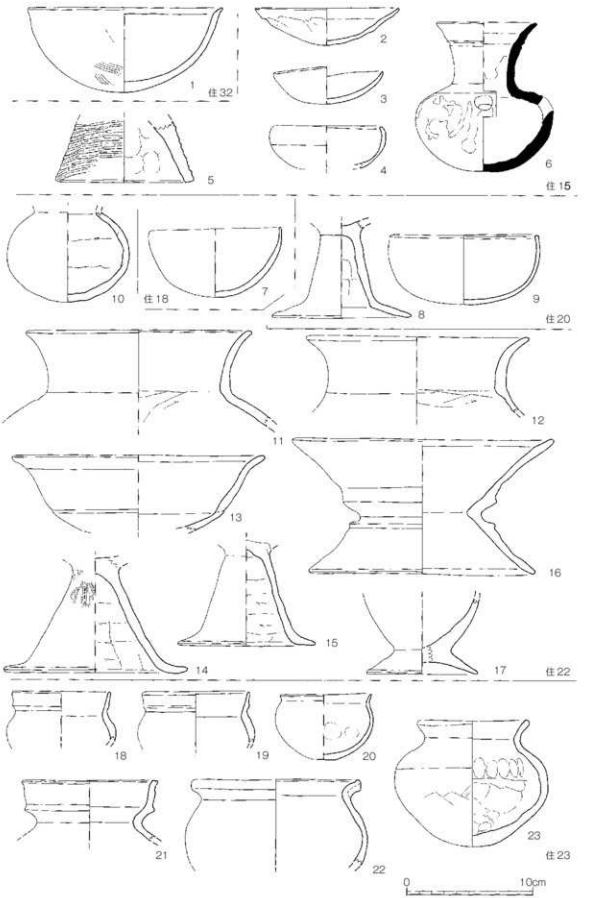
出土土器（第 55 図）

8 は高坏である。脚部下位で、角度を違えて開き、内部に段を形成する。外面は磨滅、内面はシボリを施す。カマド出土。9 は埦である。口縁部は内湾し、口唇部を玉状に肥厚させる。磨滅のため不明瞭だが、内外面ともにナデを施すか。

時期は、出土土器と切り合いから 5 世紀後半～ 6 世紀前半頃に属すると考えられる。



第54図　3地区20～22号住居跡実測図（1／60、1／30）



第55図　3地区15・18・20・22・23・32号住居跡出土土器実測図(1／3)

21 号住居跡（図版 44、第 54 図）

調査区の中央やや西よりに位置し、22 号住居跡を切り、段落ちに切られる。住居跡の大部分を段落ちに切られており、東西 350cm、残存南北長 75cm、深さ 8cm である。主柱穴その他は検出されなかった。出土遺物はなく、時期等は不明であるが、切り合い関係から古墳時代中期～後期頃に属すると考えられる。

22 号住居跡（図版 45・46、第 54 図）

調査区の中央やや西よりに位置しており、21 号住居跡、段落ちに切られる。21 号住居跡と同様、住居跡の半分を削平されるが、残存規模は東西 580cm、南北 290cm、深さ 45cm である。復元南北長は 540cm ほどになると考えられ、正方形を呈するものと推定される。東壁際には 65cm × 100 + α cm、深さ 25cm の屋内土坑と考えられるピットが検出された。住居跡中央やや南よりで径 40cm、深さ 40 ～ 50cm の P-1、2 が検出され、4 本柱になるものと考えられる。床面からは炭化物、土器が多く出土している。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（図版 72、第 55 図）

10 は小型壺である。わずかに平底を呈し、口縁部は外反する。調整は磨滅のため不明である。床面出土。11・12 は壺である。ともに口縁部は外湾する。胴部内面にケズリを施し、他は磨滅のため調整不明である。床面出土。13 ～ 15 は高坏である。13 は口縁端部が外湾し、端部を丸く仕上げる。接合面に段がわずかに形成される。床面出土。14・15 は脚部が直線的に開き、下端で強く屈曲する。外面にハケ、内面はケズリを施す。14 は床面出土。15 は屋内土坑出土。16 は山陰系の鼓形器台である。くびれ部は強く屈曲し、両面に突帯状の段が形成される。口縁ならびに脚部は広く外反する。床面出土。17 は脚付鉢か。脚部は直線的に伸び、胴部はやや内湾気味に伸びる。脚部内外面はナデ、他は磨滅のため調整不明である。脚部に黒斑が見られる。このほか後述する砥石、石斧、土製勾玉、鉄鏃が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代前期に属すると考えられる。

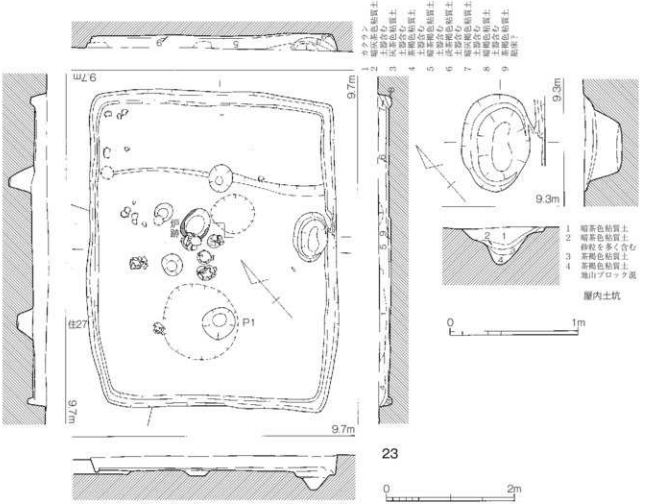
23 号住居跡（図版 46 ～ 48、第 56 図）

調査区の西側に位置しており、27 号住居跡を切る。規模は長軸 490cm、短軸 390cm、深さ 20cm で、長方形を呈する。北東側にのみ住居壁から 105cm で 3cm の段がつきベッドになるものと考えられる。東壁際には 55cm × 75cm、深さ 30cm の屋内土坑と考えられるピットが検出された。また、中央やや北寄りでは径 50cm、深さ 8cm の炉跡が確認されている。炉跡の両側には径 50cm、深さ 40cm の柱穴が 2 基確認され、2 本柱になるものと考えられる。埋土は暗茶褐色粘質土である。

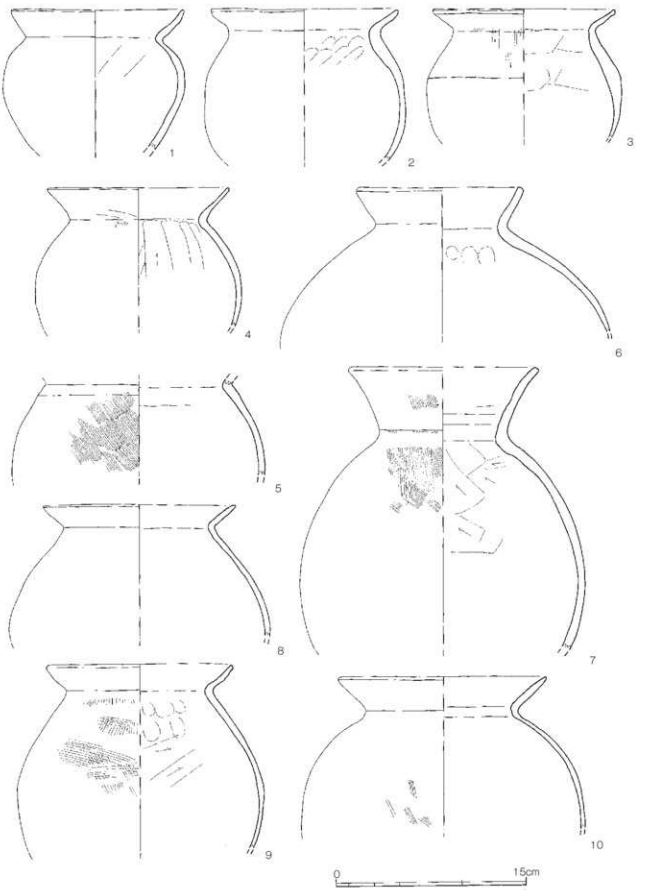
出土土器（図版 72、第 55・57・58 図）

第 55 図 18 ～ 23 は小型壺である。18・19・21 は山陰系、22 は瀬戸内系の壺か。18・19 は口縁がほぼ直立し肥厚する。ともに調整は磨滅のため不明である。20 は口縁が直線的に外反し、わずかに平底を呈する。磨滅のため不明瞭だが、胴部内面に指頭圧痕が見られる。21 は口縁部がほぼ直立し、緩い「W」字状を呈する。磨滅のため不明瞭だが、口縁部および頸部外面にはヨコナデを施す。22 は口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、口唇部はわずかにはねあげる。調整は磨滅のため不明である。23 は口縁が直線的に外反し、口唇部をわずかに肥厚させる。胴部外面はケズリ後

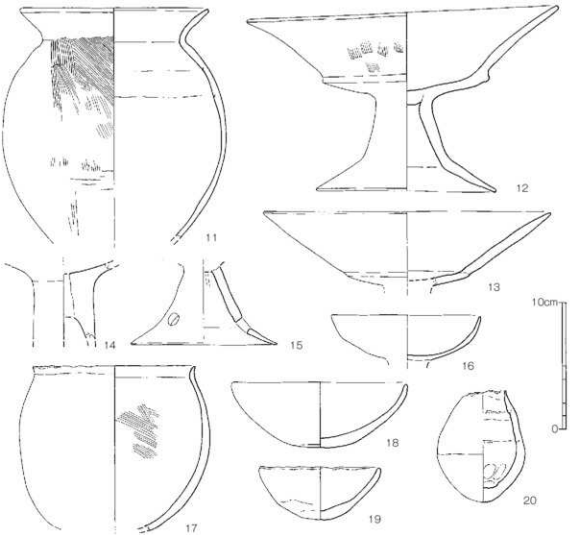
ナデ、胴部内面は指ナデを施す。第56図1～7は壷である。1は口縁部が内湾し、胴部の張りがやや小さい。磨滅のため不明瞭だが、胴部内面にケズリの痕跡が見られる。床面出土。2は口縁が直線的に伸びるが、口唇部をわずかにはねあげ、ごくわずかに内湾したように見える。磨滅のため不明瞭だが、胴部内面にケズリの痕跡が見られる。P-1出土。3は口縁が直線的に伸び、胴部上～中位の器壁が厚くなる。胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。4は口縁部がわずかに内湾し、端部を四角く作り上げる。胴部内面にハケ、胴部内面にケズリ後強い縦ナデを施す。5は胴部があまり張らず、歪みが大きい。外面にハケを施すが、他は磨滅のため不明である。6は口縁がわずかに内湾し、7は外湾する。6は磨滅のため調整不明、7は外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。6は床面出土。8～11は甕である。8・10・11は口縁が直線的に伸び、9は内湾する。磨滅が多いが、残っているものは胴部外面にハケ、胴部内面にケズリを施す。10はP-1出土。12～14は高坏である。12は口縁がわずかに外湾し、屈曲部で段を形成する。調整は磨滅のため不明瞭だが、坏部外面にハケ目が残る。13は口縁が直線的に開き、器高が小さい。調整は磨滅のため不明である。14・15は脚部のみが遺存する。15は脚がなだらかに開き、下位で3つの孔を穿つ。内面にシボリ痕が見られる。16は器台ないしは脚付鉢か。口縁は内湾し、塊形を呈する。調整は磨滅のため不明である。17は鉢か。磨滅のため不明瞭だが、口縁部が剥落した壷の可能性もある。内面にハケ目が見られる。



第56図　3地区23号住居跡実測図（1／60、1／30）



第57図　3地区23号住居跡出土土器実測図①(1／3)



第 58 図　3 地区 23 号住居跡出土土器実測図②(1 ／ 3)

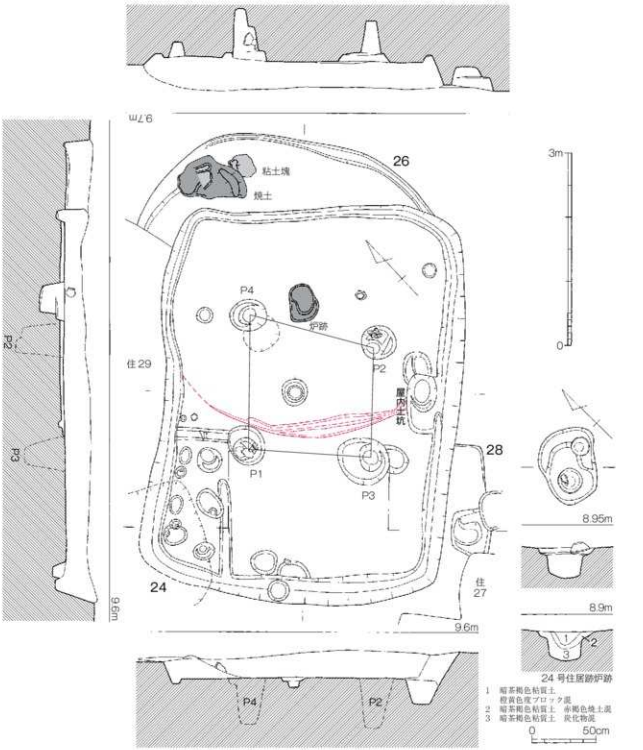
床面出土。18・19 は塊である。18 は口縁が内湾し、端部をわずかに尖らせる。ともに磨滅のため調整は不明である。19 は P-1 出土。20 は無頸壺である。口縁が窄まり蜻蛉形をなす。磨滅のため調整は不明瞭だが、内面下部に指頭圧痕、内面上部に粘土紐接合痕が見られる。外面に黒斑が見られる。床面出土。このほか後述する鉄鏃、鉄庖丁が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから、古墳時代初頭の遺物が一部混じるものの、概ね古墳時代前期頃に属すると考えられる。

24 号住居跡（図版 48 ～ 50、第 59 図）

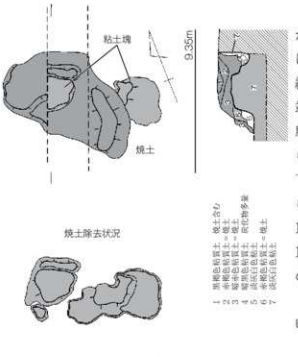
調査区の西側に位置し、26・27・28・29 号住居跡を切る。規模は長軸 610cm、短軸 460cm、深さ 40cm で、長方形を呈する。東壁際には 60cm × 90cm、深さ 35cm の屋内土坑と考えられるピットが検出された。住居跡の北東側では 45cm × 65cm、深さ 23cm の炉跡が確認され、中位から高坏が出土している。中央部に径 50 ～ 75cm、深さ 50 ～ 75cm の柱穴 P-1 ～ 4 が 4 基確認され、4 本柱になるものと考えられる。このうち P-1、2 は検出段階で柱痕が不鮮明であり、抜き取り痕跡と考えられる。また、これらの柱穴からは土師器高坏が出土しており、柱抜き取り後に祭祀をしたものと考えられる。

出土土器（図版 72・73、第 61 図）



第 59 図　3 地区 24・26・28 号住居跡実測図（1／60、1／30）

1 ～ 3 は壺である。1 は口縁部を肥厚させ、二重口縁状にする。調整は磨滅のため不明である。瀬戸内系の小型壺か。2 は口縁部下位に突帯が付き、端部にわずかにハケ目が見られる。3 はわずかに平底をなす。外面はハケ、内面は強いナデを施す。口縁部が直立気味につくか。床面出土。4 は甕である。口唇部をはねあげ、胴部外面にはハケ目が見られる。炉跡出土。5 ～ 9 は高坏である。5 ～ 7 は脚部のみが遺存しており、全て下位で屈曲する。磨滅のため調整は不明瞭だが、5 の内面にシボリ痕、6・7 の内面にナデが見られる。7 の外面に黒斑が見られる。全て P-2 出土。8 は口縁



第 60 図　3 地区 26 号住居跡粘土塊実測図（1／30）

が強く外湾し、突帯を貼り付けて段を形成する。外面に縦方向のミガキ、内面に横方向のミガキを施す。口縁端部付近が被熱で赤変する。炉跡出土。9 は口縁が端部付近で強く外湾し、脚部は下位で強く屈曲する。磨滅のため調整は不明瞭だが、脚部内面に工具痕が見られる。P-1 出土。10 は塊である。平底を呈し、胴部下端が強いナデのため一部凹む。内面には工具痕が見られる。炉跡出土。11 ～ 13 はミニチュア土器である。11 は口縁が直立、12 はわずかに外湾、13 は内湾する。14 は土師皿である。糸切が見られ混入品である。このほか後述する打製石鏃が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代前期後半頃（4 世紀末頃）に属すると考えられる。

26 号住居跡（図版 24・49・52・53、第 59 図）

調査区の西側に位置し、24･29 号住居跡に切られる。規模は径 500cm、深さ 40cm で、円形を呈する。北側壁面際で粘土塊が検出されている。住居跡内には柱穴が確認できず、主柱穴等は不明である。

粘土塊（図版 52、第 60 図）

住居跡の北側壁際に 108cm × 67cm、高さ 40cm の粘土塊が検出された。上層に赤褐色粘質土などの焼土および炭化物が検出され、下層から淡灰色粘土の塊が検出された。淡灰色粘土は他の住居跡ではカマドの構築土に使われることが多いが、住居跡の時期ならびに付近の床面で焼けた面が認められないことからその可能性は低い。今後の類例に期待したい。

出土土器（第 61 図）

15 は甕である。口縁は直線的に伸び、口唇部をわずかにはねあげる。胴部外面はハケ、胴部内面はケズリ、口縁部はヨコナデを施す。このほか後述する鉄鏃が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭頃に属すると考えられる。

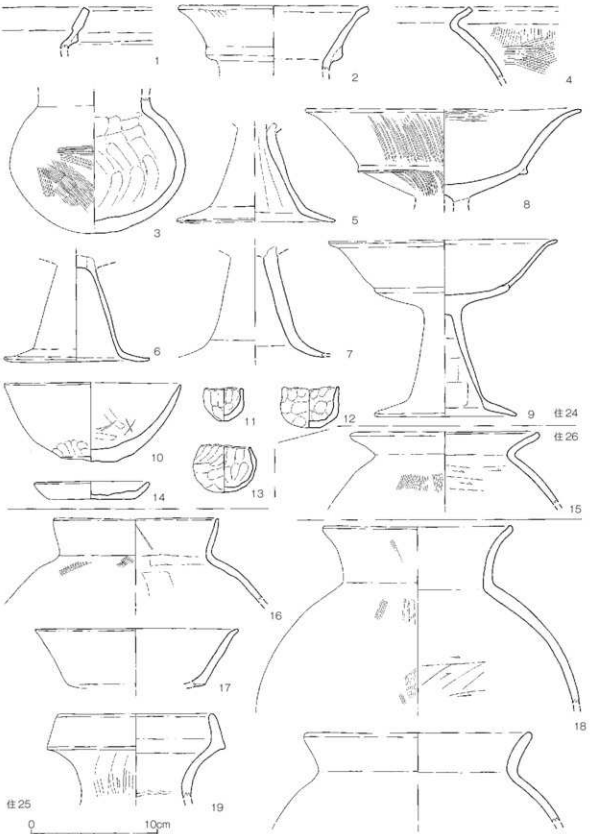
28 号住居跡（図版 24、第 59 図）

調査区の西側に位置し、24・27 号住居跡に切られる。24・27 号住居跡に大きく切られており、削平されていることから、遺存度は著しく低く、残存規模は長軸 175cm、短軸 75cm、深さ 2cm である。東壁際に 60cm × 75cm、深さ 35cm の屋内土坑と考えられえるピットが検出されている。この屋内土坑と住居跡の北側隅が近いことから、削平のためベッド状遺構の下段部分のみが遺存しているものと思われる。図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属すると考えられる。

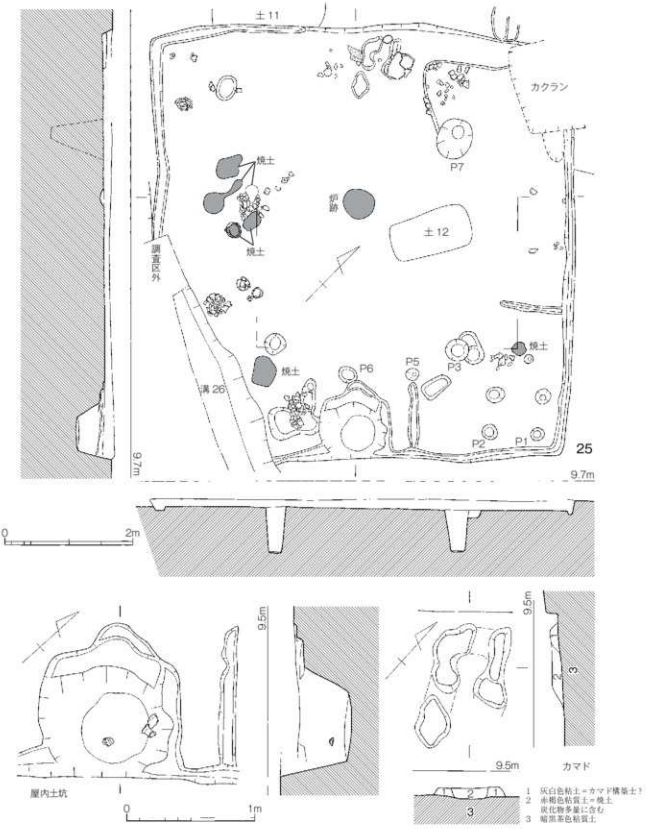
25 号住居跡（図版 50 ～ 52、第 62 図）

調査区の西側に位置し、27 号住居跡、11 号土坑を切り、26 号溝、撹乱に切られる。規模は長軸



第 61 図　3 地区 24 ～ 26 号住居跡出土土器実測図 (1 ／ 3)

670 ｃｍ、短軸 660cm、深さ 15cm で、正方形を呈する。東壁際に 110cm × 120cm、深さ 45cm の屋内土坑と考えられる P-6 が検出され、床面から 15cm 浮いたところで初期須恵器のコップ形土器が出土している。中央部には径 45cm、深さ 3cm の炉跡が検出され、西壁際にはカマドと考えられる粘土塊が検出された。炉跡を囲むように径 30 ～ 60cm、深さ 65 ～ 80cm の柱穴が 3 基確認さ



第62図　3地区25号住居跡実測図（1／60、1／30）

れ、4本柱になるものと考えられるが、西側の1基が検出できなかった。住居跡床面から多くの土器、焼土が出土している。

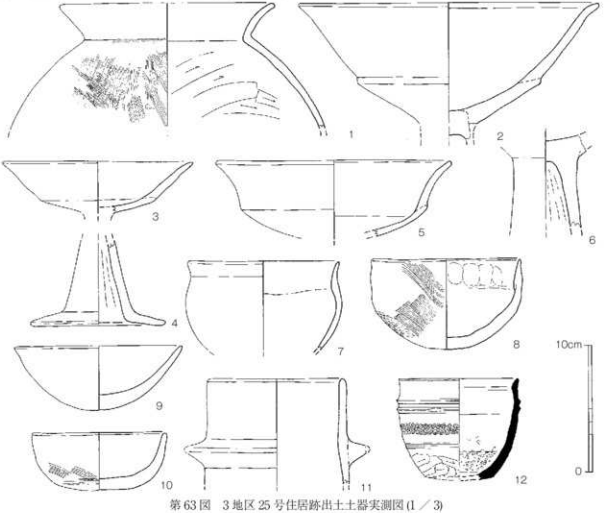
カマド（図版52、第62図）

住居跡の西壁中央で粘土塊が検出された。その位置からカマドと推測される。大きく破壊されているものの、壁面から10cm間隔をあけて、右袖は60cm、左袖100cm突出し、袖間は15～25cm

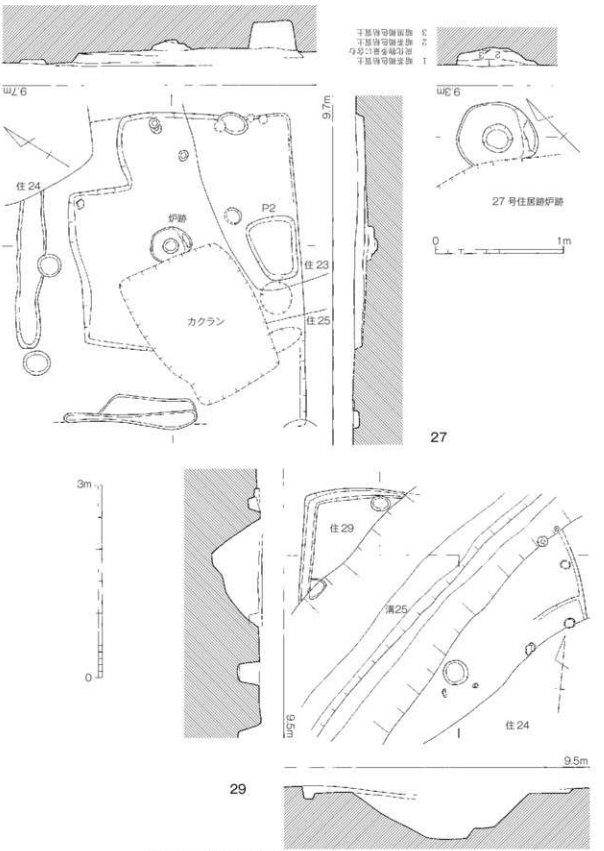
を測る。袖は灰白色粘土で構築され、間から焼土・炭化物が多量に出土している。

出土土器（図版 73、第 61・63 図）

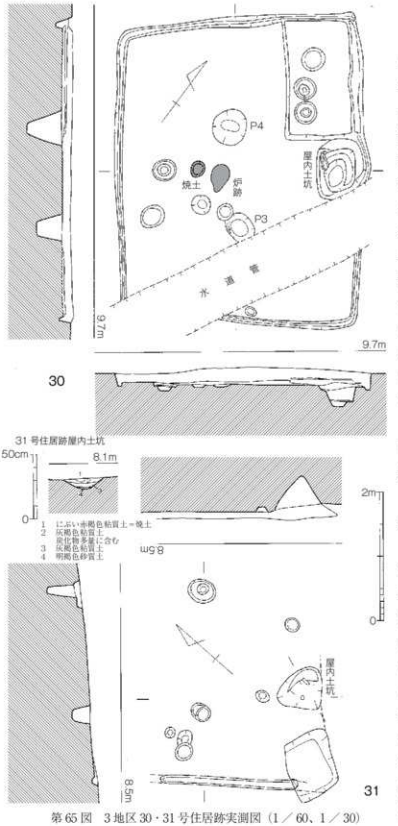
第 61 図 16 ～ 20 は壷である。16 は口縁が直線的に伸び、端部を丸く仕上げる。胴部外面はハケ、胴部内面ケズリ、口縁部はヨコナデを施す。口縁部内面に工具痕が見られる。P-7 出土。17 は二重口縁壷か。口縁が直線的に伸び、端部のみ外湾する。床面出土。18 は口縁が外湾し、口唇部が肥厚する。磨滅のため不明瞭だが、外面にハケ目、胴部内面にケズリが見られる。屋内土坑出土。19 は二重口縁壷である。屈曲部で明確に段を持ち、内傾する。口縁部はヨコナデ、頸部外面ハケ目、胴部内面はケズリを施す。弥生時代後期の混入品か。20 は口縁がわずかに外湾し、端部を丸く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。床面出土。第 63 図 1 は甕か。口縁が外湾し、端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケ、胴部内面はケズリを施す。床面出土。2 ～ 6 は高坏である。2 は口縁部が直線的に伸び、口唇部が外湾する。接合部で明確に段を持ち、器高が高い。調整は磨滅のため不明である。床面出土。3 は口縁が緩やかに外湾し、器高が低い。調整は磨滅のため不明である。床面出土。4 は脚部で、下位で強く屈曲し広がる。内面にシボリ痕が見られる。5 は口縁が強く外湾し、端部を丸く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。床面出土。6 は頸部片で直立気味に伸びる。内面にはシボリ痕が見られる。屋内土坑出土。7 は鉢である。器形が緩やかなＳ字状を呈し、口縁端部を丸く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。8 ～ 10 は埦である。8 は口縁が直立し、内面に粘土を貼り付け肥厚させる。外面にハケ、内面はナデ、口縁部内面に指頭圧痕を施す。9 は口縁が開き、端部を丸く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。床面出土。



第 63 図　3 地区 25 号住居跡出土土器実測図 (1 ／ 3)



第64図　3地区27・29号住居跡実測図（1／60、1／30）



第 65 図　3 地区 30・31 号住居跡実測図（1／60、1／30）

10 は口縁がやや直立気味になり、底部は平底気味になる。外面下部にハケ、他はナデを施す。11 は山陰系の甑である。上部もしくは下部のみが遺存している。端部から 5.5cm 程の位置に高さ 2cm 前後の突帯がつく。調整は磨滅のため不明である。12 は初期須恵器のコップ形土器である。口縁はやや内湾し、端部のみ外湾させる。口縁下 2cm 前後で 2 条の突帯、底部から 2.5cm で 1 条の沈線が施され、その間に波状文が施される。底部外面はケズリ、他は回転ナデを施す。口唇部ならびに底部内面に自然釉が見られる。このほか後述する鉄鎌などの鉄製品、石製小玉が出土している。

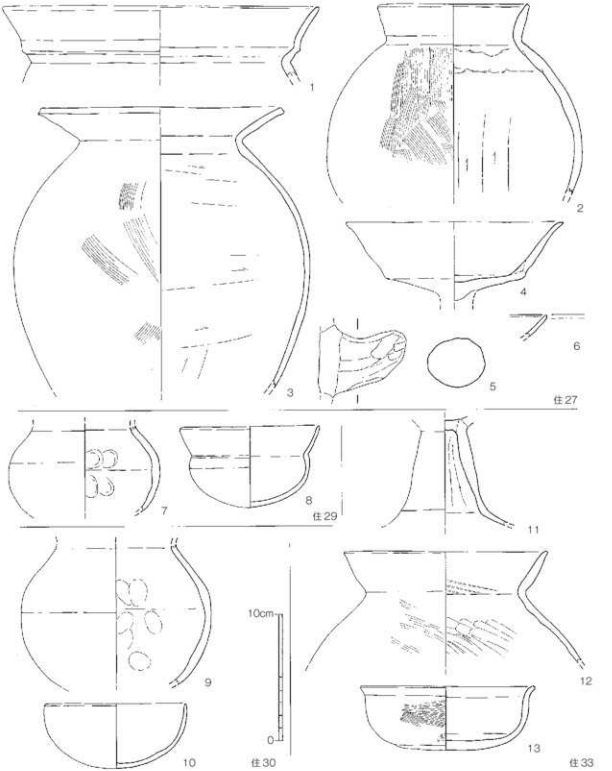
時期は、出土土器と切り合いから古墳時代前期後半～中期前半頃（4 世紀末～5 世紀前半）に属すると考えられる。

27 号住居跡（図版 24・53、第 64 図）

調査区の西側に位置し、28 号住居跡を切り、23・24・25 号住居跡、撹乱に切られる。規模は長軸 495cm、短軸 445cm、深さ 20cm で、長方形を呈する。削平のためベッド状遺構の下段ならびに壁溝のみが遺存しておりコ字形のベッドになると推測される。南壁際に 50cm × 95cm、深さ 40cm の屋内土坑と考えられる P-2 が検出された。中央には径 60cm、深さ 15cm の炉跡が確認されている。撹乱に大きく切られており、主柱穴は不明である。

出土土器（第 66 図）

1・2 は壺である。1 は二重口縁壺で口縁の開きがやや小さい。調整は磨滅のため不明である。山陰系の可能性もある。2 は直口壺である。口縁が直線的に開き、端部を丸く仕上げる。胴部外面はハケ、胴部内面下半はケズリ、胴部内面上半はナデ、口縁部はヨコナデを施す。胴部外面に黒斑が見られる。P-2 出土。3 は甕である。口縁が直線的に開き、端部を四角く仕上げる。磨滅のため不明瞭だが、胴部外面にハケ目、胴部内面にケズリが見られる。P-2 出土。4 は高坏である。口縁端部が外湾し、接合痕が明確に見られる。古



第66図　3地区27・29・30・33号住居跡出土土器実測図(1／3)

墳時代前期頃の混入品か。5は甑の取手である。長さが短く、ケズリ後ナデ調整を施す。古墳時代後期の混入品か。6は白磁の皿か。口唇部のみ露胎となり口禿皿となるか。中世の混入品である。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代初頭頃に属すると考えられる。

29号住居跡（図版54、第64図）

調査区の西側に位置し、26号住居跡を切り、24号住居跡、25号溝に切られる。規模は住居跡に

切られるため明確ではないが東西 450cm、南北 400 + α cm、深さ 10cm である。東側に一部 5cm ほどの段がつく部分があり、ベッドを持つ可能性がある。主柱穴等は削平のため不明である。

出土土器（図版 73、第 66 図）

7・8 は小型壺である。7 は胴部片のみで、内面に指頭圧痕が見られる。8 は口縁がわずかに内湾し、端部を丸く仕上げる。調整は磨滅のため不明である。床面出土。このほか後述する石錐が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代初頭～前期前半頃に属すると考えられる。

30 号住居跡（図版 54、第 65 図）

調査区の中央に位置し、住居跡の東側を撹乱によって大きく切られる。規模は長軸 480cm、短軸 400cm、深さ 15cm で、長方形を呈する。東壁際に 70cm × 95cm、深さ 35cm の屋内土坑と考えられるピットが検出されている。北隅隅には 95cm × 180cm、高さ 3cm のベッドが地山を掘り残すことで作り出される。中央には径 30cm、深さ 5cm の炉跡が検出され、その西側にも径 20cm、深さ 5cm の焼土が入ったピットが検出されている。炉跡の両側には径 40 ～ 55cm、深さ 40、55cm の柱穴 P-3・4 が 2 基確認され、2 本柱になるものと考えられる。

出土土器（第 66 図）

9 は壺である。胴部片のみで、内面に指頭圧痕が見られる。10 は埦である。口縁がほぼ直立し、端部を丸く仕上げる。磨滅のため不明瞭だが、ナデを施すか。

時期は、出土土器から古墳時代初頭～前期に属すると考えられる。

31 号住居跡（第 65 図）

調査区の北側に位置している。削平が著しく、南東側の壁溝および一部のピットが遺存するのみで、残存規模は長軸 320cm、短軸 250cm である。復元すると 420cm × 400cm ほどのやや小型の住居跡になるものと考えられる。南側には径 65cm × 70cm、深さ 55cm の屋内土坑と考えられるピットが検出された。屋内土坑の北側には径 25 ～ 45cm、深さ 25、50cm の柱穴が 2 基確認され、2 本柱になるものと考えられる。図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。

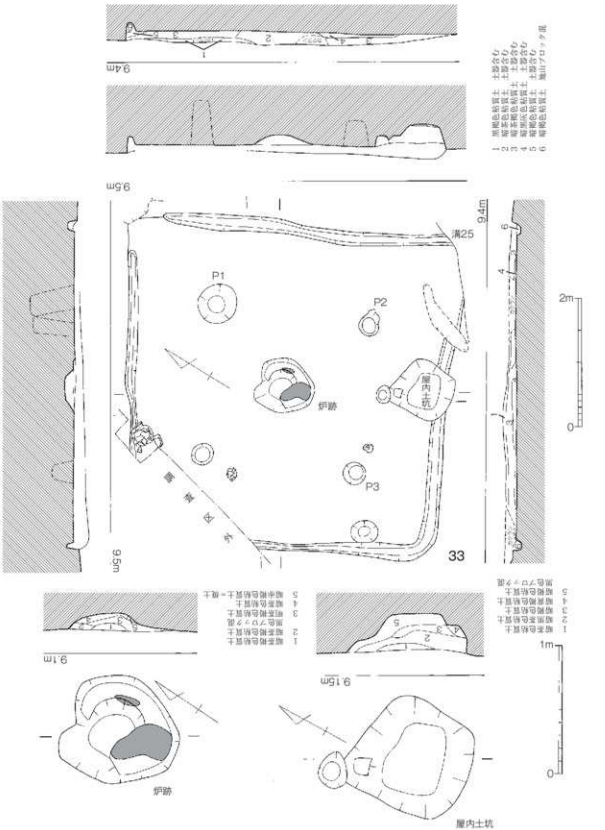
時期は、出土土器片から古墳時代初頭～前期頃に属すると考えられる。

33 号住居跡（図版 54 ～ 56、第 67 図）

調査区の西端に位置し、25 号溝に切られる。規模は長軸 510cm、短軸 505cm、深さ 20cm で、正方形を呈する。一部削平のため壁溝が残らない部分が見られる。南壁際に 95cm × 100cm、深さ 30cm の屋内土坑と考えられるピットが検出された。中央には 85cm × 95cm、深さ 15cm の炉跡が検出され、一部に焼土が確認された。炉跡を囲むように径 30 ～ 60cm、深さ 40 ～ 70cm の柱穴が 4 基確認され、4 本柱になるものと考えられる。埋土は暗茶褐色粘質土である。

出土土器（図版 74、第 66 図）

11 は高坏である。脚部下位で強く屈曲し、内面に稜が見られる。磨滅のため不明瞭だが、内面にシボリ痕が見られる。床面出土。12 は甕である。口縁が直線的に伸び、口縁中位がやや肥厚する。胴部外面にハケ、胴部内面に強いナデ、口縁内面下部にハケ、口縁部にナデが施される。床面出土。



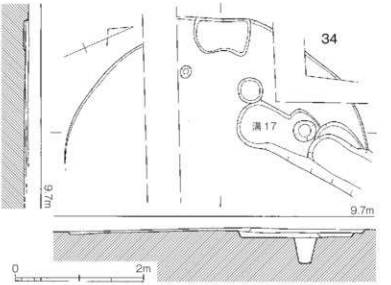
第 67 図　3 地区 33 号住居跡実測図（1／60、1／30）

13 は鉢である。口縁端部が外湾し、平底を呈する。外面はハケ、内面はナデを施す。外面に黒斑が見られる。床面出土。このほか後述する砥石、打製石鏃が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代前期後半頃（4 世紀後半）に属すると考えられる。

34号住居跡（第68図）

調査区の南西側に位置し、17号溝に切られる。削平されているものの半円形に埋土が検出されたため住居跡として報告する。規模は径470cm、深さ5cmで、円形を呈する。主柱穴等は確認できなかった。出土遺物はなく時期等は不明である。住居跡になるのであれば、北側で見つかった円形住居との関連から、弥生時代終末～古墳時代初頭頃のものか。

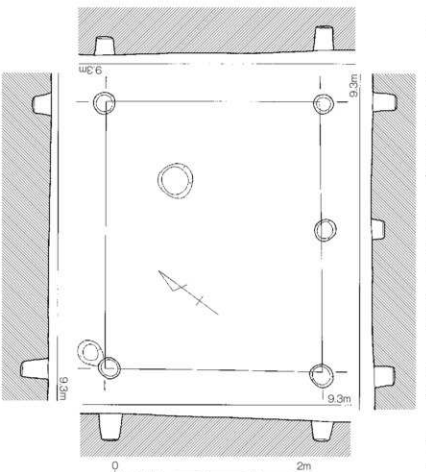


第68図　3地区34号住居跡実測図（1／60）

(2) 掘立柱建物跡（第69図）

調査区内で1棟のみが検出された。調査区の南西側に位置している。規模は1間×1間で梁行290cm、桁行230cmである。柱穴はどれも20～30cmほどで、深さ25cm前後のみ遺存している。柱痕跡は確認できなかった。図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。

時期は出土土器片から、古墳時代に属する可能性がある。



第69図　3地区掘立柱建物実測図（1／40）

(3) 土坑

土坑は12号まで番号をふっているが、1～3号は土壙墓であるため後に報告することとし、ここでは4～12号土坑について報告する。

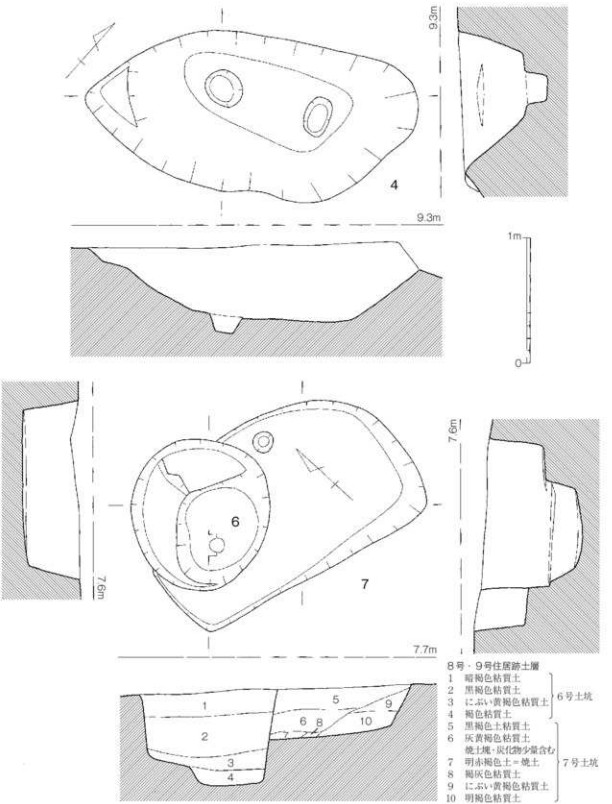
4号土坑（図版57、第70図）

調査区の南側に位置し、9号溝に切られる。規模は東西125cm、南北265cm、深さ60cmで長楕円形を呈する。底に径30cmほどのピットが2基検出された。落とし穴のようなものになるか。

出土遺物はなく時期等は不明である。

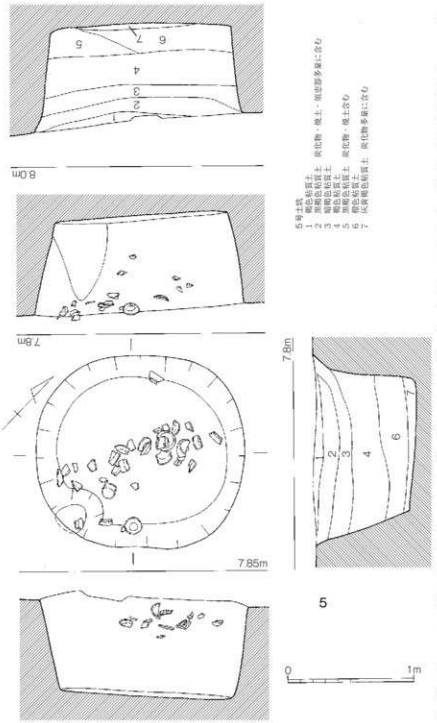
5号土坑（図版57～59、第71図）

調査区の北東側に位置し、16号溝に切られる。規模は径150～160cm、深さ75cmで円形を呈する。南側には壁を抉るよう



第70図　3地区4・6・7号土坑実測図（1／30）

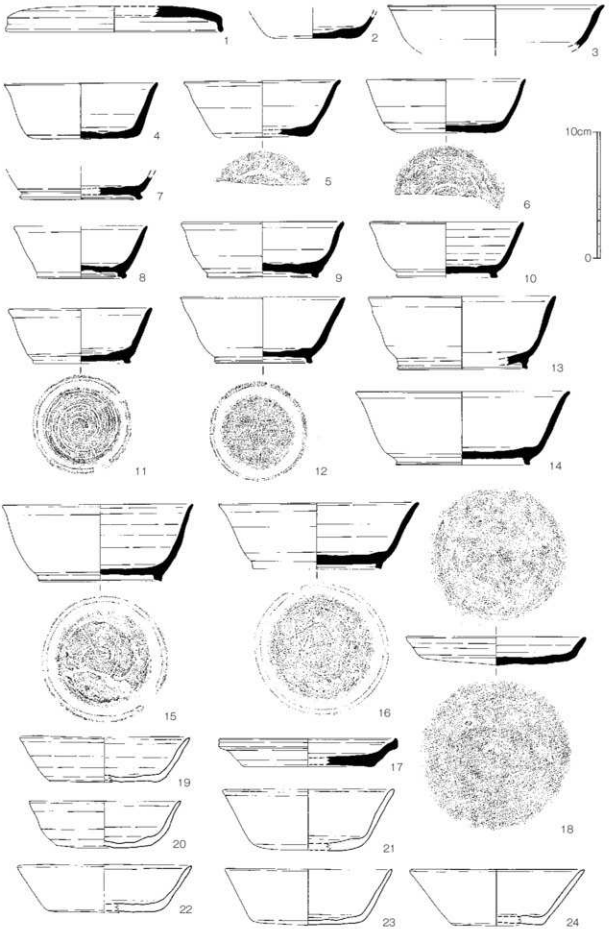
にピットが検出された。埋土は褐色、黒褐色粘質土である。床面より45～75cm浮いたところで、焼土、炭化物とともに多くの須恵器が出土している。また、下層でも炭化物を多く含む層が2箇所確認されており、3回以上の燃焼行為が行われていたものと考えられる。上層では焼土とともに須恵器が出土していることから、廃棄土坑のような性格が考えられる。



第71図　3地区5号土坑実測図（1／30）

出土土器（図版74、第72･74図）

第72図の1は須恵器の蓋である。口縁部がやや外湾し、天井部は水平に近い。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。2･3は須恵器の坏か。2は底部付近、3は口縁部付近が遺存している。2は底部中央がやや凹む。底部外面は回転ヘラ切りを施し、他は磨滅している。焼成は不良である。3は口唇部が外湾する。内外面ともに回転ナデを施す。4～6は須恵器の坏である。5は口縁端部が強く外湾する。いずれも底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデを施す。5は体部外面下半に工具痕が認められる。5･6は底部外面にヘラ記号が認められる。7～16は高台坏である。8～11は口径が10～12cm、器高4cm強の小型、12は口径13cm、器高5cmほどの中型、13～16は口径15～17cm、器高5.5cm前後の大型である。7は高台の大きさから中型ないしは大型になるものと考えられる。器形は9･14～16は口縁端部が外湾する。7･8･10～14は高台が踏ん張るもの、他は高台が内傾する。調整は概ね底部外面回転ヘラ切り、高台接合部分にナデ、他は回転ナデである。9･12は底部内面に不定方向のナデ、12は底部外面に板目状の痕跡が残り、その後不定方向のナデを施す。また、14にも回転ヘラ切りの後板目状の痕跡が認められる。11･15･16は底部外面にヘラ記号が認められる。17･18は須恵器の皿である。17は口縁がわずかに外湾する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。底部外面には所々に板目の痕跡、底部内面にはわずかに藁の痕跡が認められる。内外面ともに「×」のヘラ記号が見られる。17は口唇部を肥厚させ、さらに突出させる。底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、ほかは回転ナデを施す。19～24は土師器の坏である。20のみ口径12cm



第72図　3地区5号土坑出土土器実測図(1／3)

ほどとやや小型で、他は口径 13 ～ 14cm である。器高は、19・20・22 は 3.5cm 前後、21・23・24 は 4.5cm 前後を測る。20・21 は口縁がわずかに外湾し、他は直線的に外反する。調整は磨滅のため不明瞭だが、底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデか。第 74 図の 1 ～ 3 は土師器の甕である。いずれも口縁部のみが遺存している。1 はやや胴部が丸みを帯び、口縁が小さい小型のものとなる。調整はいずれも磨滅のため不明で、3 は内外面にススが付着する。

時期は、出土土器と切り合いから 8 世紀中頃～後半に属するものと考えられる。

6 号土坑（図版 59・60、第 70 図）

調査区の北側に位置し、8 号住居跡、7 号土坑を切る。規模は径 110cm、深さ 80cm で円形を呈する。埋土は上層が暗褐色や黒褐色粘質土、下層がにぶい黄褐や褐色粘質土でほぼ水平に堆積している。

出土土器（図版 74、第 74 図）

4 は須恵器の蓋である。口縁端部が強く屈曲する。内外面ともに回転ナデを施す。5 は須恵器の坏である。口縁部は直線的に外反する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデで一部板目痕が見られる。底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。

時期は、出土土器と切り合いから 8 世紀中頃に属するものと考えられる。

7 号土坑（図版 59・60、第 70 図）

調査区の北側に位置し、8・9 号住居跡を切り、6 号土坑に切られる。規模は東西 215cm、南北 135cm、深さ 40cm で長方形を呈する。埋土は黒褐色や灰黄褐色粘質土でレンズ状に堆積する。底部中央付近で焼土が検出された。

出土土器（第 74 図）

6 は壷の底部である。丸底を呈し、小型丸底壷になるものと考えられる。調整は内外面とも磨滅のため不明である。7 は土師器の小皿である。底径 5.8cm で平底を呈する。調整は磨滅のため不明である。中世の混入品か。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代前期に属するものと考えられる。

8 号土坑（図版 60、第 73 図）

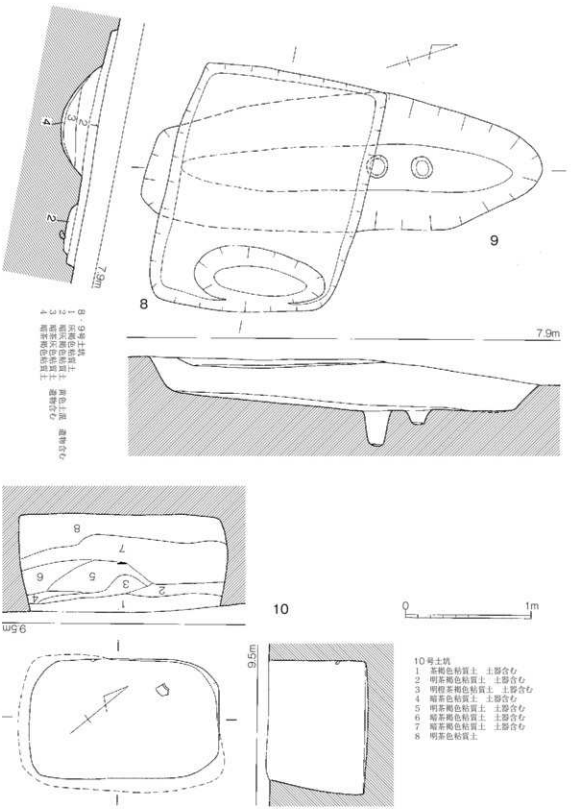
調査区の北西側に位置し、9 号土坑を切る。規模は東西 195cm、南北 155cm、深さ 5 ～ 10cm で長方形を呈する。東側の床面が一部 5cm ほど掘り込まれる。埋土は灰褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はないが、土師器の皿と考えられる土器片が出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから中世に属するものか。

9 号土坑（第 73 図）

調査区の北西側に位置し、8 号土坑に切られる。規模は東西 125cm、南北 315cm、深さ 25cm で長楕円形を呈する。床面のやや北よりから径 15cm のピットが 2 基検出された。埋土は暗灰褐色、暗茶褐色粘質土で水平に堆積する。図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから中世に属するものか。



第 73 図　3 地区 8 ～ 10 号土坑実測図（1 ／ 30）

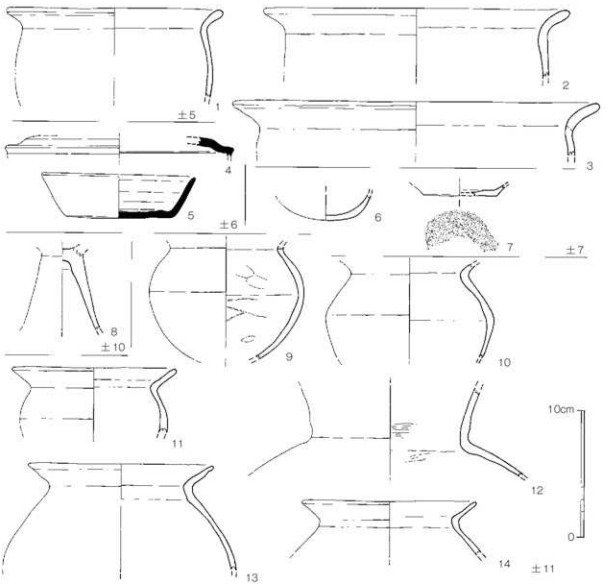
10 号土坑（図版 60・61、第 73 図）

調査区の西側に位置する。規模は東西 150cm、南北 90cm、深さ 75cm で長方形を呈する。床面は平たく、西・南側の壁はオーバーハングする。埋土は茶褐色粘質土である。

出土土器（第 74 図）

8 は高坏の脚部である。脚が直線的に伸びる。調整は磨滅のため不明である。

時期は、出土土器から古墳時代初頭に属するものと考えられる。



第 74 図　3 地区 5 ～ 7・10・11 号土坑出土土器実測図 (1 ／ 3)

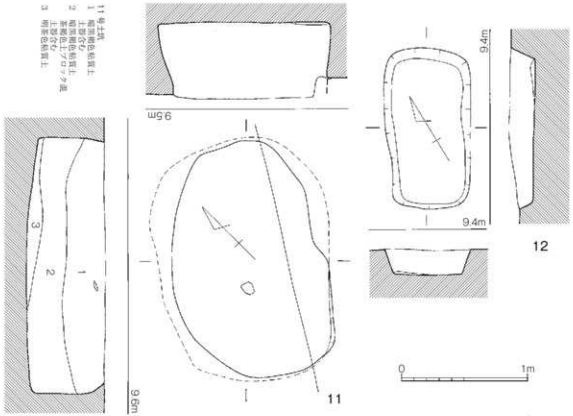
11 号土坑（図版 61、第 75 図）

調査区に西側に位置し、25 号住居跡に切られる。規模は東西 125cm、南北 185cm、深さ 60cm で楕円形を呈する。床面は平たく、ほぼ全ての壁面がオーバーハングする。

出土土器（第 74 図）

9 ～ 11 は小型壺である。9･10 は胴部のみが遺存する。9 は丸みを帯び、10 はやや胴部中央が張る。全体的に磨滅するが、9 は内面の一部にケズリや指頭圧痕が見られる。11 は口縁部が直線的に伸び、胴部は丸みを帯びる。内外面とも磨滅するが、内面の一部に指頭圧痕の痕跡が見られる。12 は直口壺である。頸部付近のみが遺存している。全体的に磨滅するが、頸部外面はナデ、頸部内面はハケ目、胴部内面はケズリが見られる。13・14 は甕である。13 は口縁部が直線的に伸び、頸部下で厚みを減じ、稜が形成される。調整は磨滅のため不明である。14 は口縁部がわずかに内湾し、頸部に 2 本の稜が見られる。調整は磨滅のため不明である。

時期は、出土土器と切り合いから古墳時代初頭に属するものと考えられる。



第75図　3地区11・12号土坑実測図（1／30）

10号土坑とは60cmの間隔を持って並行に並んでおり、同じ時期に作られたものと考えられる。ともに貯蔵穴のような性格を持つものか。

12号土坑（第75図）

調査区の西側に位置し、25号住居跡に切られる。規模は東西70cm、南北130cm、深さ20cmで長方形を呈する。

出土遺物はなく時期等は不明であるが、25号住居跡の床面から検出されており、床下掘り込みの可能性もある。

(4) 溝

調査区内では南北方向に走る近現代の畝跡が広い範囲で認められているが、細く平行して伸び、畝と考えられるもの以外をここでは報告する。

1～4号溝（図版24・62・63、第76図）

調査区の北側から中央部に位置しており丁字形を呈する。南側から北側に向かって流れ、交差部で東西に分かれる。3号溝が4号溝を切り、1号溝が2·3号溝を切る。また、全てが5号溝に切られ、2·3号住居跡を切る。規模は東西長40m、南北長20m、幅2～3.5m、深さ25～40cmである。調査区北側に位置する段落ちと対応するように深くなっており、段下の方が深い。段造成に伴うものである可能性がある。2～4号溝と1号溝とで少なくとも2回以上の掘り直しがあったと考えられる。また、25·26号溝と同一遺構である可能性がある。

出土土器（第77図）

1は白磁の碗である。内面にのみ施釉される。2は土師器の取手である。全体をナデにより成形する。古墳時代後期の混入品か。3・4は備前焼の擂鉢である。3は内面のみ施釉され、4本単位の擂り目が2本残る。4は口縁が屈曲し帯状になる。4本単位の擂り目が4本残る。5は瓦質土器の鉢か。口唇部を凹ませ、段を形成させる。内面にわずかにハケ目が残るほかは磨滅のため調整不明である。このほかに後に示す滑石製石鍋、図化に耐えないが近世に属すると考えられる陶器片等が出土している。

時期は、出土土器と切り合いから中世(12～16世紀)～近世に属するものと考えられる。

5号溝（図版63、第76図）

調査区の中央部に位置し東流する。1～4号溝を切る。規模は長さ6.4m、幅1.8m、深さ35cmである。土層観察では2条の溝が重複していることが示唆されるが、平面では確認できなかった。同一の溝を掘りなおしたものである可能性もある。水路を挟んで東側には延長線上に6･7号溝が位置しており、2条ある溝がそれぞれに対応している可能性もある。また現道を挟んで西側には26号溝が位置しており、規模と方向から同一のものである可能性が高い。埋土は黄褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はないが、染付けの小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから近世に属するものと考えられる。

6号溝

調査区の東側に位置し西流する。規模は長さ7m、幅0.7m、深さ8cmである。7･8号溝とそれぞれ70cm前後の間隔を持って並行する。先に述べたように5号溝と同一の可能性がある。埋土は黒褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はないが、土師器や須恵器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片から古墳時代に属するものか。

7号溝

調査区の東側に位置し東流する。規模は長さ9m、幅1m、深さ10cmである。先に述べたように5号溝と同一の可能性がある。埋土は黒褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はないが、陶器や染付けの小片などが出土している。

時期は、出土土器片から近世に属するものと考えられる。出土土器片から考えれば、7号溝が5号溝と同一である可能性が高い。

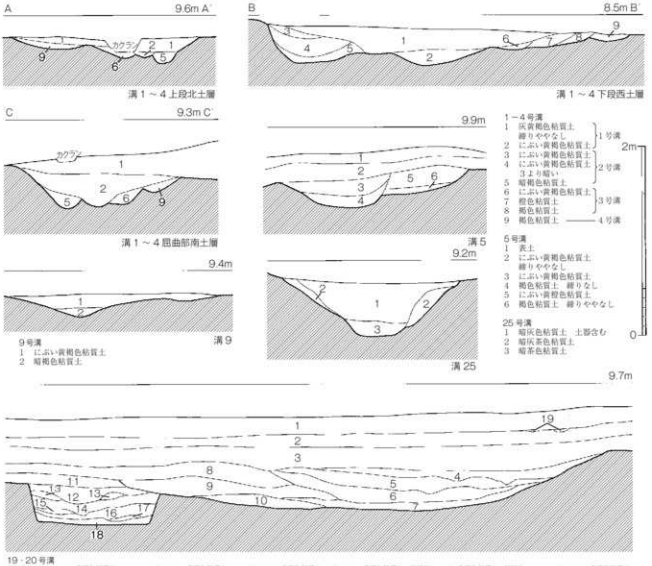
8号溝

調査区の東側に位置しほぼ水平である。規模は長さ9.5m、幅1m、深さ15cmである。埋土は黒褐色粘質土である。図化に耐えうる資料はないが、陶器や土師器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片から近世に属するものか。

9号溝（図版63、第76図）

調査区の南東側に位置しており南流する。斜面の傾斜と直行しており、規模は長さ14.5m、幅1.4



第76図　3地区1～5・9・19・20・25号溝土層実測図（1／40）

～2.2m、深さ25cmである。4号土坑を切り、1号土壙に切られる。図化に耐えうる資料はないが、土師器、須恵器、陶磁器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから中世に属するものと考えられる。

10号溝

調査区の南端に位置しほぼ水平である。斜面に平行しており、規模は長さ10m、幅1.5m、深さ20cmである。11・12・14号溝と平行に走る。現道を挟んだ西側で検出された19・20号溝のどちらかと同一溝である可能性がある。図化に耐えうる資料はないが、陶磁器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片から近世に属するものか。

11号溝

調査区の南端に位置し東流する。13号溝に切られる。斜面に平行しており、規模は長さ19m、

幅 1.1m、深さ 10cm である。10･12･14 号溝と並行する。現道を挟んだ西側で検出された 19･20 号溝のどちらかと同一溝である可能性がある。図化に耐えうる資料はないが、陶磁器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから中世に属するものか。

12 号溝

調査区の南端に位置し東流する。斜面に平行しており、規模は長さ 10.8m、幅 0.6m、深さ 5cm である。10･11･14 号溝と並行する。現道を挟んだ西側で検出された 19･20 号溝のどちらかと同一溝である可能性がある。図化に耐えうる資料はないが、土師器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片から中世に属するものか。

13 号溝

調査区の南東端に位置し東流する。11 号溝を切る。規模は長さ 5m、幅 0.9m、深さ 10cm である。

出土土器（第 77 図）

6 は白磁の碗である。玉縁口縁を持ち、薄く施釉される。

時期は、出土土器片から中世 (12 世紀ごろ) に属するものか。

14 号溝

調査区の最南端に位置し西流する。1・2 号不明遺構を切る。斜面に平行し、規模は長さ 19m、幅 1.2m、深さ 30cm である。

出土土器（第 77 図）

7 は土師質土器、三足器の脚部である。ナデで成形する。8 は丸瓦である。玉縁部が遺存し、端部も遺存している。玉縁連結部凹面にはわずかに叩きの痕跡が残る。焼成はやや不良である。

時期は、出土土器と切り合いから中世に属するものか。

15 号溝

調査区の北東側に位置し東流する。規模は長さ 4.5m、幅 0.7m、深さ 5cm である。埋土は黒褐色粘質土である。東端は 10cm ほど窪んだピット状をなしており、流れてきた水が多少溜まるようになる。図化に耐えうる資料はないが、土師器・須恵器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片から古墳時代に属するものか。

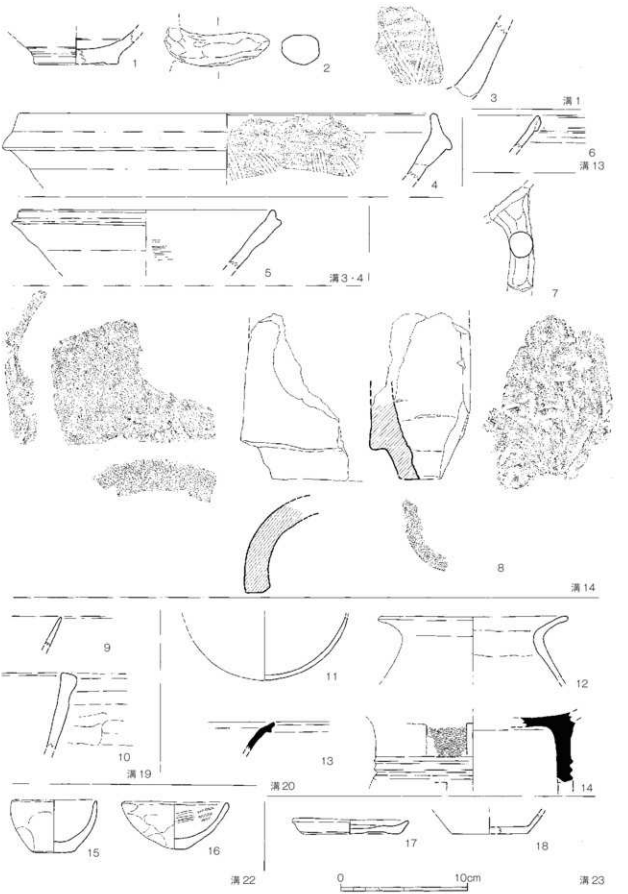
16 号溝

調査区の北東側に位置し東流する。5 号土坑を切る。規模は長さ 5.5m、幅 0.4m、深さ 10cm である。図化に耐えうる資料はないが、土師器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから中世に属するものか。

17 号溝

調査区の南西側に位置し北流する。34 号住居跡を切る。規模は長さ 4.5m、幅 0.7m、深さ 15cm



第77図　3地区溝出土土器実測図(1／3)

である。出土遺物はなく、時期等は不明である。

18 号溝

調査区の南西端に位置し南流する。19号溝に切られる。規模は長さ8m、幅1.1m、深さ10cmである。図化に耐えうる資料はないが、土師器・須恵器・陶磁器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから中近世に属するものか。

19 号溝（第 76 図）

調査区の南西端に位置し西流する。18･20 号溝を切る。規模は長さ 8m、幅 2 ～ 5m、深さ 60cm である。西端の調査区境付近で幅が大きくなり、この付近で南側に曲がる可能性もある。断面観察により 2 回以上の掘り直しがなされていることがわかる。下層の幅 4.5m ほどの溝が、完全に埋没した後、やや北に寄って幅 3.5m の溝が掘削される。埋土はともに茶褐色粘質土である。現道を挟んだ東側で検出された 10 ～ 12 号溝のどちらかと同一溝である可能性がある。

出土土器（第 77 図）

9 は青磁の碗である。口縁のみが遺存している。色調から龍泉窯系と考えられる。10 は瓦質土器の鉢か。口縁はわずかに外反するが、直立する可能性もある。磨滅が激しいが、口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にケズリが見られる。

時期は出土遺物と切り合いから中世（12 ～ 15 世紀）に属するものと考えられる。

20 号溝（第 76 図）

調査区の南西端に位置し、わずかに東流する。3 号溝に切られる。規模は長さ 6.5m、幅 1.4m、深さ 45cm である。断面逆台形を呈し、概ね水平に堆積する。現道を挟んだ東側で検出された 10 ～ 12 号溝のどちらかと同一溝である可能性がある。

出土土器（第 77 図）

11 は土師器の坏である。丸底を呈し、口縁部近くまで遺存している。調整は磨滅のため不明である。12 は甕である。口縁部がわずかに外湾する。調整は磨滅のため不明である。13 は須恵器の甕である。口縁直下に突帯をめぐらす。内外面ともに回転ナデを施し、内面は灰かぶりが見られる。14 は須恵器の器台である。頸部から 3cm ほど下部に 3 条の突帯が施され、頸部と突帯の間には波状文が施される。頸部直下に長さ 2.5cm、幅 1cm 程度の長方形透かしが 3cm の間隔で 2 箇所残る。また突帯を隔てて下段には、上部の透かしの中間に長方形の透かしがわずかながら残る。坏部内外面はナデ、他は回転ナデが施され、透かしは外面からあけられる。

時期は出土遺物と切り合いから 6 世紀に属するものと考えられる。

21 号溝

調査区の北西側に位置し北流する。22 号溝を切る。規模は長さ 8.5m、幅 1.6m、深さ 10cm である。図化に耐えうる資料はないが、土師器・平行タタキが施される甕の破片を含む須恵器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから古墳時代に属するものか。

22 号溝

調査区の北西側に位置し西流する。21 号溝に切られる。12 号住居跡にも切られるように図化しているが、時期から考えれば切っているものと考えられる。規模は長さ 17m、幅 0.8m、深さ 10cm である。12 号住居跡の角から約 6m 北西方向に伸び、21 号溝および撹乱に切られるが、そこで 120 度曲がって西方に伸びる。

出土土器（第 77 図）

15・16 は鉢である。15 は平底を呈し、やや内湾しながら立ち上がる。内外面とも磨滅のため調整不明瞭である。16 は尖底状になり、口縁が広く外反する。全体的に磨滅するが、外面にナデ、内面の一部にタタキ状の工具痕が見られる。

時期は出土遺物と切り合いから弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

23 号溝

調査区の北側に位置し北流する。24 号溝と丁字状に交わる。同一のものである可能性もある。規模は長さ 12m、幅 0.6m、深さ 10cm である。

出土土器（第 77 図）

17 は土師皿である。底部径 9cm で、口縁が僅かに外反する。18 は白磁の皿である。平底を呈し、全体に施釉が見られる。

時期は、出土土器片と切り合いから中世（13 ～ 14 世紀）に属するものと考えられる。

24 号溝

調査区の北側に位置し東流するか。23 号溝と丁字状に交わり、15 号住居跡を切る。途中でいったん途切れるが、方向や規模、埋土から 1m 東方に伸びる溝も同一のものと考えられる。規模は 4m + 4.5m、幅 0.7m、深さ 5cm である。図化に耐えうる資料はないが、土師器・須恵器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから古墳時代後期に属するものか。

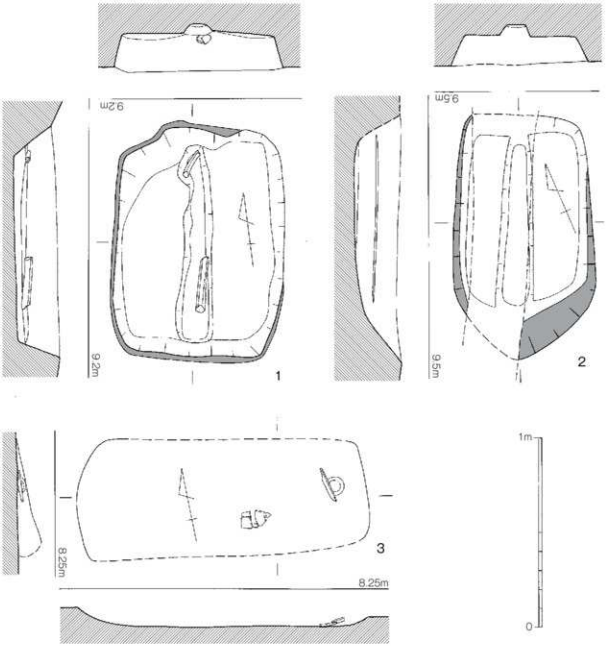
25 号溝（図版 64、第 76 図）

調査区の西端に位置し北流する。29・33 号住居跡を切る。1 ～ 4・26 号溝と同一なものである可能性もある。規模は長さ 20m、幅 2m、深さ 60cm である。断面観察から 2 回以上の掘り直しがなされていることが想定される。他の溝に比べて 1 層が厚く、水平堆積であり、埋没は一気に行われたものであるか。図化に耐えうる資料はないが、土師器・染付けの小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから近世に属するものか。

26 号溝

調査区の西側に位置しやや東流する。20･25 号住居跡を切る。規模は長さ 20m、深さ 20cm で、溝の半分が調査区外にかかっているため幅は不明である。現道を挟んで東側には 5 号溝が位置しており、規模と方向から同一のものである可能性が高い。図化に耐えうる資料はないが、土師器・須恵器・陶磁器の小片などが出土している。



第78図　3地区1～3号土壙実測図（1／20）

時期は、出土土器片と切り合いから中近世に属するものか。

(5) 土壙墓

本調査区において、中世の土壙墓が3基検出された。2基は火葬土坑、1基は土壙墓でいずれも群をなすものではない。

1号土壙（図版64、第78図）

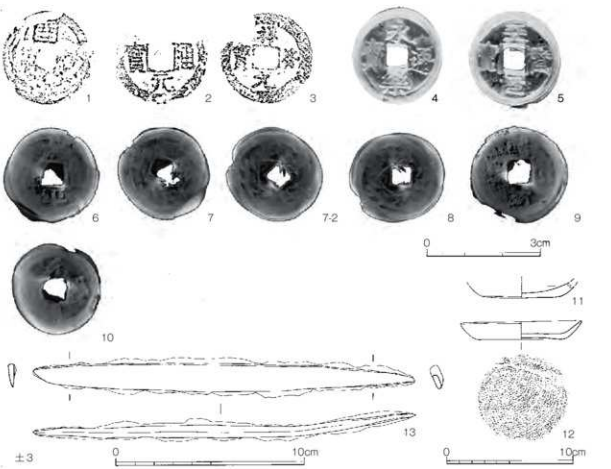
調査区の南側に位置し、9号溝を切る。規模は東西90cm、南北120cm、深さ20cmで長方形をなす。床面中央に、長軸に沿って幅20cm、深さ5cmほどの溝が掘り込まれる。土壙の上場および壁面の一部が被熱しており、埋土中からは大量の炭化物ならびに骨片が見られた。炭化物および骨片以外に資料はなく、時期等は不明であるが、構造から2号土壙と同様の時期を示すものと考えられる。

2号土壙（図版65、第78図）

調査区の東側に位置し、近現代の畝に切られる。規模は東西70cm、南北140cm、深さ15cmで偏五角形をなす。1号土壙と同様に床面中央に、長軸に沿って幅15cm、深さ5cmほどの溝が掘り込まれる。土壙の上場および壁面の一部が被熱しており、埋土中からは大量の炭化物ならびに骨片が見られた。

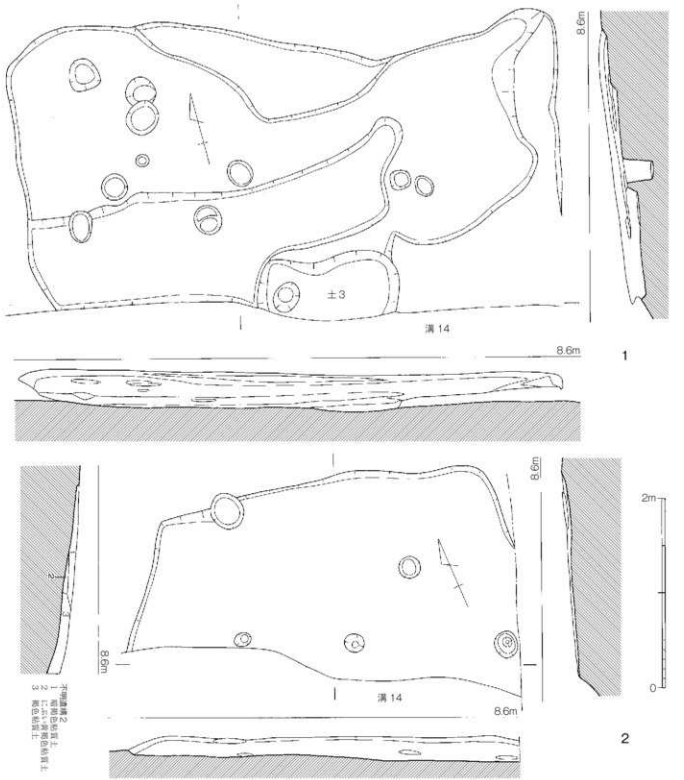
出土遺物（図版75、第79図）

1～10は銭である。4・5は表面同士が接着しており、CTによる撮影を行った。2および6～10は6枚が重なって接着しており、2しか表面が見える状態になかったため、X線撮影をおこなった。1・2は開元通寶である。初鋳は唐代の621年。背面には何も記されない。3は祥符元寶である。初鋳は北宋代の1008年。4は永樂通寶である。初鋳は明代の1408年。5は天聖元寶である。篆書で記される。初鋳は北宋代の1023年。6は太平□□である。太平通寶か。初鋳は北宋代の976年。7は□化元□である。裏返しに写っており化と元が判別できる。文字の質から淳化元寶（初鋳は北宋代、990年）の可能性がある。8は□□元□である。行書で記される下部の元のみしか判別できない。9は□□元寶である。裏返しに写っており、正確に読めるのは寶のみであるが、下部は元の篆書体であると考えられる。また、上部に写った文字の陰影から治平元寶（初鋳は北宋代、1064年）、紹聖元寶（初鋳は北宋代、1094年）、紹興元寶（初鋳は南宋代、1131年）の可能性が高いと考えられる。10は元豊□□である。行書体で記され元豊通寶と考えられる。初鋳は北宋代の1078年。



第79図　3地区土壙出土遺物実測図

（1～3は1／1、4～10はおよそ1／1、11・12は1／3、13は1／2）



第80図　3地区1・2号不明遺構実測図（1／40）

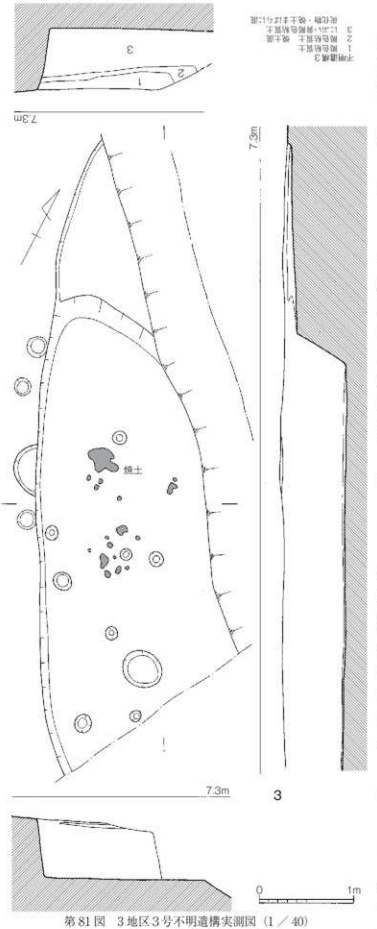
時期は、出土銭と切り合いから永楽銭鋳造の1408年以降に属すると言える。時期や構造については、後に考察する。

3号土壙（図版65、第78図）

調査区の南東側に位置し、1号不明遺構を切る。14号溝との関係は3号土壙の南端が削平されていることもあり不明である。規模は東西155cm、南北60cm、深さ5cmである。東端付近で刀子と土師器の皿が出土しており、東側に頭部を向けていたものと考えられる。

出土遺物（図版75、第79図）

11・12は皿である。ともに大半が磨滅しているが、12の底部外面には糸切痕が見られる。13は



第81図　3地区3号不明遺構実測図（1／40）

刀子である。切先はわずかにふくらが付き、身と茎の間には段を有さない。茎側がわずかに折れ曲がっている。

時期は、出土遺物と切り合いから中世（12世紀頃）に属するものか。

(6) その他の遺構

1号不明遺構（第80図）

調査区の南側に位置し、3号土坑、14号溝に切られる。規模は東西580cm、南北300cm、深さ20cmである。斜面に沿って2つの角が検出されたため、当初は住居跡と考えたが床面が水平にならず、所々段がつくことなどから不明遺構とした。図化に耐えうる資料はないが、土師器・須恵器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから古墳時代後期に属するものか。

2号不明遺構（第80図）

調査区の南東側に位置し、14号溝に切られる。規模は東西400cm、南北220cm、深さ5cmである。1号不明遺構と同じく、斜面に沿って角が検出されたため、当初は住居跡と考えたが床面が水平にならず、主柱穴が見つからなかったなどから不明遺構とした。図化に耐えうる資料はないが、土師器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから古墳時代に属するものか。

3号不明遺構（図版65、第81図）

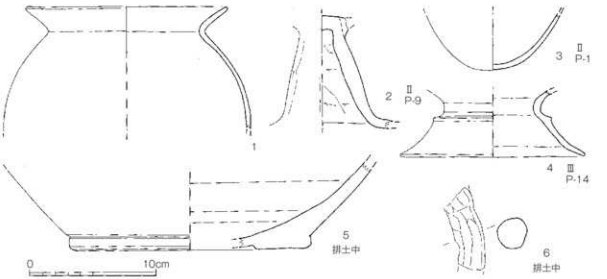
調査区の北東端に位置する。規模は東西660cm、南北180cm、深さ65cmである。落ち際に段状に掘り込まれており、中央の底部付近に焼土が散見さ

れる。しかし、炉跡や主柱穴は認められず、性格は不明である。図化に耐えうる資料はないが、土師器・須恵器の小片などが出土している。

時期は、出土土器片と切り合いから古墳時代後期に属するものか。

その他の遺構出土土器（第82図）

1は甕である。口縁部が直線的に伸び、器壁は薄い。調整は磨滅のため不明である。古墳時代初頭に属するものと考えられる。Ⅱ区ピット出土。2は高坏の脚部である。頸部から直線的に伸び、下部付近で大きく開く。脚部外面はケズリ後ナデ、脚部内面はケズリを施す。Ⅱ区P-9出土。3は埦の底部付近か。丸底を呈し、器壁は薄い。内外面とも磨滅のため調整不明である。Ⅱ区P-1出土。4は鼓形器台である。脚部はわずかに外湾し、くびれ部までが遺存する。外面はヨコナデを施し、内面は磨滅のため不明である。また、図化に耐えないが同一ピットから布留式の甕が出土している。Ⅲ区P-14出土。5は青磁の壷か。高台が低く、露胎として残る。排土中出土。6は土師質土器、三足器の脚部である。工具によるナデで成形する。全体的にススが付着する。排土中出土。

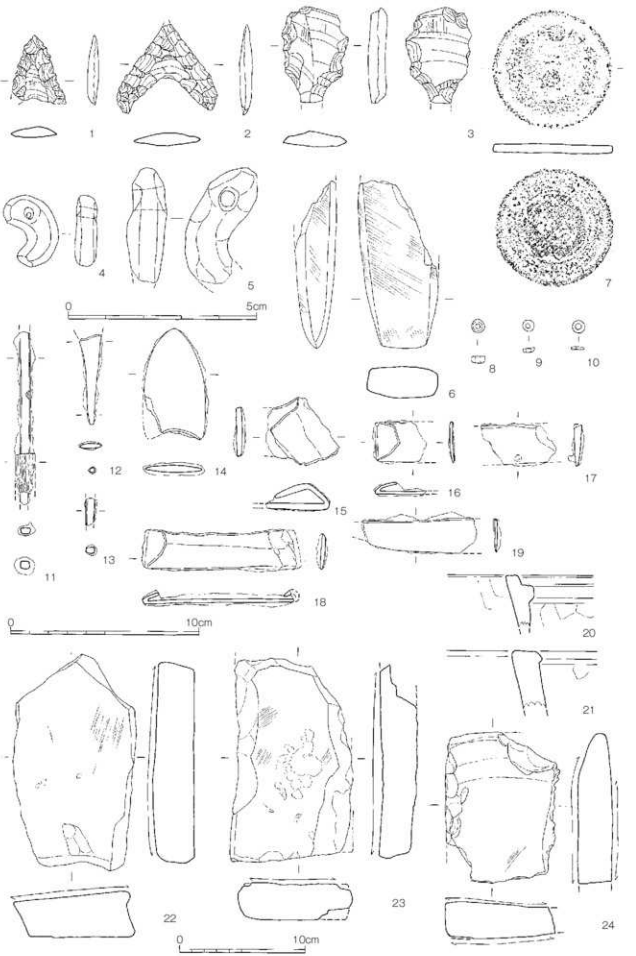


第82図　3地区その他の遺構出土土器実測図(1／3)

特殊遺物（図版75、第83図）

3地区で出土した石製品・土製品・金属製品などを報告する。

1・2は凹基式の打製石鏃である。1は抉りが0.2cmと浅く、両側縁に調整を施し成形する。片脚を欠損する。黒曜石製。33号住居跡埋土中出土。2は抉りが0.9cmの鍬形鏃である。両側縁に調整を施し成形する。先端をわずかに欠損する。黒曜石製。24号住居跡出土。3は石錐である。先端を欠損するが、錐部の幅は0.6cmである。黒曜石製。29号住居跡床面出土。4は石製勾玉である。頭部に径0.25cmの孔を穿つ。緑色片岩製。2号住居跡床面出土。5は土製勾玉である。やや屈曲が弱く、頭部に径0.4cmの孔を穿つ。焼成はやや不良で黄灰色を呈する。22号住居跡出土。6はノミ状石斧である。表面を研磨により平滑にしており、刃部幅は1.2cmである。基部を欠損する。22号住居跡下層出土。7は寛銭硬貨である。磨滅しているが背面中央に龍、周辺に「大日本・明治十六年・2SEN」と書かれる。寛銭硬貨は、明治17年まで製造されており、晩年のものであ



第 83 図　3 地区特殊遺物実測図（1 ～ 10 は 1 ／ 1、11 ～ 19 は 1 ／ 2、20 ～ 24 は 1 ／ 3）

る。表土出土。8 ～ 10 は石製小玉である。径 0.3 ～ 0.38cm、高さ 0.08 ～ 0.2cm、孔径 0.13 ～ 0.18cm である。10 は極端に薄く、剥離している可能性がある。緑色片岩製。25 号住居跡床面出土。11 ～ 14 は鉄鏃である。11 は尖根式の鉄鏃で両端部が欠損する。下部には幅 1.05cm の木質が遺存しており、矢柄に装着したままであったと考えられる。表面には藁状の繊維が付着しており、床近くに置いてあったものか。14 号住居跡出土。12 は有茎式の鉄鏃である。刃部の大部分が欠損するが、刃部にかけてやや厚くなっていく。柳葉形もしくは方頭形になると考えられる。23 号住居跡出土。13 は鉄鏃の茎部破片である。26 号住居跡出土。14 は凹基式の鉄鏃である。非常に大きく、抉りは 0.45cm を測る。22 号住居跡出土。15 は鉄鎌である。端部を 2.4cm 分折り曲げる。25 号住居跡出土。16 は鉄庖丁か。端部から 1.4cm 分折り曲げ、15 よりも薄い。端部の折り曲げ方も 18 に近く、鉄庖丁とした。25 号住居跡出土。17 は鉄製刃器である。やや厚いものの、幅および出土地点から 16 と同一個体の可能性もある。25 号住居跡出土。18 は鉄庖丁である。右端部を欠損する。左端部から 1.2cm を折り曲げる。23 号住居跡出土。19 は鉄製刃器である。下部に刃を持ち、左に向かって窄まる。刀子もしくは鎌の破片か。25 号住居跡出土。20・21 は滑石製の石鍋である。20 は上端から 1cm 弱のところで幅 1.4cm、高さ 0.8cm、断面四角形の突帯をもつ。外面にススが付着する。3・4 号溝出土。21 は口唇部に幅 1cm、高さ 0.45cm、断面三角形の突帯を持つ。外面にススが付着する。遺構面出土。22 ～ 24 は砥石である。22 は上面のみを砥面とする。砂岩製。大きさと石質から置き砥の仕上げ砥と考えられる。22 号住居跡出土。23 は上面のみを砥面とし、中央部が敲きもしくは剥離のため凹む。細粒砂岩製である。33 号住居跡出土。24 は上面ならびに下面を砥面とし、右側面は研磨による面取りを行う。2 号溝出土。

小結

3 地区では住居跡を中心として集落が確認された。特に南西側においては、遺構の切り合いが著しく、また遺構の残存度も高い。東側は逆に住居跡が数 cm の厚さしか残っていないなど、削平が著しいことが想定できる。このことから元々は東から西に向かって傾斜しており、東側にも集落が展開していたものと考えられる。実際に、現況で標高が本調査地点より 9 ～ 10m ほど高い、北東側の上片島遺跡 5 地区（苅田町による調査：整理中）でも、本調査区と同様の時期の遺構が検出されている。また、現在の上片島・岡崎集落内の畑地では古墳時代に属すると考えられる土器片が採集されており、丘陵上全体に集落が展開していたと想定される。また、調査区中央部を頂点として、南北に傾斜しており、試掘の結果からも両側に河川ないしは谷が入っていたことがわかる。

第３表　上片鳥遺跡出土特殊遺物一覧表

挿図	番号	図版番号	地区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
32	1	66	1	杭 14	木製品	杭	(11.55)	(3.80)	3.10		0.1	アカガシ亜属
32	2	66	1	BTr. 杭	木製品	杭	(18.10)		3.70		0.2	
32	3		1	ETr. 上粘層	木製品	板	(13.10)	2.90	0.85		不明	
32	4		1	CTr. 中粘層	木製品	板	(13.50)	(6.40)	(1.80)		不明	
32	5		1	CTr. 中粘層	木製品	板	(16.80)	7.80	1.50		不明	
32	6		1	CTr. 中粘層	木製品	板	(29.20)	(9.00)	2.20		不明	
32	7	66	1	包含層	木製品	板	43.30	9.50	3.20		0.8	
32	8		1	ETr. 上粘層	木製品	底板	(10.40)	4.10	0.65		0.3	
32	9	66	1	包含層	木製品	蓋板	(37.10)	5.10	1.70		0.7	ヒノキ
32	10	66	1	試掘 12 トレンチ	木製品	底板	(28.20)	7.20	1.15		0.2	ヒノキ
32	11	66	1	包含層	木製品	曲げ物	15.30		6.80		ほぼ完形	スギ
32	12		1	包含層	木製品	不明	(27.60)	4.10	1.20		0.5	
32	13	66	1	BTr. 杭周辺	木製品	底板？	(28.10)	5.50	1.00		0.6	
32	14		1	ETr. 上粘層	木製品	棒状	(9.35)	1.55	0.90		不明	
33	15		1	包含層	木製品	端	(6.60)	(2.60)	(0.65)		0.1	
33	16		1	包含層	木製品	端	(6.10)	(7.30)	(0.60)		0.1	
33	17	67	1	包含層	木製品	端	31.90	17.50	1.90		0.7	アカガシ亜属
33	18	67	1	CTr. 中粘層	木製品	不明	(17.35)	15.70	7.30		不明	クスノキ
33	19	67	1	CTr. 中粘層	木製品	不明	(22.40)	15.30	6.75		不明	クスノキ
33	20	67	1	CTr. 中粘層	木製品	不明	(12.60)	10.60	4.80		不明	クスノキ
34	21	67	1	重機掘削時	木製品	部材	(54.90)	7.90	3.70		不明	スギ
34	22	67	1	重機掘削時	木製品	不明	50.00	10.30	2.75		ほぼ完形	スギ
34	23	67	1	試掘 15 トレンチ	木製品	不明	(21.80)	10.00	1.50		0.5	ヒノキ
34	24	67	1	包含層	木製品	織機？	34.30	(7.00)	1.80		0.6	ヒノキ
73	1	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.40		0.18		完形	
73	2	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.50		0.17		ほぼ完形	
73	3	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.50		0.16		0.8	
73	4	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.52		0.17		完形	
73	5	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.50		0.17		完形	
73	6	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.45		0.12		完形	
73	7	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.46		0.14		完形	
73	8	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.46		0.15		完形	
73	9	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.50		0.20		完形	
73	10	75	3	土壙 2	銅製品	銭	2.50		0.15		完形	
73	13	75	3	土壙 3	鉄製品	刀子	20.40	1.50	0.65		完形	
83	1	75	3	住居 33 粘土上面黒色土	石製品	石鏃	1.80	(1.40)	0.30	(0.54)	0.8	黒曜石
83	2	75	3	住居 24	石製品	石鏃	2.35	2.60	0.35	1.09	完形	黒曜石
83	3	75	3	住居 29 床面	石製品	石錐	(0.25)	1.75	0.50	(1.99)	0.6	黒曜石
83	4	75	3	住居 2	石製品	勾玉	1.85	1.45	0.60	2.13	完形	緑色片岩
83	5	75	3	住居 22	土製品	勾玉	(3.05)	1.20	1.10	(3.60)	0.8	
83	6	75	3	住居 22	石製品	ノミ状石斧	(4.45)	2.10	1.10	(11.31)	0.5	頁岩
83	7		3	表採	銅製品	洗銭硬貨	3.15		0.24	13.46	完形	
83	8		3	住居 25	石製品	小玉	0.35		0.20	0.03	完形	緑色片岩
83	9		3	住居 25	石製品	小玉	0.30		0.15	0.01	完形	緑色片岩
83	10		3	住居 25	石製品	小玉	0.38		0.08	0.01	完形	緑色片岩
83	11	75	3	住居 14	鉄製品	鉄鏃	(9.10)	0.55	0.40	(9.81)	0.7	
83	12	75	3	住居 23	鉄製品	鉄鏃	(4.80)	1.20	0.30	(5.40)	0.5	
83	13		3	住居 26	鉄製品	鉄鏃	(1.40)	0.50	0.35	(0.72)	0.1	
83	14	75	3	住居 22	鉄製品	鉄鏃	5.85	3.25	0.40	(26.69)	0.8	
83	15		3	住居 25	鉄製品	鉄鏃	(3.90)	3.70	0.30	(16.32)	0.2	
83	16		3	住居 25	鉄製品	鉄鹿ノ	(2.70)	2.10	0.20	(5.75)	0.3	
83	17		3	住居 25	鉄製品	刃器	(4.00)	2.10	0.40	(6.17)	0.3	
83	18	75	3	住居 23	鉄製品	鉄鹿ノ	(8.10)	2.20	0.20	(17.73)	0.9	
83	19		3	住居 25	鉄製品	刀子？	(6.10)	1.80	0.15	(7.42)	0.2	
83	20		3	溝 3・4	石製品	石鍋					0.1	滑石
83	21		3	住居 27 検出時	石製品	石鍋					0.1	滑石
83	22	75	3	住居 22	石製品	砥石	17.00	9.70	3.70	967.00	ほぼ完形	砂岩
83	23	75	3	住居 33	石製品	砥石	(16.10)	9.75	3.10	(663.00)	0.8	細粒砂岩
83	24		3	溝 2	石製品	砥石	(11.80)	(8.70)	2.90		0.3	凝岩？

（　）は残存値

4　まとめ

(1) 遺跡の周辺環境

今回の調査により、2地区ならびに3地区では地形の落ちが検出され、1地区は丘陵下であることがわかった。2･3地区で検出された落ちは第84図のように復元できる。現在は埋め立てにより地形が変わっているものの、昭和46年に撮影された空中写真（第85図）では瓢箪形の丘陵が残されており、今回調査により検出された落ちとも符合する。また、昭和14年の字図でも今回の調査と符合するように字境が認められ古くから瓢箪形の地形であったことがわかる。

また、1地点では葦などの植物遺体が検出された層があることから、時期は不明ながらも南側の行橋市延永地区の丘陵までの現在水田となっている地帯には湿地帯が広がっており、地形環境としては現在と大きく変わらないものと推測される。

(2) 検出遺構について

今回の調査区内においては、弥生時代後期後半～古墳時代にわたり、住居跡を中心とした集落が営まれており、その後も古代、中世、近世における区画溝や墓などが検出されている。遺跡内の他の調査地点においてもこれらの時期を中心とした遺構が検出されており、独立丘陵であることを考え合わせても、丘陵上で一連の集落をなしていたと想定される。丘陵全体の集落像は今後の調査の進展を待たなければならないものの、ここでは今回の調査で得られた事項を纏めておきたい。

A) 住居跡について（第4表）

今回の調査区では、住居跡と考えられる遺構が34棟検出されており、先に述べたように弥生時代後期後半～古墳時代にわたっている。住居跡は北側から中央部にかけてそのほとんどが検出されており、特に調査区中央西側では、都合7棟の住居跡が切り合っている。各住居跡の切り合いや時期を纏めると以下のようになる。

【切り合い】

住居2→住居1　　住居9→住居8→土坑6・7

住居10→住居11　　住居12→住居13

住居28→住居27→住居25　　住居15・16→住居32

住居27→住居23

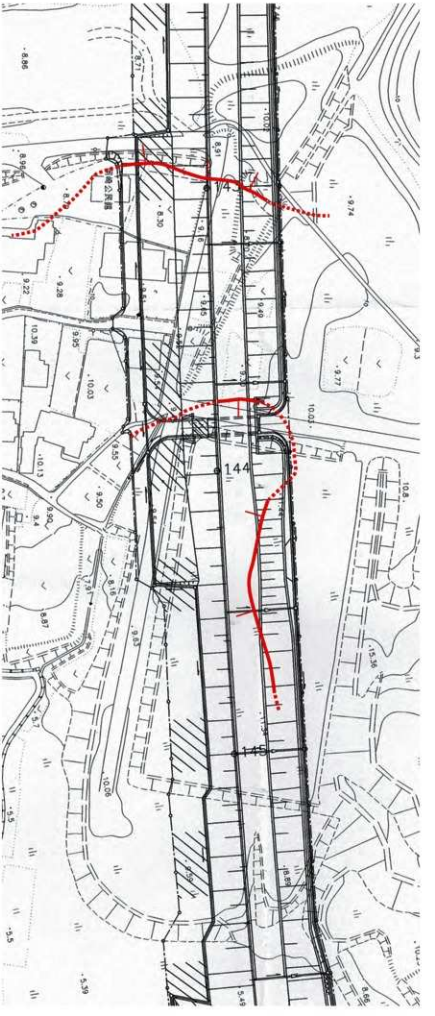
住居26→住居29→住居24　　住居22→住居21

第4表　上片島遺跡検出住居跡時期

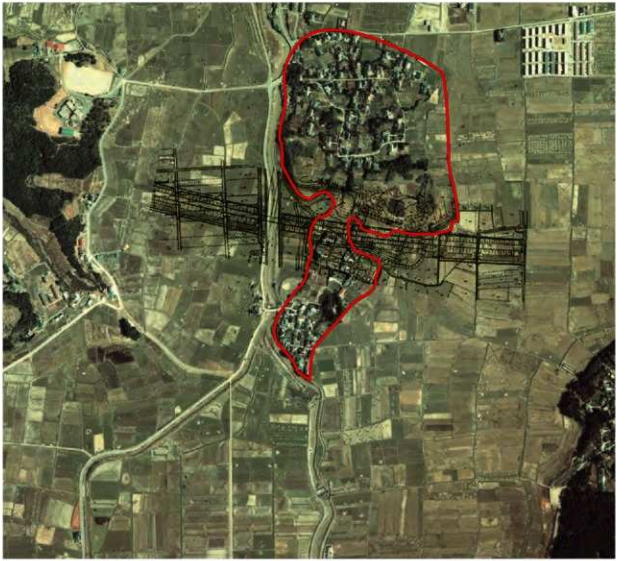
時期	弥生後期後半	終末	古墳初頭			前期前半	前期後半		中期前半	中期後半		後期前半		後期後半
住居跡番号	3	2	8☆	1	19	16	33		14	32	20	4	18	
		6	(11)☆	7	29	22☆	25☆		15		21	5		
		9	(10)	13☆		23☆	24☆							
		28	12	27☆		30								
			17			31								
			(26)											
			34											

◯は円形住居跡 ☆は瀬戸内･山陰系土器出土住居跡

弥生時代後期後半から古墳時代後期にいたるまで連綿と住居跡が作られており、特に弥生時代終末～古墳時代初頭に住居跡が多いことがわかる。ただし、切り合いがあることから終末期～古時代初頭にかけての住居は多くても10棟程度と考えられ、古墳時代前期には8棟程度、中期には



第 84 図　上片島遺跡群旧地形復元図 (1 ／ 1,000)



第 85 図　上片島遺跡群航空写真合成図

2 ～ 3 棟程度、後期には 3 棟程度の住居が存在していたと推定される。つまり、弥生時代後期に住居跡が作り始められ、終末期～古墳時代前期にかけて多くの住居が営まれ、中期～後期にかけてはやや住居数が減少するものの存続し、後期後半頃には見られなくなると言える。ただし、住居跡の残存状況を見ると中央部が薄く残りが悪いことから、東側にかけては削平のため残っていない可能性があり、本来はより多くの住居跡が存在していたものと考えられる。

円形を呈する弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡について

本調査区においては、円形を呈する弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡が 10・11・26 号住居跡の 3 棟（34 号住居跡を含めれば 4 棟）検出されている。当該時期の円形住居跡は、苅田町内はもちろんのこと京築地域においてもほとんど検出例はなく、管見の限りでは、行橋市下稗田遺跡（長嶺・末永編 1985、5 柱穴）、築上郡吉富町和井田遺跡（平成 23 年度九州歴史資料館による調査、2 柱穴、整理中につき未報告）でそれぞれ 1 棟検出されているのみである。

当該時期の円形住居跡は他地域では大分平野ならびに瀬戸内地域で多くの類例があり、本遺跡

で検出された例は他地域からの伝播、地域内での前時期からの残存のどちらかの可能性があるといえる。

大分平野においては弥生時代中期から方形住居跡が出現するものの、後期後半まで方形・長方形・多角形・隅丸方形に混じって円形住居跡が一定数存在しており、終末期に方形・長方形に移り変わる。しかしながら終末期および古墳時代前期まで円形住居跡も残っており、周辺の地域とは一線を画す。主柱穴は2・4・6～8本のものと多くのバリエーションが認められる。また、大分平野地域は大型器台が出土するなど西部瀬戸内地域的な要素を多く備えていることが指摘されている（稗田ほか2010、松田1984など）。

瀬戸内地域でも弥生時代中期から方形住居跡が出現し、後期終末～古墳時代初頭には方形が主体を占めるようになる。しかしながら、大分平野と同じく円形住居跡も終末期や古墳時代前期まで残る状況が見られる（亀山ほか1998、谷若ほか1986など）。なかでも広島県や岡山県の南部地域では弥生時代終末～古墳時代初頭においても5～6割の住居跡が円形を呈しており、古墳時代前期には方形住居跡のみになる状況が認められている（唐口2005）。主柱穴は4・6～8本など多くのバリエーションが認められる。

以上の他地域の状況をふまえ、再度本遺跡検出例を検討する。本遺跡で検出された住居跡はいずれも弥生時代終末～古墳時代初頭に属すると考えられ、10・11号住居跡に関しては多柱穴、26号住居跡は柱穴が確認できなかった。また、当該時期の瀬戸内系・山陰系土器が遺跡内の他の住居跡からも一定数出土しており、円形住居跡である10・11号住居跡からは瀬戸内系土器が出土している。下稗田遺跡で検出された円形住居跡も周防地方以東の土器が出土しており交流の結果であろうとされている（長嶺・末永編1985）。これらのことから、本遺跡で検出された円形を呈する弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡は瀬戸内地域からの影響の可能性が高いと考えたい。ただ、同時期の方形住居跡からも瀬戸内系土器が出土しているが、土器の出土状況・セットなど円形住居跡との差異はなく、どのような条件で円形住居が採用されたのかは不明である。

【参考文献】

稗田智美ほか編2010『下郡遺跡群Ⅷ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集　大分市教育委員会

松田政基編1984『尾崎遺跡』大分市教育委員会

亀山行雄ほか編1998『津寺遺跡5』山陽自動車道建設に伴う発掘調査15・岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会

谷若倫郎編　1986『朝倉南甲遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第17集　財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

唐口勉三2005『ひろしまの遺跡』98　財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

B) 焼土坑について

本調査区において火葬土坑と考えられる焼土坑が2基検出された。焼土坑は調査区の南側および東側に2基検出されており、1号が90×120cmの長方形、2号が70cm×140cmの偏五角形である。ともに多量の炭とともに骨片が出土しており、2号からは銭が出土した。銭は全部で10枚出土しており、そのうち6枚は先に述べたように銹着している状態であった。このような出土状況は六道銭として墓に副葬される状況と類似しており（櫻木1991・1995）、六道銭の可能性が高いと考えられる。残りの4枚も比較的まとまって出土しており、「福岡県内では中世には六道銭を6枚

とする習慣が根付いていなかった」との指摘から（櫻木 1995、2009）、6 枚に足りないものの 2 セットあった可能性または 10 枚 1 セットであった可能性がある。土坑底部中央に掘られた溝は、火葬の際の燃焼効率を上げるために掘られたものと考えられ（市本ほか 2000、市本 2007）、大きさも大阪府万町遺跡（乾 1991）で検出されている例と類似している。時期は、出土銭貨は明銭である永樂通寶が最も新しく、流通時期から室町時代～江戸時代初期までの間に収まるものと考えられる（永井 2002）。

福岡県（主に京築地域）内検出の焼土坑との比較

福岡県内において焼土坑と呼ばれる壁面が被熱していたり、炭が多量に出土する遺構は、火葬土坑を含めて多く検出されており、それらとの比較を行い、本遺跡検出例の意義づけを検討する。

京築地域では各地で焼土坑と呼ばれる円形や隅丸方形を呈し、壁面並びに一部床面が被熱する土坑が検出されている。出土遺物は少なく、時期の認定が困難な例が多いが、わずかに出土した土器から中世～近世に属するものとされている。焼土坑の解釈として、築上郡上毛町上の熊遺跡（飛野 1997）や金居塚遺跡（飛野 1997）などでは、焚火やごみ穴と推定され、京都郡みやこ町木山平遺跡（飛野 1988）では立地から古墳との関係性が指摘されている。また、豊前市永久遺跡（棚田 1999）、四郎丸米ヶ谷遺跡（棚田 2003）、薬師寺塚原遺跡（棚田 2008）などでは炭焼き遺構と推定されている。これらはいずれも炭の出土が見られるもの骨片の出土はなく、焼土坑の立地等から墓ではないとした上で、ごみ穴や炭焼きなどの解釈を導き出している。一方で、築上郡上毛町下唐原雨色遺跡（末永ほか 2008）、近世の例である同大塚本遺跡（副島 1998）では現地火葬土坑、つまり荼毘に付した場所とされている。これらは骨片の出土がない土坑も、特に大塚本遺跡では近世墓との位置関係および骨片が出土している土坑と形態が類似していることから、火葬を行い拾骨され他の場所に埋葬されたものとしている。このように多様な解釈があることは、県内の他地域でも同様で、骨片の出土がない以上、焼け方や土坑の形態で機能を一般化することは困難といわざるを得ない（狭川 1989・1990、副島 1998 など）。

一方で、骨片が出土する北九州市白岩西遺跡（川上 1985）、茶屋原遺跡（上村 1980）では隅丸長方形や長楕円形プランで壁面および一部床面が被熱しており、床面に礫が置かれた焼土坑が見られる。このような形態は糸島市奈良尾遺跡（中間 1991）や朝倉市志波桑ノ本遺跡（小池 1997）などでも見られ、底部に隙間を作ることで熱効率を上げる工夫がなされたものと考えられる。ただし、大塚本遺跡 8 号焼土坑や奈良尾遺跡 1・6・9 号火葬土坑のように床面が平面で礫もないものの、骨片の出土から明確に火葬施設といえる例も存在している。また、形態的には 50cm ほどのものから 150cm 以上のものまで多様であり、骨片があること、石などが床に置かれていること以外に上述の焼土坑との差異は見出せない。

以上のように、骨が出土し明確に火葬施設と理解されるものと、骨片が出土しない焼土坑は形態や焼け方がほぼ同じで、ともすると同じ遺構のように見える。また、実際に犬の火葬を行った実験では壁面のみが被熱し、同様の痕跡が残ることが示されている（深井ほか 1988）。ただし、西日本には完全に拾骨する例が少ないこと、炭は形のまま検出しているのに、僅かな骨片すら出ないことから、全てが荼毘施設とは考えられない（楢崎 2007）。また、大塚本遺跡では、骨片が出土していない例も付近の近世墓に火葬した人骨を埋葬したためとされている。しかし、人骨の報告から、残

存状況が悪いものの、全ての火葬骨が埋葬されているとは考えられず、焼成が悪いもの、変形で歪んだり細片化しているものがあることから、骨片が出土していないものは火葬施設ではない可能性が高いのではないだろうか。ただし、きれいに人骨を掃除した後、他の用途として利用したものがないとはいえないことから、立地で墓に近いもののうちは検討が必要だろう。

他遺跡の焼土坑の状況から以下のように纏められる。

①本遺跡で検出された焼土坑は骨片が出土していることから、火葬施設もしくは火葬墓と考えられる。

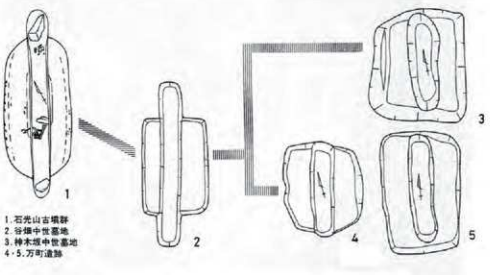
②隅丸方形の形態は、各地で検出される焼土坑と類似しており、焼け方も壁面だけが焼けているものが多く、類似していることから、骨片が出土していないものについては火葬に関わる施設とは断定できない。

③火葬施設の多くは石を床面に設置し、燃焼効率を上げる工夫を凝らしている。

④火葬、焚火もしくはその他にしても、遺構としては同じものとして残る可能性がある。個々に出土遺物や立地、他遺構との関係で検討していく必要がある。

中央に溝を持つ焼土坑および時期の検討（第 86 図）

上に他遺跡の焼土坑との比較を行い、壁面が焼けているからといって火葬に関わる施設とは断定できないことを示した。次に本遺跡の例に立ち返り、中央に溝を持つ焼土坑について検討したい。先に述べたように火葬施設の多くは石を床面に設置するもので、溝を切るものは少なくとも京築地域には今のところ見当たらず、全てを網羅したわけではないが福岡県にも寡聞にして発見できない（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983、狭川 2004）。また、土壙墓で床面に溝を持つものは、福津市練原遺跡 SK-41 で認められるものの（池ノ上 1999）、本遺跡検出火葬土坑の中央の溝が燃焼効率を上げるために作られたとすれば、単純に土壙墓との比較は難しいと考える。一方、関西地方では大阪府万町遺跡でまとまって検出されている。万町遺跡では周辺遺跡の検討を含め、時代とともに煙道が退化するという第 86 図のような変遷が示され、墓底のみに溝を持つ万町遺跡例（4・5）は永楽通寶の出土から 15 世紀以降という時期が示されている（乾 1991）。他の遺物が少ない状況で、構造の類似だけを用いて関西との関係性を論じることはできない。しかし、現状で他に有力な手がかりが少ないことから、本遺跡出土例の時期も、永楽通寶の出土および江戸時代以降多くの墓に副葬される寛永通寶を含まないことか



第 86 図　火葬土壙の変遷（乾 1991 より転載、一部改変）

ら15世紀代に属するとしておきたい。もちろん関西を含めた他地域の例では、中央に溝をもつ焼土坑が時期や地域でまとまって見られるものではないため、今後資料が増える中で、時期的変化ではなく変異の中の一類型として捉えられる可能性もある。

また、2号土壙に関しては、六道銭と考えられる銭が出土していることから墓である可能性がある。ただ、人骨が火葬したまま全て残っていると思えず、拾骨していることは間違いない。そうなれば拾骨して別の場所に埋葬しているにも拘らず、残ったものにも副葬し、墓として扱っていることになる。火葬土坑に銭が副葬される例は小郡市津古土取遺跡（櫻木 2009）や先述した万町遺跡にもあるが、付近に火葬墓が見つかっていない現段階では、例の提示に留めておきたい。

補記：苅田町内では現在整理中であるが、同様の焼土坑が「百合ヶ丘遺跡」、「上片島遺跡」で検出されている。（若杉氏の御教示による。）また行橋市延永ヤヨミ園遺跡でも、整理中だが時期不明の火葬土坑が検出されている。

【参考文献】

池ノ上宏編 1999『練原遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第15集　津屋崎町教育委員会

市本芳三ほか編 2000『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第57集　財団法人大阪府文化財調査研究センター

市本芳三 2007「大阪府栗栖山南墳墓群の調査」『墓と葬送の中世』(狭川真一編)pp.239-260, 高志書店

乾哲也編 1991『万町遺跡』和泉丘陵内遺跡発掘調査報告Ⅱ　和泉丘陵内遺跡調査会

上村佳典編 1980『茶屋原遺跡』北九州市文化財調査報告書第37集　財団法人北九州市教育文化事業団・北九州市教育委員会

川上秀秋編 1985『白岩西遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第43集　財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編 1983「古代・中世の墳墓について」埋蔵文化財研究集会

狭川真一編 1989『宝満山遺跡』太宰府市の文化財第12集　太宰府市教育委員会

狭川真一編 1990『太宰府天満宮Ⅱ』太宰府天満宮境内地発掘調査報告書第2集／太宰府市の文化財第15集　太宰府市教育委員会

狭川真一編 2004『中世墓資料集成―九州・沖縄編(1)―』中世墓資料集成研究会

櫻木晋一 1991「九州地域における中・近世の銭貨流通―出土備蓄銭・六道銭からの考察―」『九州文化史研究所紀要』36: pp.87-122, 九州大学文学部九州文化史研究施設

櫻木晋一 1995「勝先遺跡および福岡県下の出土六道銭について」『勝先遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第5集：pp.173-186, 福岡県教育委員会

櫻木晋一 2009『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会

末永浩一ほか編『下唐原伊柳遺跡Ⅱ(遺構編)・下唐原雨色遺跡』上毛町文化財調査報告書第7集　上毛町教育委員会

嗣島邦弘 1998『大塚本遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集　福岡県教育委員会

棚田昭仁編 1999『青畑向原遺跡・永久遺跡』豊前市文化財報告書第12集　豊前市教育委員会

棚田昭仁編 2003『四郎丸米ヶ谷遺跡』豊前市文化財報告書第18集　豊前市教育委員会

棚田昭仁編 2008『久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡』豊前市文化財報告書第24集　豊前市教育委員会

飛野博文編 1988『木山平遺跡』犀川町文化財調査報告書第2集　犀川町教育委員会

飛野博文 1997『桑野遺跡　上の熊遺跡・小松原遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集　下巻　福岡県教育委員会

飛野博文編 1997『金居塚遺跡Ⅱ』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集　福岡県教育委員会

永井久美男 2002『新版　中世出土銭の分類図版』高志書院

楯崎修一郎 2007「群馬県出土中世火葬遺構」『研究紀要』25：pp.101-120, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

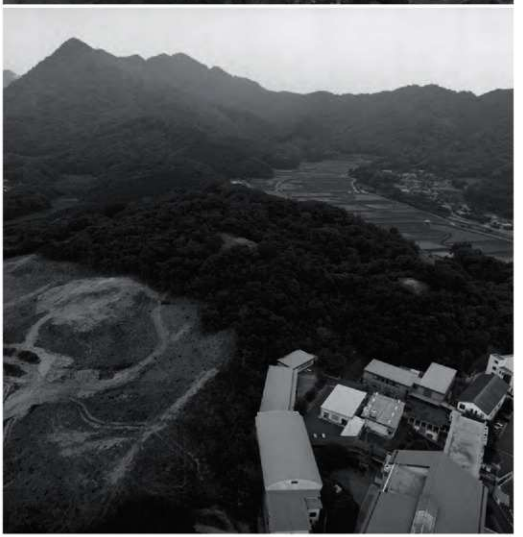
楯崎修一郎 2007「火葬人骨と考古学」『墓と葬送の中世』(狭川真一編)pp.107-126, 高志書店

深井明比古・市橋重喜編 1988『養久・乙城山』兵庫県文化財調査報告書第58冊　兵庫県教育委員会

森本徹 1991「火葬墓と火葬遺構―群集墳周辺にて確認される「焼土坑」の検討―」『大阪文化財研究』2: pp.11-25, 財団法人大阪文化財センター

図　版

1．岩屋古墳群遠景（南から）



2．岩屋古墳群遠景（南西から）

図版２

1．1号墳
（町教委トレンチ
再掘削後：南から）

2．1・8号墳完掘後（南から）

１．１号墳完掘後（空中写真）

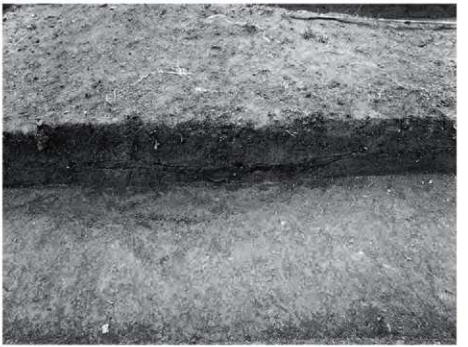
２．２号墳完掘後（南東から）

図版４

１．１号墳調査前全景（南西から）

２．１号墳　１号主体部検出状況
（南西から）

３．１号墳　１号主体部焼土面検出状況
（南西から）



１．１号墳　１号主体部土層（北西から）

２．１号墳　１号主体部土層（西から）

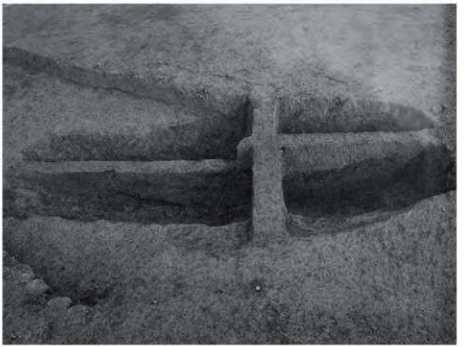
３．１号墳　１号主体部完掘後（南東から）

図版６

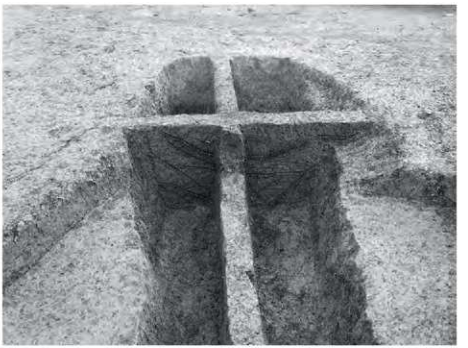
1．1号墳　2号主体部（東から）

2．1号墳　2号主体部完掘後（南西から）

3．1号墳　3号主体部検出状況（北から）



１．１号墳　３号主体部土層（西から）



２．１号墳　３号主体部土層（北から）

３．１号墳　３号主体部完掘後（南西から）

図版８

1．1号墳 Aトレンチ土層（西から）

2．1号墳 Bトレンチ土層（東南から）

3．1号墳 Bトレンチ土層（西から）

1．1号墳 Cトレンチ土層（西から）

2．1号墳 Dトレンチ土層（北から）

3．1号墳 C-Dトレンチ間
No.1土器出土状況 （西から）

図版 10

1．2号墳　調査前全景（北東から）

2．2号墳　1号トレンチ（東から）

3．2号墳　1号トレンチ（南東から）

1．2号墳　2号トレンチ（北から）

2．2号墳　2号トレンチ（北から）

3．2号墳　表土除去後（南から）

図版 12

1．2号墳　表土除去後（北西から）

2．2号墳　主体部検出状況（南東から）

3．2号墳　主体部土層（南東から）

1．2号墳　主体部土層（南西から）

2．2号墳　主体部付近トレンチ
（南西から）

3．2号墳　1号石棺墓（北から）

図版 14

1．2号墳　1号石棺墓（北から）

2．2号墳　1号石棺墓完掘後（北から）

3．2号墳　1号石蓋土坑墓（南東から）

1．2号墳　1号石蓋土坑墓完掘後
（北東から）

2．2号墳　1号土坑墓検出状況
（北から）

3．2号墳　1号土坑墓完掘後（北から）

図版 16

1．8号墳　1号主体部（北北西から）

2．8号墳　1・2号主体部（北北西から）

3．8号墳　1号主体部（南から）

1．8号墳　2号主体部（北西から）

2．8号墳　1号主体部（南から）

3．8号墳　1・2号主体部土層（南から）

図版 18

1．8号墳　1号主体部土層（北から）

2．8号墳　2号主体部土層（南から）

3．8号墳　1・2号主体部（東から）

1．8号墳　1号主体部（北から）

2．8号墳　2号主体部（南から）

3．8号墳　1号主体部粘土検出状況
（東から）

図版 20

1．8号墳　1号主体部完掘後（東から）

2．8号墳　2号主体部完掘後（東から）

3．8号墳　No.2 周溝土器出土状況
（西から）

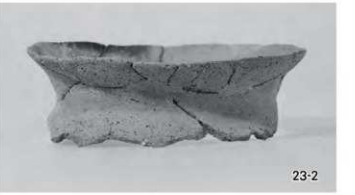
1．8号墳　東西ベルト西側（北から）

2．8号墳　東西ベルト東側（北から）

3．8号墳　南北ベルト北側（西から）

図版 22

1号墳 出土土器



2号墳 出土土器

8号墳 出土土器

岩屋古墳群 出土土器

1．調査区より南側を望む

2．8・9号住居跡周辺全景
（上から）

図版 24

1．26～28 号住居跡周辺全景（上から）

2．1～4 号溝周辺全景（上から）

1．1 地区全景（北から）

2．A トレンチ全景（南から）

3．A トレンチ南壁（北から）

図版 26

1．Bトレンチ全景（南から）

2．Bトレンチ杭列（西から）

3．Cトレンチ全景（東から）

1．Dトレンチ南壁（北から）

2．Eトレンチ全景（西から）

3．Eトレンチ東壁（南西から）

図版 28

1．2地区全景（北から）

2．3地区全景（Ⅲ区、南から）

3．3地区全景（Ⅳ-2区、南から）

1．1号住居跡検出状況（南から）

2．1号住居跡完掘（西から）

3．1号住居跡炉跡（西から）

図版 30

1．2号住居跡Ｐ－１出土状況
（西から）

2．3号住居跡完掘（南から）

3．3号住居跡炉跡（北から）

1．4号住居跡完掘（西から）

2．5号住居跡出土状況（東から）

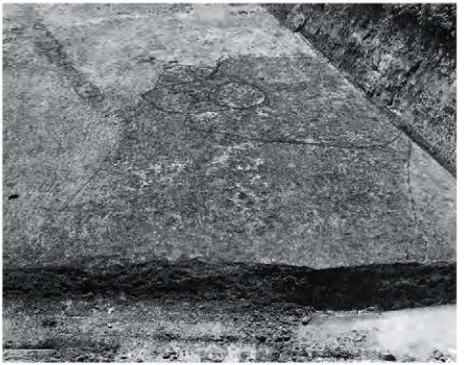
3．5号住居跡Ｐ－1土層（南から）

図版 32

1．5号住居跡Ｐ－１出土状況（北から）

2．6号住居跡完掘（東から）

3．7号住居跡焼土（東から）



1．8・9号住居跡検出状況（北から）

2．8号住居跡北壁（南から）

3．8号住居跡西壁（東から）

図版 34

1．8号住居跡東壁（西から）

2．8号住居跡炉跡（南から）

3．8号住居跡西側完掘（東から）

1．9号住居跡東壁（西から）

2．9号住居跡南壁（北から）

3．9号住居跡Ｐ－1出土状況（東から）

図版 36

1．8・9号住居跡完掘（北から）

2．10・11 号住居跡検出状況（東から）

3．10 号住居跡貼床粘土検出状況（東から）

1．10 号住居跡炉跡検出状況
（西から）

2．10 号住居跡炉跡出土状況（北から）

3．12・13 号住居跡完掘（北から）

1．12・13 号住居跡完掘（東から）

2．12 号住居跡出土状況（西から）

3．12 号住居跡出土状況 2（西から）

1．12 号住居跡出土状況３（西から）

2．14 号住居跡出土状況（東から）

3．14 号住居跡出土状況２（西から）

図版 40

1．14 号住居跡出土状況３（北から）

2．14 号住居跡出土状況４（北から）

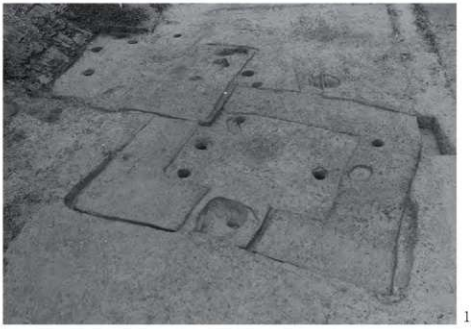
3．14 号住居跡出土状況５（東から）

1．15 号住居跡完掘（西から）

2．15 号住居跡出土状況（北から）

3．16 号住居跡東側完掘（西から）

図版 42

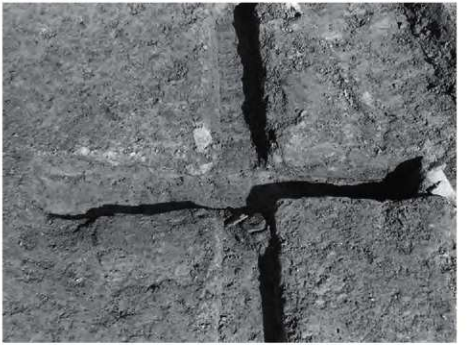


1．15・16・32 号住居跡完掘（南から）

2．18 号住居跡完掘（南から）

3．19 号住居跡完掘（北西から）

1．20 号住居跡完掘（北東から）



2．20 号住居跡カマド土層（南西から）

3．20 号住居跡カマド（南東から）

図版 44

1．20 号住居跡屋内土坑土層（南西から）

2．20 号住居跡屋内土坑完掘（南西から）

3．21 号住居跡完掘（南西から）

1．22 号住居跡西壁（南東から）

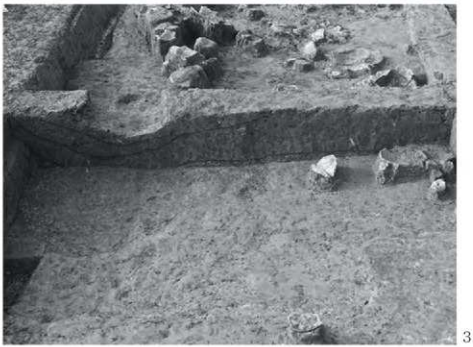
2．22 号住居跡完掘（北東から）

3．22 号住居跡屋内土坑土層（南西から）

図版 46

1．22 号住居跡屋内土坑出土状況
（北西から）

2．23 号住居跡南壁（北東から）



3．23 号住居跡南壁２（北東から）

1．23 号住居跡北壁（南東から）

2．23 号住居跡完掘（北西から）

3．23 号住居跡出土状況（南東から）

図版 48

1．23 号住居跡屋内土坑土層（南西から）

2．24 号住居跡東半上面（南西から）

3．24 号住居跡東半完掘（南から）

1．24・26 号住居跡完掘（北から）

2．24 号住居跡Ｐ－２出土状況
（西から）

3．24 号住居跡Ｐ－１出土状況
（西から）

図版 50

1．24 号住居跡炉跡土層（北東から）

2．24 号住居跡炉跡出土状況（西から）

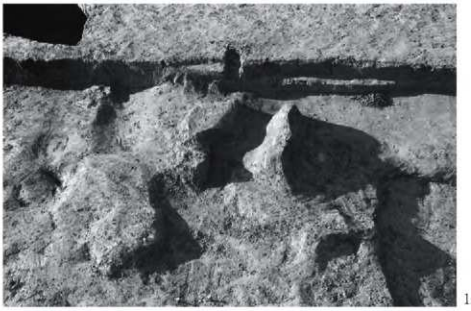
3．25 号住居跡北壁（南西から）

1．25 号住居跡東半出土状況（西から）

2．25 号住居跡西半完掘（西から）

3．25 号住居跡西半出土状況（西から）

図版 52



1．25 号住居跡カマド（南東から）

2．25 号住居跡屋内土坑出土状況
（北西から）

3．26 号住居跡焼土検出状況（北から）

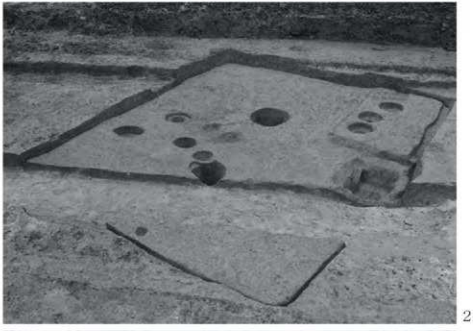
1．26 号住居跡焼土塊土層（東から）

2．26 号住居跡粘土塊出土状況
（北から）

3．27 号住居跡完掘（西から）

図版 54

1．29 号住居跡完掘（北西から）



2．30 号住居跡完掘（東から）

3．33 号住居跡西壁（北東から）

1．33 号住居跡北壁（南東から）

2．33 号住居跡完掘（南東から）

3．33 号住居跡炉跡土層（東から）

図版 56

1．33 号住居跡炉跡完掘（南から）

2．33 号住居跡屋内土坑土層（東から）

3．33 号住居跡屋内土坑完掘（北西から）

1．4号土坑完掘（北から）

2．5号土坑北西壁上層（南東から）

3．5号土坑南東壁上層（北西から）

図版 58

1．5号土坑出土状況（北から）

2．5号土坑北西壁下層（南東から）

3．5号土坑南東壁下層（北西から）

1．5号土坑完掘（北から）

2．6号土坑北壁（南から）

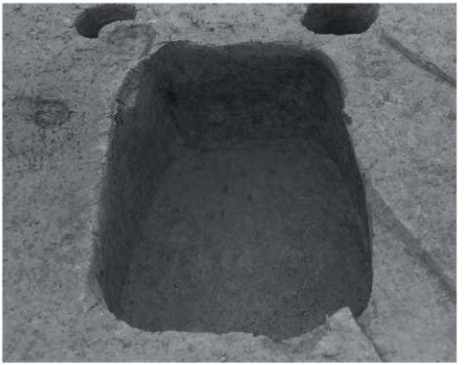
3．7号土坑北壁（南から）

図版60

1．6・7号土坑完掘（南から）

2．8号土坑北壁（南から）

3．10号土坑東壁（西から）



1．10 号土坑完掘（南西から）

2．11 号土坑東壁（北西から）

3．11 号土坑完掘（南西から）

図版 62

1．1 号溝完掘（西から）

2．1 ～ 4 号溝南壁（C-C´）（北から）

3．1 ～ 4 号溝西壁（B-B´）（東から）

1．1～4号溝北壁（A-A′）（南から）

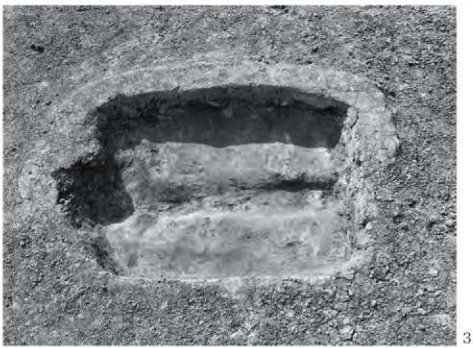
2．5号溝西壁（東から）

3．9号溝北壁（南から）

図版 64

1．25 号溝南壁（北から）

2．1 号土壙出土状況（西から）

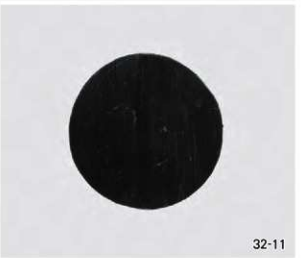


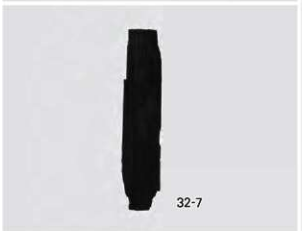
3．1 号土壙完掘（東から）

1．2号土壙完掘（東から）

2．3号土壙出土状況（北から）

3．3号不明遺構東壁（西から）





上片島遺跡群出土遺物 1

33-17

34-21

34-22

33-18

33-19

34-23

33-20

34-24

上片島遺跡群出土遺物2

41-9

47-8

41-11

47-13

43-9

47-2

48-2

47-3

48-3

上片島遺跡群出土遺物3

48-4

48-7

50-1

50-2

50-3

50-5

50-6

50-7

51-13

上片島遺跡群出土遺物4

51-15

51-25

51-16

51-26

51-18

51-27

51-19

52-1

51-24

52-2

上片島遺跡群出土遺物5

52-3

52-12

52-6

52-13

52-7

55-1

52-8

55-2

52-9

55-6

上片島遺跡群出土遺物6

図版 72

55-7

58-17

55-15

58-19

55-23

58-20

58-12

61-3

58-15

61-6

上片島遺跡群出土遺物7

61-8

61-14

61-10

63-8

61-11

63-9

61-12

63-12

61-13

66-8

上片島遺跡群出土遺物8

図版 74

66-13

72-15

72-4

72-16

72-8

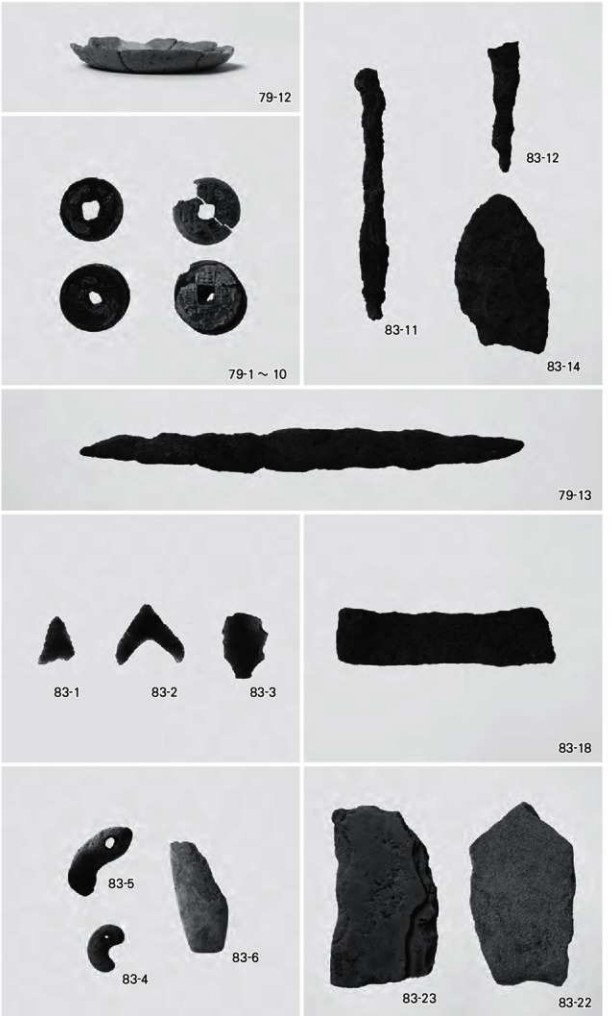
72-18

72-11

72-23

72-14

74-5



上片島遺跡群出土遺物 10

図版 76

1．岩屋古墳群調査風景１

2．岩屋古墳群調査風景２

3．上片島遺跡群調査風景

報告書抄録

ふりがな	いわやこふんぐん・かみかたしまいせきぐん
書名	岩屋古墳群・上片島遺跡群
副書名	福岡県京都郡苅田町所在遺跡群の調査
巻次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	5
編著者名	城門義廣（編）・進村真之
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒836-0106　福岡県小郡市三沢 5208－3
発行年月日	平成 25（2013）年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		（㎡）	
いわやこふんぐん 岩屋古墳群	ふくおかけんみやこぐんかんだまち かみかたしま 福岡県京都郡苅田町上片島 1559－1 ほか	40621	900189	33° 44′ 49″	130° 57′ 06″	2007.4.18 ～ 2008.3.17	5,000㎡	東九州自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩屋古墳群	古墳	古墳前期	古墳　3 基	土師器	

遺跡の概要：
本遺跡は丘陵の先端部に造られた古墳時代前期の古墳群である。本調査においては、8 基からなる古墳群のうち 3 基の調査を行った。まず立地的に最も優位に位置する 1 号墳が築造され、その後、2 号墳が築造されたと考える。今回、新たに発見された 8 号墳についても、2 号墳との関係は不明であるが、1 号墳が築造されたのち、時期を隔てずして築造されたものと考えている。その他の古墳についてはその後、順次、築造されていったものと考える。

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		（㎡）	
かみかたしまいせきぐん 上片島遺跡群	ふくおかけんみやこぐんかんだまち かみかたしま 福岡県京都郡苅田町上片島	40621	900076 900077	33° 44′ 20″	130° 56′ 55″	2009.5.7 ～ 2009.10.2 2011.1.24 ～ 2011.3.28 2011.10.21 ～ 2012.3.15	4,810㎡	東九州自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上片島遺跡群	集落跡	弥生 古墳 古代 中世 近世	住居跡 住居跡 土坑 溝・土壙墓 溝	弥生土器・石器・鉄器・土師器・須恵器 土製品・木器・陶磁器・銭貨・人骨	弥生時代終末～古墳時代初頭の円形住居跡 火葬土坑

遺跡の概要：
本調査区において、2地区ならびに3地区では地形の落ちが検出され、古くから瓢箪形の地形であったことがわかった。遺構は主として3地区で検出され、弥生時代後期後半～古墳時代にわたり、住居跡を中心とした集落が営まれており、その後も古代、中世、近世における区画溝や墓などが検出されている。遺跡内の他の調査地点においてもこれらの時期を中心とした遺構が検出されており、独立丘陵であることを考え合わせても、丘陵上で一体の集落をなしていたと想定される。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
J H	2117104
登録年度	登録番号
24	4

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
－5－

福岡県京都郡苅田町所在遺跡群の調査
岩屋古墳群・上片島遺跡群
平成 25 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館
〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
印刷　片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15